
とある星の力を使いし者

wawa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある星の力を使いし者

【Nコード】

N2730W

【作者名】

wawa

【あらすじ】

ある男がいた。男は幼少のころ星と突然繋がりの星の始まりやその終わりなど全て知ってしまう。男はその真理を見て絶望して廃人と化してしまう。しかし、ある女性達と会話する事で何とか立ち上がることができた。それでも男は積極的にまわりと関係を作ろうとはしなかった。男の親はそれを見かねて男を学園都市に送ることにする。そして上条当麻と言う男に会いそこから物語が始まる。※この小説は病院送り並みの中二病や目を背けたくなるくらいのご都合主義などと言った要素がたくさん含まれています。また主人公の

能力は無敵と言うのは能力です。それらが嫌な人は読まない方がいいかもしれません。それでも良い方は暖かく見守ってください。

プロローグ（前書き）

9月と言いながら書きたくて書いてしまった（笑）
という訳でとあるをがんばって書いていきます!!
みなさん暖かい目で見えていってくださいm（| |）m
m

プロローグ

とある第7区の男子学生寮。

ビビビ！！と目覚まし時計が部屋中に響き渡る。

男、上条当麻はその目覚まし音を聞くとうつすらと目を開ける。

まだ眠いのか目が完全に開いていなかった。

それでも何とか目を開ける。

「さて、今日から高校の始業式だな。まずは第一印象を大事に・・・」

そう言いながら今も鳴り響く目覚まし音の音を鬱陶しそうに見て、その時計の時間を確認するついでにボタンを押す。

音が消えると同時に、今の時間を見て上条の動きが止まる。

現在時間 8時15分

上条の額に嫌な汗が流れる。

（確か、始業式の始まる時間は8時30分・・・）

上条は昨日の寝る前に時計の目覚まし時間を設定し忘れていることに気づく。

今の時間から此処から上条の高校まで走っても間に合うかどうか危険な時間である。

「ち・・・遅刻だああああああああああ！！！！！！」

一気に眠気が吹き飛び急いで着替える上条だった。

「ち……遅刻だあああああああああ……！！！！！！」

そんな叫びが隣の部屋まで聞こえ寝ていた男が目を開ける。

（ちっ……誰だ？あんな大声で叫んだ馬鹿は……）

自分が寝ている所を邪魔されて少し不機嫌そうな顔をする。
隣は誰だったか考えるがすぐに考えるのをやめる。

（隣が誰だった何てでもいいか……）

そう自己解決して麻生恭介は時計を確認する。

時刻は8時16分

彼も今日から高校の始業式が始まる。

普通の高校生なら今の時間を見て上条の様に慌てるのだが麻生は比較的に落ち着いていた。

（始業式か……別に行かなくても大丈夫だろう。
行かなかった所でどうなる訳でもないからな……）

そう思いもう一回ベットに寝転がり二度寝をしようとする。
しかし、目を閉じてても一向に睡魔がやってこない。

麻生はまた舌打ちをするとベットから起き上がり洗面所に行き顔を洗う。

そして自分の顔を鏡で見る。

そこには肌が若干焼けていて髪の色は白、瞳の色は黒・・・紛れもなく麻生恭介の顔がそこにあった。

（変わらないな・・・何も・・・）

そう思い隣の部屋から何か物音が聞こえる。

麻生は隣と自分の部屋の間にある壁を一瞥してから服を脱いで麻生がこれから行く高校の制服に着替える。

（眠くないしこのままじゃあ暇だしな・・・始業式に行くか・・・）

麻生はすぐに着替えて鞆を持ち、部屋から出る。

鍵をかけず扉を閉めて高校へ向かう。

すると隣の部屋の扉が激しく開くと男が一人走って出ようとする。
いきなりだったので麻生も避ける事も出来ず、対して男の方も麻生が居ると思ってもなかったらしく、結果二人はぶつかった。

「いてっ・・・あっ・・・悪いな大丈夫か？」

ぶつかった男は同じように尻餅をついている麻生に手を差し伸べる。

麻生はぶつかった男を見る。

男が着ている制服は麻生と同じ制服だった。

男もその共通点に気づく。

「お前も同じ高校なのか？」

「制服を見た限りではそうだな。」

「そうなら急がないと始業式に間に合わないぞ！！！」

男、上条当麻は未だ尻餅をついている麻生に今度は手を取れと言わんばかりの勢いで差し伸べる。

いつもの麻生ならその手を握らず自分で立ち上がり何か一言言うのだがなぜか今回は素直に手を取ってしまう。

麻生が手を握り立ち上がるとそのまま麻生の手を引っ張って走り出す。

「お・・・おい！！！」

「早くしないと始業式一発目から遅刻学生のレッテルを張られるぞ！！！」

（俺は別にそれでも構わないんだけど・・・）

そんな事言っても多分聞かないんだろうな、と思いため息を吐きながら麻生も一緒に走り出す。

もしこの時麻生が二度寝をすれば、もしこの時上条の手を取らず一人でいつも通りにゆっくりと学校に向かえばこの物語は始まらなかった。

これは神が決めた運命なのか・・・それとも星が定めた運命なのか・・・

麻生恭介の物語が始まる。

ブログ（後書き）

質問や意見や改善点などありましたらコメントお願いします。

主人公紹介（前書き）

主人公の設定です。

主人公紹介

名前…麻生 恭介 性別…男 年齢…15歳

人物 もし星と繋がらなければ上条当麻と同じどこにでもいる普通の高校生になっていた。しかし、星と繋がることで普通の高校生とはかけ離れた強さを手に入れてしまう。上条と関わってしまったことで結構な頻度で事件に巻き込まれてしまう。口癖は「通りすがりの一般人Aだ。」

容姿 今の髪色は白。しかし、元の髪色は黒。これは星と繋がってしまったことで全てを知りあらゆる事に絶望してしまい髪の色が白に変色してしまったため。ツンツンした髪型で短髪の部類に入る。肌は若干焼けている。これはよく散歩するので焼けてしまったため。服装は学校がなければ基本的には黒色を中心とした服装になる。よく着る服はf a t eアーチャーが着ている赤原礼装の黒色バージョンで、夏の際は袖がないバージョンを着ている。

性格 とても優しく正義感が非常に強くそのレベルは上条クラスに該当する。老若男女関係なく困っていたらかつての敵であろうと関係なく助ける。しかし、これは星と繋がる前の状態。今の性格はめんどくさがり屋で他人が何をしようと自分に被害が及ばなければ何をしてもいいと言った性格。だが、麻生は何か事件が起きても自分から絶対に動かないが誰かが麻生に助けを頼めば彼はその願いを叶えようと動く。例外で過去に気まぐれで自分から人助けを一度だけ

している。この事を麻生は依頼や願いと言った形で受け止めている（報酬は要求しない）。逆に言えば他人や知り合いが自分の傍で死にかけていても助けてと頼まなければ絶対に助けない。だが、この性格はかつての自分とよく似ている上条と出会う事で少しずつ変わっていく。その影響で自分が事件に関わりその中で知り合いが入院したらリンゴを一個だけ持つ事や知り合いが瀕死の状態でも一応命だけは助けようとする。趣味は散歩。暇な時間は散歩をしており寒い時は1日中ふらふらと散歩している。上条曰く、一生デレる事のないツンデレらしい。

生活 小学生の時から学園都市に住んでいる。住んでいるところは上条と同じ学生寮で上条の隣の部屋。料理はとても上手くレベル的には五和並み。しかし、麻生自体はあまり料理を作らない（そもそも食事も最低限しかとらない）なのに料理の腕は五和並み。家事も一通りできる。彼はレベル0だが親から仕送りなど来ている。だが、麻生は物欲などが全くないのでお金は全く消費されず自然と溜まっている。物欲は全くない為、部屋は引っ越ししてきた時とほとんど変わらない（一応掃除などはしている）。

知能 上条と同じ高校だが頭は非常にいい。一方通行を超えるくらいの頭脳を持っている。これは星と繋がっている事による影響。専門的な知識からアニメや漫画の知識まで幅広く知っており魔術のことか魔道書も全て知っている。それなのに上条と同じ高校にいるかという試験がめんどくさかったから。また自分からその知識を他人に教えようとしなない。あくまで聞かれたことだけを答える（だからと言って聞かれたことを全て答えるわけではない）。

戦闘・能力 レベル0。これは能力測定機を受けた時星の能力を使
っていないかったため。麻生の能力名はない。麻生は「星^{テラ}」という能
力名を付けている。星と繋がっているので自然や物質や気候やさら
には秩序などこの星に関わる物全てを思い通りに変化、利用するこ
とが出来る。また人間には直接触れる事でその肉体や脳や精神に干
渉することができ、傷を治すことや記憶も操作もできる。しかし、
上条には触れても「幻想殺し」が邪魔をして干渉することが出来な
い。身体能力は普通のレベルだが星の力を使い戦闘経験や体術や武
器の扱いなどは身体に刻んでいるので肉弾戦なら神裂（聖痕なし）
と互角に戦えるほど身体能力を向上させている。能力の使い方次第
では圧倒することも可能。また、星の力で自身の想像した物を物質
化させることが出来る。これは元からその物質は存在していたと星
が認識しているので幻想ではなくなるので「幻想殺し」でも消すこ
とはできない（しかし、魔力や呪いなどその物質に異能力が付加
されていれば破壊することはできる）。戦闘手段は多才で空間のあ
る程度操り、魔術なども使用可能。また神代兵器を具現化させそれ
を武器にして戦い、大気などの自然も利用して敵の魔術や能力を完
璧に封じることが出来る。無敵に思える能力だが実は欠点がある。
1日に星の能力の時間は30分しか使えない。しかし、星の能力が
切れても身体能力は身体に刻んでいるので無くなることはない。能
力制限時間もあるが麻生はこの能力を嫌っているので日常生活では
ほとんど使用しない。また、視覚や聴覚など五感を惑わす魔術や能
力など麻生がその能力を受けてもいいと思わない限り星の自動補正
がかかりそれを全て受け付けない。また、彼も上条のように言葉で
攻撃することもある。麻生曰く彼を殺す事が出来るのは神様や天使
悪魔など人外でなければ殺せないらしい。アレイスターはどうして
その情報を知ったかは分からないが麻生の能力は二〇〜三〇%辺り

の力しか使えていないらしい。

人間関係　星と繋がる前までは比較的友達に居たのだが星と繋がってからはその友好関係は廃れていき今は友と呼べる人は誰もいない。しかし、上条と関わることでその人脈はどんどん増えていく。麻生が廃人になった時、それを治療する為に会った科学者の芳川桔梗とその友人の黄泉川愛穂や学園都市でたまたま会った吹寄制理と会話する事で麻生は再び生きる気力を出すことが出来た。その為、彼女たちには少なからず恩を感じている。

主人公紹介（後書き）

こんな感じです。思いついたことや話が進むことでこのプロフィールは更新するかもしれません。

第1話（前書き）

ここら辺から結構時間が飛びます。

第1話

麻生は学校の窓から外の景色をぼくっと見つめている。

あの始業式には何とかギリギリに間に合ったが先生達の間では結局目をつけられることになってしまった。

麻生はやっぱり二度寝をしていればよかったと後悔しながら始業式で校長の長い話を聞かされながら思う。

クラス分けは上条と同じクラスになった。

上条と麻生はあの始業式の後、名前を教えあい（麻生は教える気はなかったのだが上条が何度もしつこく聞くので仕方なく教えた）家も近いので行き帰りはよく一緒に行動している。

これも上条が勝手についてきてるので一緒に行動しているかと言われれば違うかもしれない。

部屋も隣だから麻生が学校をさぼろうとしても上条が部屋まで押しかけて強引に連れて行くのでさぼることも出来なくなっていた。

（ちっ・・・面倒な奴に捕まったな。）

麻生は窓の外の景色を見ながら思う。

そんな時、授業中にぼくっとしている麻生を見た教師、月詠小萌は麻生に注意する。

一年七組の担任であり身長一三五センチとどう見ても一二歳くらいにしか見えないこの高校の七不思議の一つにも数えられる教師だ。

「こらっく！！麻生ちゃん！！先生の授業中に何ぼくっとしているんですか！！！」

その注意を聞いた麻生は視線を小萌先生に向けず口だけ動かす。

「気にしないでください、先生。
俺なんかの為に授業を止めたら皆に迷惑ですよ。」

「先生は麻生ちゃんがちゃんと授業を聞くまでは何度でも注意する
のです!!」

「じゃあ俺はこのクラスに存在していないと思って授業してください。
い。」

「大事な生徒をそんな風に思えないです!!」

麻生はこれ以上話しても平行線を辿ると思ったのか視線を小萌先生
の方に向ける。

それを確認した小萌先生はにっこりと笑うと授業を再開する。
そして授業が全て終わり放課後。

「麻生、一緒に帰ろうぜ。」

「勝手にしろ。」

適当に答えて鞆を持つ、麻生。
そんなやり取りを見ていた青髪ピアスは言う。

「カミさんと麻生はほんま仲ええな。」

「そうか？」

「部屋も隣だから普通じゃね？」

「僕だったら部屋が隣でも一緒に帰らんわ。
あつ、女の子やったら話は別やで。」

「お前は女の子だったら誰でもいいんだろう。」

「そんなことないよ。」

僕にだってちゃんと好みあるよ。」

二人が話をしていると麻生は会話に入らず教室から出ようとする。上条は視界の端で麻生が教室から出ようとするのが見え、麻生を引き止める。

「待てよ、麻生!!」

俺も一緒に帰るって!!」

急いで鞆を持ち麻生を追いかける、上条。

それを見た青髪ピアスは思う。

「もしかして麻生とカミヤんがこんなに仲ええんは二人の間に肉体関係が……」

「そんなわけあるか!!!」

全力で否定しながら上条は麻生を追いかける。

麻生に追いついた上条は二人並んで歩いて帰っている。

二人が歩いている道には風力発電のプロペラが見えたり二人の間をドラム缶に車輪をつけた警備ロボットが追い越していく。

学園都市。

東京西部を切り拓いて作られたこの都市では「超能力開発」が学校のカリキュラムに組み込まれており二三〇万の人口の実に八割を占める学生達が日々「頭の開発」に取り組んでいる。

そしてこの学園都市は能力開発以外の科学技術も最先端の技術などが使われており外と比べると数十年分くらい文明が進んでいると言われている。

上条と麻生も日々「頭の開発」をしているのだがレベルは二人とも0。

所謂、無能力者である。

「あと一か月とちよいで夏休みだな。」

「その夏休みにお前は補習が入ってくるんじゃないのか？」

最初は楽しみな顔をしていた上条だが麻生に指摘されて目に見えて落ち込む。

上条はそれほど頭はよくない。

赤点や補習など毎回引つかかるくらい成績が悪い。

麻生もそれほど成績は良くはないが補習にかかるほど成績は悪くない（本来、麻生は頭が非常に良いのだが本人はめんどろつと言う理由でテストなど適当にしているから）。

すると上条が前を見た時歩くのをやめる。

麻生も一応歩くのを止めて上条が見ている視線を追う。

その先には一人の男の学生に何人かの不良が囲んでいる。

おそらく金でも要求しているのだろう、と麻生は考えるが俺には関係ないことだ、と無視しようとするが……

「麻生、助けに行くぞ。」

この男、上条当麻が真剣な表情で麻生に言う。

「行くならお前一人で行け。」

「あの数相手に俺一人だけじゃあ勝つ事は難しい。けどこっちが二人だったらまだ勝てる可能性が残っている。」

「俺はあの男に助けてと頼まれた訳でもない。だから、俺が助けに行く理由にもならない。」

「お前は頼まれなかったら助けにいかないのか？」

「そうだ。」

「なら、俺がお前に頼む。一緒にあいつを助けてやってくれ。」

その言葉を聞いて麻生は沈黙する。そして深くため息を吐く。

「相手は5人。俺が3人相手するからお前は残りを倒せ。」

その言葉を聞いて一瞬驚いたがすぐに笑みを浮かべ不良達の所に走っていく。

（あいつに関わっているとどうも調子が狂うな。）

そう思いつつ麻生も不良達の所まで走る。上条が不良達に何か言うとお上条は顔を殴られてそこから喧嘩が始まる。

麻生は上条の後ろから殴ろうとする男の襟元を掴み右足で男の両足

を払う。

男は後ろから引っ張られるので後ろに体重がかかりその運動を利用して背負い投げの如く男を投げ飛ばす。

地面に叩きつけられて気絶する、男。

振り返ると別の不良がポケットからナイフと取り出すと麻生に突き刺してくる。

しかし、何度も突き刺してくるがそれを簡単にかわしていく。

そして不良のナイフを人差し指と中指の間で挟む。

不良がそれに驚いている内に顎を打ち上げて気絶させる。

（あと一人・・・早く終わらせて寝るか。）

上条の方を見ると一人は何とか倒せたようで今は一対一で喧嘩している。

麻生の前にはもう一人の不良が立っている。

「なかなかやるみたいだな。

けどな・・・」

不良が掌を開けるとそこに風が集まっていく。

「風力使い・・・お前、能力者か。」

「そうさ、見たところお前は無能力者みたいだな。
どうだ、金を渡したら骨一本で許してやるが？」

不良は掌に集まっている風で脅しをかける。
しかし、麻生は驚きもせず逆に呆れた表情をする。

「はぁ、たかが風をちよつと操れるからっていい気になって。」

「なんだと!？」

「それを見る限りだいたいレベル3って所か。」

その力で不良達の従えて何が楽しいのか・・・俺には理解できないね。」

憐みの表情で言う、麻生。

その言葉が頭にきたのか不良は掌に集まった風を麻生に向けて放つ。しかし、風は麻生に当たる直前にその風がいきなり止んだ。

「なっ!?!・・・ど、どうなっているんだ!?!」

不良は何度も風を麻生に向けて放つが直前に風は勢いの無くし吹き止んでしまう。

「お前も能力者か!!」

「そんな事どうでもいいだろう。」

そう言い三メートル離れている不良に一気に近づき左足で踏み込むと同時に左手で不良のみぞを殴る。

くの字に折れると不良はみぞをおさえる。

「て、てめえ・・・何者・・・だ。」

不良は消えそうな意識で麻生に問いかける。

「ただの通りすがりの一般人Aだ。」

麻生がそう答えてるのを聞いて不良の意識が途切れる。

麻生が上条の方を見るとちょうど上条も相手を倒したようだ。

「麻生って結構強いんだな。」

無傷おろか服に一つも汚れがないのを見て言う。

「たまたま俺の相手が弱かったただけだ。」

絡まれた学生の男はどうやら逃げたようだ。

麻生はそれを確認して自分の鞆を背負いすたすと歩く。
それを追うように上条もついて帰るのだった。

部屋の前で上条と別れすぐにベットに倒れて麻生は睡魔が来て眠る。
二時間くらい寝ているとパチツと目を開ける。
そのまま立ち上がり冷蔵庫にある水を飲みながら時計を見る。

（六時か・・・暇だし散歩するか。）

麻生は制服を脱ぐと黒のズボン、黒のシャツ、そして黒の袖のない
コートを着て鍵も閉めずに外に出かける。

麻生は暇があればほとんど散歩をする。

その散歩に意味はなくてただ歩いているだけ。

すると不良達がまた誰かを取り囲んでいる。

数が多くどんな人がまた絡まれているかは確認できない。

少なくともズボンをはいていない所を見た限り女性のようにだ。

（まあ、誰が絡まれていようが俺には関係ない。

あの正義馬鹿も居ないことだし無視無視。）

麻生が素通りしていこうとした時だった。

「うん？・・・あっ！！てめえは夕方の！！！！」

不良の一人が麻生の顔を見ると何かを思い出しそうだ。
対して麻生は・・・

「誰だ、お前？」

「もう忘れたのかよ！？

夕方くらいに俺達ボコボコにしただろう！！！」

麻生は改めて不良達をよく見る。

知らない顔も居たが何人かは夕方に会った不良達も居た。

「あの時は油断したが今回はお前は一人だ。

そして数では俺達は圧倒的だ。」

そう言って今度は麻生を取り囲む。

女性を囲んでいた不良達が少なくなり女性の顔を確認することが出来た。

肩まである茶色い髪に灰色のプリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーターの格好をしている。

しかし左の胸に他の女性学生とは決定的に違う物があった。

（あのマーク・・・こいつ常盤台の学生か。）

常盤台中学

学園都市の中でも5本の指に入る名門校であり、同時に世界有数の
お嬢様学校。

生徒数は二百人弱でレベル5二名、レベル4四十七名、それ以外は
全員レベル3。

在学条件の一つにレベル3以上である事が含まれているとんでもな
い学校。

全生徒の能力干渉レベルを総合すると生身でホワイトハウスを攻略
出来ると噂されている。

「おい!!!どこ見てやがる!!!」

不良の一人が麻生を睨む。

はぁ〜と大きくため息を吐く。

「お前達ってほんと馬鹿だよな。」

「なめてんのか、てめえ!!!」

「だって、そうだろう。」

いくら女の子にモテないからって中学のガキを狙うなんてな。

まあ、こんなお子様を狙ってもお前達がモテないことには変わ
りないけど。」

「てめえ・・・ぶっころす!!!!!!」

不良達が一斉に麻生に襲いかかろうとした時だった。

「子供とかお子様とかうっさいのよ!!!!!!」

突然、常盤台の女性がそう叫ぶと同時に凄まじい電撃が不良達を襲

う。

一瞬にして不良達は黒こげになる。

「あー、こんな雑魚共に能力使っちゃ……」

頭をかきながら女性は言う。

しかし、黒こげになったのは不良達だけだった。

「何だ、一人で倒せるのならさっさと倒せばよかったじゃないか。」

「えっ……」

女性は後ろを振り向くと麻生だけが火傷一つなく普通に立っていた。

「あんた、何者……」

「通りすがりの一般人Aだ。」

「一般人が私の電撃を受けて無傷なわけないでしょ!!」

もう一度電撃を麻生に向けて放つ。

だが、その電撃は何か壁に当たったかのように弾け飛ぶ。

「あんまりはいはい電撃を飛ばすな。」

麻生はその光景が当たり前のように平然と女性に注意する。

「何よ、その能力……」

「能力と言っても身体検査システムスキャンでは無能力者（レベル0）なんだが。」

「レベル0ですって……」

女性は驚きの表情を浮かべている。

（面倒になってきたな。

……
……逃げるか。）

麻生はそう考えると女性が驚いている内にUターンして逃げ出す。
それに気づいた女性も麻生を追いかける。

「こら、待ちなさいよ!!!」

誰が待つか、と思いながら逃げ出す、麻生。

（あいつの不幸体質……俺にうつったんじゃないのか……）

今この場に居ない上条を恨みながら後ろの女性をどうやってまくか
考えるのだった。

第1話（後書き）

人物紹介はもう少し後ですれば良かったと後悔しています。

意見や質問、改善点などありましたらコメントください。

第2話

「はぁぁ~~~~~」

いつもの様に窓の外を見ながら大きなため息を吐く。

あの電撃少女こと御坂美琴（名前は何度か会っている内にあちらから勝手に教えられた）に会ってからこの1ヶ月、出会っては勝負しろと言ってくる。

もちろんそんなめんどくさい事を麻生がする訳がなく、そのまま逃亡すると美琴はそのまま追跡、この流れがずっと続いている。

そんな姿を見た青髪ピアスは麻生に話しかける。

「あれゝ麻生、なんや疲れた顔してんなゝ。」

「ああ、少し面倒な女に・・・少女か・・・どっちにしろ、面倒な奴に追い回されているんだ。」

「ええな、女の子に追い回されるなんてそんな羨ましいシチュエーション僕も会ってみたいわ。」

と自分の妄想に入る、青髪ピアス。

そこに上条が麻生に話しかける。

「なあ、その追い回している女って御坂美琴って奴か？」

「よく分かったな。」

何だ？あの女が好きだからストーカー行為でもして情報を集めているのか？」

「そんな訳ないだろう!!」

全力で否定すると左手で頭をかきながら答える。

「たまたま不良に絡まれている所を助けようとした時、ちょうどビリ中学生がビリビリ出してそれを この右手で消してしまっ
てしまったらビリビリが「私の電撃を打ち消すなんてあんたで二人目よ。」
とか言 っ て追い掛け回されたんだ。

まさかその最初の一人が麻生だったなんてな。」

あいつはまた不良に絡まれたのかと麻生は呆れる。

そして麻生は上条の右手を見る。

イマジンプレイカー
幻想殺し

上条当麻の右手に宿る能力。

超能力・魔術問わず、あらゆる異能力の力を打ち消す。

触れるものが異能力であればあらゆる異能力を消し飛ばす、強力無比な能力。

上条がよく不幸な目に会うのはこの幻想殺しが運と言う異能力を消してい
イマジンプレイカー
から上条はよく不幸な事が起こる。

イマジンプレイカー
麻生は幻想殺しの事も知っている。

厳密には麻生が知っているのではなく星が知っているのだ。

これが麻生の能力。

名前がないが麻生は「星^{テラ}」と呼んでいる。

テラ
「星」

星と繋がる事で星が知っている事を麻生も知ることが出来る。

また自然などの万物、秩序などの概念などを変化、利用することが出来る。

他にもさまざまな応用が可能な能力である。

麻生は最近上条と一緒に帰ろうとしないのは御坂が絡んでいるのが原因だなと考える。

そして放課後になると上条と麻生は別々に帰る。

（あいつの不幸は折り紙つきだ。

別々に行動すれば御坂は確実に上条の方に行くはずだ。）

そう考えながら帰宅する。

麻生の予想通り寮までの帰り道で美琴に会う事はなかった。

麻生は水の飲みながら時計を確認する。

（この時間で何もする事もないし散歩でもするか。）

制服を脱いで黒色の服に着替えて部屋を出る。

いつもの通り目的もなくふらふらと散歩する。

「見つけたわ！！！！」

突然麻生の後ろから聞きなれた声が聞こえた。

その声を聞くと麻生は大きくため息を吐いた。

（最近俺の幸運が低くなってないか？）

そう思い声のする方に振り向く。

そこにはパチパチと電気を出しながら御坂美琴が立っていた。

「今日と言う今日は決着をつけてやるんだから!!!!」

美琴は麻生を指さして言う。

それを聞いた麻生は振り返る。

美琴は逃げるかと思ったが麻生は逃げずにいつものペースで歩いていく。

「ちょ・ちょっと!!!待ちなさいよ!!!!」

美琴は麻生にいろいろ話しかけるが麻生はそれを全部無視する。

自分が無視された美琴はバチバチと電気を出しながらと肩を震わせる。

「私を無視すんな!!!!!!」

その叫びと同時に麻生に電撃を放つ。

しかしその電撃は麻生の直前で何か壁にぶつかったかのように弾け飛ぶ。

すると麻生は足を止めて美琴の方に振り返る。

「ようやくこっちを見たわね。」

「お前、毎回毎回俺を見つけては追いかけまして暇なのか?」

「こっちだって無い時間を作ってるのよ。」

「わざわざ作らんでもいいだろうに……それでどうしたらお前はどうすれば追い掛け回すのを止めるんだ?」

麻生がめんどくさそうに美琴に聞く。

「え？・・・そ・・・そりゃあもちろん・・・私が勝ったらよ。」

照れながら美琴は言う。

それを聞いた麻生はまた大きなため息を吐く。

「分かった。」

「え？」

「相手になってやるよ。」

もう追いかけて回されるのは面倒だしな。

少し拓けた場所に移動するぞ。」

そう言って再び歩き出す。

美琴はようやく戦えると思い頭の中で色々考える。

少し歩いた所にある河原で向かい合う二人。

「ふぁ~~~~~~~~、じゃあ始めるか。」

どっからでもかかってこい。」

欠伸をしながら棒読みで言う、麻生。

普段の美琴ならこれを見て頭に血が上るのだが今回は違った。

「言われなくてもこっちはずっとこの時を・・・」

電撃を身体から放ちながら言う。

「待ってたんだから!!!!!!」

それを右手に溜めて電撃の槍を作りそれを麻生に飛ばす。

その威力は今までとは桁違いの威力だ。

だが、それも麻生の直前で何かにぶつかり弾け飛ぶ。

（あれもくらっても無傷かよ。

それなら・・・）

今度は動きながら電撃を放つ。

一直線ではなく四方八方からの電撃による攻撃だ。

美琴は麻生の前には何か見えない壁がありそれが電撃を防いでいると考えた。

その壁は前方だけしか展開できず全方位からの攻撃には対応できないのではと考えた。

先ほどと同じ威力の電撃が麻生の全方位から襲いそしてその電撃が当たり砂塵が舞う。

（しまった！！もし私の考えが当たってたらあいつは・・・）

不安を抱えながら砂塵が晴れていく。

しかし美琴の考えとは裏腹に火傷一つなく麻生は立っていた。

あまつさえ未だに欠伸をしている。

（そう・・・どうやらこいつ相手に手加減は必要ないみたいね。）

バチバチと音と同時に美琴の周りで黒い何かが舞い上がってくる。

「ほう、電磁力を使って砂鉄を操っているのか。」

一度見ただけで原理を看破する。

美琴は一瞬驚くが麻生相手にいちいち驚いていられないと割り切る。

舞い上がった砂鉄が剣の形に変わっていく。

「砂鉄が振動してチェーンソーみたいになっているから触れるとちよーと血が出たりするかもね。」

美琴が砂鉄の剣を持ち麻生に向かって駆け出す。

「このままでも別に問題はないが退屈だし……攻めるか。」

麻生は左手を虚空に伸ばすとそこに剣が突然現れる。

刀身80センチ、幅6センチの両刃の西洋剣が握られていた。

その突然の剣の出現に美琴は駆け出した足を止める。

電撃を防いだ事といい剣が突然現れた事といい本当に無能力者（レベル0）とは思えない。

美琴が足を止めていると今度は麻生の方が美琴に接近する。

麻生は剣を美琴に斬りかかりそれを美琴は砂鉄の剣で受け止める。

ガガガ！！！！と音と同時に麻生の持っている剣が少しずつ削れている。

それを見た麻生は一旦美琴と距離を開ける。

美琴の砂鉄の剣は電磁力でチェーンソーの様に振動している為鏝迫り合いになれば砂鉄の剣の方が圧倒的に有利である。

しかも砂鉄はそこら中に幾らでもある。

砂鉄がなくならない限り砂鉄の剣が無くなることはない。

麻生は自分の剣を見つめている。

「ふーん、普通の剣じゃあ駄目ってことか。」

麻生が呟くと突然持っていた剣が粉々に砕け散る。
それと同時に別の剣が握られていた。

「私の電撃を防いだり何もない所から剣を出したり、どんな能力してんのよ。」

「俺に勝てたら教えてやるよ。」

麻生はさっきと同じように美琴に近づき斬りつける。

（何度やっても結果は同じ！！）

美琴もさっきと同じように受け止めようとする。

だが、その斬撃を受け止めた砂鉄の剣が真っ二つに折れた。

「なっ!？」

その結果に驚き今度は美琴が麻生と距離を開ける。

「あんた、その剣に何かしたの？」

「別に俺は何もしていない。

これはそう言う剣なんだ。」

美琴は麻生の言っていることがいまいち理解できなかった。

麻生はそのまま話を続ける。

「科学側のお前に魔術オカルトの事を話しても信じないと思うが一応説明してやる。

この剣の名前は絶世デュランダルの名剣って言うんだ。

簡単に説明するとこいつは何があっても折れる事はない。」

デュランダル
絶世の名剣

フランスの叙事詩『ローランの歌』に登場する英雄・ローランが持つ聖剣。

「切れ味の鋭さデュランダルに如くもの無し」とローランが誇るほどの切れ味を見せたと言われている。

砂鉄があれば何度でも修復出来るからと言って絶対に折れないわけではない。

渾身の力で斬りかかった絶世の名剣を受け止めれば折れるのは必然。
しかし、美琴は砂鉄の剣が折れた事に対しては驚いたがそれも予想の範囲内だった。

「魔術オカルトとか何だか知らないけどあれだけじゃあ勝てるとは思ってないわ。」

すると先ほどとは段違いの砂鉄が舞い上がりその砂鉄が麻生の周りを取り囲む。

「どう？降参したらすぐに電磁力を解いて・・・「目障りだ。」・・・え？」

麻生がそう言うのと電磁力で操っていた砂鉄がいきなり元の砂鉄に戻った。

（あいつは何も動いていないのに！？・・・くっ！！！！）

美琴はもう一度砂鉄を舞い上がらせようとしたが幾ら電磁力を出しても砂鉄は舞い上がらない。

（どうして・・・どうして、反応しないの・・・）

美琴が砂鉄が舞い上がらない事にうろたえていると……

「もう一度同じ事をされても面倒だからな、此処から周囲1キロ内にある砂鉄をただの砂に変えた。」

美琴は信じられないと思った。

自分の知っている能力でこんな事をできる能力は知らないからだ。

（打つ手はなし。

それならもうこれしかないわね。）

美琴はポケットからゲームセンターのコインを出してそれを親指に乗せた。

「正直、これは使いたくなかったわ。

これに関してはあんまり手加減できないからね。」

美琴は自身の切り札であり自分の能力の異名である技を使おうとしている。

レールガン
超電磁砲

膨大な電流を流す事によって発生する斥力をもって弾丸を発射する。しかし麻生はそれを前にしても態度を変えない。

「いいぜ。

ちようどその技がどれほどの物か見たかったしな。
本気で撃ってこい。」

その挑発で頭に血が上り美琴は今ある電力を全部使い超電磁砲^{レールガン}を麻生に放った。

第2話（後書き）

意見や質問や改善点がありましたら言ってください。

第3話

今の美琴が持っている全ての電力を超電磁砲レールガンに込めて麻生に放つ。

（しまった！！！！）

超電磁砲レールガンを放ってから美琴は自分のした事によく気付いた。

全電力を込めた超電磁砲レールガンは凄まじい貫通力と威力をほこる。

美琴は何とかして超電磁砲レールガンを止めようとした時だった。

麻生が右手を超電磁砲レールガンに向けてつき出す。

「熾天覆ロー・アイアスう七つの円環」

麻生がそう唱えると麻生の目の前に7つの花卉が麻生を守るように展開される。

超電磁砲レールガンが熾天覆ロー・アイアスう七つの円環にぶつかり凄まじい音を発し、そのまま超電磁砲レールガンが威力を落としていき最後には消滅する。

熾天覆ロー・アイアスう七つの円環

投擲武器や、使い手から離れた武器に対して無敵という概念を持った概念武装。

美琴はそれを見てペタンと尻餅をつく。

体内の電気が無くなり力が出ないというのもあるがそれ以上にあの威力の超電磁砲レールガンを防いだ事に驚いているのだ。

「ふむ、一枚も壊せず・・・か。

一枚は破壊できる物だと思っていたが少し期待外れだな。」

麻生がそう呟くと同時に麻生を守っていた花卉が砕け散る。
麻生は美琴が尻餅をついているのを確認するとゆっくりと絶世デュランの名
剣を左手に持ち近づく。

（まずい・・・今は電池切れで動けない。

それにさっきの攻撃を考えると私は何をされても言い返すことが
出来ない。）

美琴は自分の身に降りかかる最悪の事を思い浮かべる。

麻生は美琴の前に立ち剣を振り下げる。

「っ！！！！」

美琴はぎゅっ！！と目を閉じる。

しかし襲ったのは剣で斬られる感触ではなく凄くいい音と同時に思
いっきり何かに叩かれる痛みだった。

「いったあああいいい！！！！！」

自分が想像してた痛みとは全く違う痛みが来たので驚き目を開ける。
するとさっきまで剣を持っていたのに麻生の手にはハリセンを持っ
ていた。

「え・・・何が・・・どうなって・・・」

あまりの状況の変化に美琴の思考回路がついていけない。

「これで分かっただろう。

お前じゃあ俺には勝てないよ。」

「へ？・・・」

「だからお前は俺には勝てない。
もう俺を追い掛け回すことはするなよって言っているんだ。」

いつの間にか持っていたハリセンも消えていた。
じゃあな、と言って麻生は帰ろうとする。

「ちょ・・・ちょっと待ちなさいよ！！！」

美琴の呼びとめを聞くかように足を止め美琴の方に振り向く。

「わ・・・私は今電池切れているから動けないのよ！！！」

こ・・・こんな所に私を置いていく気！！！」

「自業自得じゃあ「うっさいわね！！！！」・・・それだけ元気が
あれば一人で帰れそうに思えるだが・・・」

麻生は少し考えてから大きくため息を吐くと美琴に近づくと美琴を
お姫様抱っこし始めた。

「ちょっと！！！！！」

あんた何しているのよ！！！！！」

「何ってお前を寮まで送るんだよ。」

お前の回復何て待ってられない。」

麻生の腕の中でぎゃあぎゃあ言いながら騒ぐ。

麻生は絶対一人で帰れると思いいながらも美琴を下ろそうとしなかつ

た。

「ぎゃあぎゃあ喚くな。

これ以上暴れたら本気で置いていくからな。」

その言葉を聞いて美琴は頬を赤く染めながら納得しない表情をして騒ぐのを止める。

「それで寮の場所は？」

この後に及んで寮は学舎の園の中とか言ったら置いて帰るからな。

」

学舎の園

第七学区南西端に存在する、常盤台中学を含む五つのお嬢様学校が作る共用地帯。

お嬢様が通う寮なので当然ながら敷地内には五つのお嬢様学校に関わる少女しか居らず（教職員は不明）、バスの運転手も女性。

また、敷地内には全二四五八台もの監視カメラが配備されているらしい。

さすがにそんな所に行くのは面倒だと麻生は思う。

幸いにも美琴が住んでいる寮は学舎の園の外らしく此処からそう遠くはないらしい。

美琴に道を聞きながら歩いていく。

「ねえ、何個か聞きたい事があるんだけど。」

「何だ？」

「私の電撃はどうやって防いでいるの？」

美琴は自分の電撃をどうやって防いでいるか聞きたかった。それを聞けば麻生の能力について何か分かるかも知れない思ったからだ。

「ああ、あれは俺の前に空間の壁を作っているんだ。」

「空間の壁？」

「簡単に言えば見えない壁があると言ったところか。」

空間の壁とは空間移動が三次元的空間を移動するのに対し麻生が作った空間の壁とはその三次元的空間を利用してそれを壁として防御する事だ。

しかし決して絶対防御ではなくある程度の威力を受けると貫通する。美琴は空間を使うと言う事は空間移動テレポートの能力関係なのか？と考える。

「これが一番の本命。」

あんたの能力の名称は？」

美琴が一番知りたい事を麻生に聞く。

「教えない。」

「どうしてよ！！！！」

「お前は俺に勝ってないし何よりこの能力を教えたらもっと面倒な説明をしないといけないから教えない。」

質問終わりと云わんばかりに口を閉ざす。
美琴も最初方は教えろと何度も聞くが答えが返ってこないのであきらめる。

（けど、どんな能力であれこの私を簡単に退けた。
システムスキャン
そしてこいつは身体検査では無能力者と出ている。
システムスキャン
本当に身体検査を受けたのかしら？）

美琴が色々考えている内に美琴が暮らしている寮が見えてきた。
美琴は動けるまで回復したのを確認する。

「此処でいいわよ。
私も動けるし何より他の生徒にこの光景を見られると色々面倒な事が起こるしね。」

美琴の言葉を聞いて麻生は美琴を降ろす。
すると麻生はすぐに振り返り帰ろうとする。

「あ・・・あの！！！」

「まだ何かあるのか？」

「その・・・ありが・・・とう・・・」

「何だ、よく聞こえないぞ。」

「次に会ったときは絶対勝つって言ったのよ！！！！！！
それじゃあね！！！」

ドンドンと言う足音が聞こえそうな足踏みで自分の寮に帰る、美琴。

（ありがとうね・・・俺に礼を言っても意味がないのにな。）

美琴の言葉をちゃんと聞いてた麻生は少し暗い顔を見ると自分の寮に戻るのだった。

「あ~~~~、疲れた!!」

美琴はそう言うと同時にベットに転がる。

「あら？お姉さま、帰ったんですね。」

いつもは茶髪をツインテールにしているのだがお風呂上りなのかその髪は下ろしている。

彼女の名前は白井黒子。

常盤台の一年生であり美琴のルームメイトである。

「もうすぐ寮監の見回りもありますしちょうど帰ってきてくださったので都合が良かったですわ。」

「あゝごめん黒子。」

「ちょっと疲れたから寝るわ。」

おやすみなさいと言おうとしたがすでに美琴は寝ていた。次は絶対に・・・と寝言言っているがその表情は少し笑顔だった。

「またあの殿方と何かあったのですね。」

黒子は心配ですわ。

お姉様に悪い虫がついているのではと思い・・・」

と寝ている美琴に言っても意味がないと言葉を止める。
そして白井はある人物の事を思い浮かべる。

（もしかしてお姉様が追い掛け回している殿方はもしかしてあの
人なのでは？

・・・考えすぎですわね。）

白井はそんな偶然がある訳がないと思い、自分もベットに転がるの
だった。

第3話（後書き）

消費していたとはいえ超電磁砲レールガンが熾天覆ロー・アイアスう七つの円環を一枚も突破できないのは無理があつたかな。
でも麻生の能力だしいいか（笑）

意見や質問や改善点などがありましたらコメントください。

第4話

「以上が昨日の夕方に起こった事件ですの……聞いてます？お姉様。」

白井は昨日のとある店で爆発事件が起きた詳細を美琴に教える。
美琴はそれを聞きながらいつもの自動販売機を蹴り出てくるジュースの缶を確かめる。

「聞いてるわよ……うつ……ハズレだ。
確か連続爆破事件とか言うやつでしょ。」

「正確には連続虚空爆破事件ですの。」

白井は腰を上げ美琴が持っている缶をコンっとつく。

「アルミを基点にして重力子の数ではなく速度を増加させそれを一気に周囲にまき散らす。」

「要は「アルミを爆弾に変える」能力ですの。
ぬいぐるみの中にスプーンを隠して破裂させたり、ごみ箱の中のアルミ缶を爆発させるといった手を使ってきますの。」

爆発の前兆があるのでまだ死人はでてませんがと白井は言う。
しかし未だに犯人の特定には至っていない。

「でもそれは能力者の犯行なんでしょ？
だったら学園都市の「書庫」にある全ての学生の能力データを当たって該当する能力を検索すれば容疑者は割り出せるんじゃないの？」

この学園都市には身体検査で測った能力の詳細やレベルなどを記録した「書庫^{バンク}」と言う物がある。

美琴はそれを調べれば簡単に犯人を見つけられる事が出るのでは？とジューズを飲みながら言う。

しかし白井の顔はもっと難しい表情になる。

「妙なのはそこですの。」

「量子変速^{シンクロトロン}」・・・それも爆発に使用できる程強い力を持った能力者は鉋路帷子^{くしろかたびら}と言う生徒ただ一人。

しかし事件の始まりは一週間前なのですけれど彼女は八日前から原因不明の昏睡状態に陥っていますの。」

病院から出た形跡もなく鉋路には犯行が不可能と考えられる。

白井は前回の身体検査^{システムスキャン}後の短期間で急激に力をつけたのでは？と予想している。

頭に花をかたどった髪飾りをした女性は友達と待ち合わせをしていた。

彼女の名前は初春飾利。

白井と同じ年で風紀委員^{ジャッチメント}でもある。

「うーいはるーん♪」

自分の名前を呼ばれ振り返ろうとした時だった。

「おっはよーーーん！！」

その掛け声と同時に初春のスカートがバツとめくられる。

初春は叫び声と同時に素早くスカートを押える。

セミロングの黒髪に白梅の花を模した髪飾りをした女性は初春と同じ中学でありクラスメイトの佐天涙子。

挨拶代わりに初春のスカートをめくるセクハラ女子中学生である。

「男子のいる往来でこの暴挙!？」

何をしているんですか佐天さんは!!!!!!」

「クラスメートなのに敬語とは他人行儀だね。」

どれ距離を縮める為に親睦を深めてみようかね。」

そう言うときまた初春のスカートめくる。

まわりの男子は顔を赤くしながらも初春のパンツをしっかりと見ていた。

「ごめん、ごめんちょっと調子に乗りすぎちゃった。」

あははと笑いながら謝る佐天。

それを見た限り全く反省していないようだ。

佐天は初春の機嫌を直してもらおうと初春が聞きたかった曲を聞かせてあげる。

それを聞いた初春は先ほどのやりとりをもう忘れたのか楽しそうに会話する。

佐天と初春は授業中に放課後セブンスミスと言う服屋に行く事になった。

放課後セブンスミスに向かっていく途中初春は美琴の姿を見つけて声をかける。

「御坂さー！ー！ーん！！」

初春の呼びかけに美琴は初春の方に向く。
美琴と初春は白井を通じて知った仲だ。
美琴の愚痴を聞いたり仲は良いようだ。

「おっすー、そっちはお友達？」

「これから一緒に洋服を見に……」

初春は美琴も誘うとするが佐天が初春を連れて美琴から少し離れる。
そして美琴に聞こえない声で初春に話す。

「ちょっとあの入常盤台の制服着てんじゃない。
知り合いなの？」

佐天は初春が常盤台の生徒に知り合いが居たことに驚いている。
初春は美琴の事をなぜ知っているか教える。

「ええと風紀委員の方で間接的に……」

美琴となぜ知り合った教えていると美琴の能力や異名について得意
げに教える。

「しかもあの方はただのお嬢様じゃないんですよ。
この人は「超能力者」（レベル5）！！」

「レベル5！？」

「それも学園都市最強の電撃使いあの「超電磁砲」の御坂美琴さんなのです!!!!」

美琴の事を知った佐天は驚きの表情を隠せない。

初春は「超電磁砲」を生で見たと佐天に自慢したらどんなのだった！？と佐天は初春に聞く。

美琴はこうやって噂は広まるんだなっと実感しながら傍観する。

佐天の自己紹介を受けて美琴もセブンスミストに行く事になった。

佐天は常盤台のお嬢様がセブンスミストのような全国チェーン店に行くような所ではないと言うが美琴曰く常盤台の生徒は外出時に制服着用が義務付けられている。

その為服にこだわらない人が結構多いらしい。

初春は白井の事を美琴に聞く。

何でも白井は忙しいらしく一緒には行動していないらしい。

「でも超能力者（レベル5）かあ・・・すごいな。」

佐天は美琴とは違いレベル0。

上条や麻生と同じ無能力者だ（厳密には二人とも能力は持っている）。

「「幻想御手」があったらなあ。」

佐天の独り言に初春が首をかしげる。

「え？・・・何ですか、それ？」

「いや。あくまで噂だしあたしも知らないんだけど。

あたし達の能力の強さを簡単に引き上げてくれる道具があるんだってそれが「幻想御手」。

まあネット上の都市伝説みたいなもんなんだけどさ。」

少し苦笑いを浮かべながら答える。

美琴はその事を聞いて短期間で急激に力をつけた能力者の犯行が増えていると言う白井の言葉を思い出す。

（レベルアップバー「幻想御手」か……まさかね。）

所詮は都市伝説だと割り切る。

そして彼女達が楽しく話をしている時に一人の眼鏡をかけた男の学生が横を通った。

その男は初春の風紀委員のマークを見ると怪しく笑みを浮かべるのだった。

セブンスミスの中で三人は服を見て回りながら美琴の「レールガン超電磁砲」についてなど話しながら途中佐天が初春にひもパンを進めたりと楽しく店内を見て回る。

美琴はパジャマを見に来たと言いつりあえずパジャマのコーナーの所に行く。

「色々回ってるんだけどあんまいのが置いてないのよね……」

と呟きながらマネキンに着せてある花柄のパジャマを見る。

すると美琴はとても気に入ったのかぼかーんと見とれている。

「ね、ね、コレかわ……」

美琴は二人にこのパジャマを教えようとした時だった。

「アハハ、見てよ初春このパジャマ。」

こんな子供っぽいのいまどき着る人いないっしょ。」

「小学生の時くらいまではこういうの着てましたけどね。」

と二人はこのパジャマについて感想を述べる。

美琴もそれを聞いたのか中学生になってこれはないわ、と表面上興味のない振りをする。

二人が水着のコーナーを見て回るといい美琴から少し離れる。

（いいんだモン。

どうせパジャマなんか他人に見せる訳じゃないし!!）

そう思いながらマネキンが着ていたパジャマと同じ物を取る。

（初春さん達はむこうにいるし一瞬、姿見で合わせてみるだけなら。

）

こっそりと全身鏡に近づきさつとパジャマと合わせようとした時だった。

「お前、何やっているんだ。

動きが怪しすぎるぞ。」

その全身鏡には呆れた顔をした麻生も一緒にうつっていた。

麻生が後ろにいる事に美琴は驚く。

「な、な、何であんたがこんな所にいんのよ!？」

「俺だってこんな所には来ないよ。

けど事情が事情だ。」

頭をかきながら答えると同時に洋服を持ってきた小さな女の子がやってきた。

遡る事一時間前。

麻生がいつも通り寮に帰っていると後ろから制服のズボンを小さく引っ張られる。

誰かと思い振り向くとそこには小さな女の子が涙を浮かべながら立っていた。

「何だ？」

「あ、あのね・・・此処に行きたいのに迷子になっちゃったの・・・」

ヒクッヒクッと涙を堪えながら言う。

女の子が持っているメモを見るとそこにはセブンスミストとその行き方が書かれたメモだった。

「おにーちゃん、此処に連れて行って。」

今すぐに泣き出しそうな顔で言う。

麻生は此処で見捨てたら面倒な事になりそうだなと思いセブンスミストまで案内してあげた。

セブンスミストに着くと泣き出しそうな女の子も顔も明るい笑顔に変わった。

麻生はそのまま帰ろうとしたが女の子と一緒にいてきてほしいとお願いしたので一緒にいる。

この事を美琴に説明する。

「まあそれはさておき・・・昨日の再戦今ここで・・・」

と今にも電撃を出しそうな雰囲気を出す。
麻生はそれを見て大きくため息を吐く。

「それも結構だがまずは周りを確認することだな。
こんなに人がいる所ましてや子供の目の前で戦うつもりか？
それでもやるって言うんなら俺は相手になるが。」

「うっ・・・」

それを指摘され黙り込む。

麻生は女の子に少し店内を見て回ってくるよ、と言って美琴から離れていく。

美琴は初春達に少し席を外すと言ってトイレに入る。

（我ながら見境ないな・・・）

前の自分を思い出し少し反省する。

トイレから戻る途中階段でなぜかぬいぐるみを持っている男を見かけ少し疑問に思ったが初春達の所に戻る。

するとさっきまで一緒に居た筈の女の子が居なくなっていた。

美琴は疑問に思ったが初春の携帯が鳴り響く。

電話先は白井からのようだ。

「し、白井さん！？」

ジャッジメント
風紀委員の仕事を少しさぼっていたのでその言い訳を言おうとした
が白井がその言葉を遮る。

「例の虚空爆破事件の続報ですの！！
衛星が重力子の爆発的加速を観測しましてよ！！」

「観測地点は!?!」

「第七学区の洋服屋「セブンスミスト」ですよ!?!」

その店は初春達が今いる店だった。

「ラッキーです!!」

私、今ちようどそこにいます!?!」

そう白井に言うのと白井は何か言おうとするが初春は携帯から耳を離す。

初春は美琴に避難誘導を手伝ってもらうようお願いし佐天も避難するように言う。

初春と美琴の迅速な行動のおかげですぐにセブンスミストに居る人を避難させる事が出来た。

初春は白井が大きな声で何か言っているので携帯を耳につける。

「初春、今すぐそこを離れなさい!?!」

過去八件の事件の全てで風紀委員は負傷していますの!?!
ジャッジメント

犯人の真の狙いは観測地点周辺にいる風紀委員!?!
ジャッジメント

今回のターゲットはあなたですよ、初春!?!」

その白井の言葉と同時にさっきの女の子がカエルのぬいぐるみを持つて初春に近づく。

「おねーちゃん、メガネをかけたおにーちゃんがおねーちゃんにわたしてって。」

そのぬいぐるみはさっき美琴が階段で男がもっていたぬいぐるみと

同じだった。

そのぬいぐるみの中心がブンと音と同時に何かの小さい球体が出る。

初春は子供が持っているぬいぐるみを手ではたき子供を守るように抱きしめる。

「逃げてください!!!」

あれが爆弾です!!!!!!」

その言葉と同時に小さい球体が大きくなり、やがてぬいぐるみを吸収していく。

（「^{レールガン}超電磁砲」で爆弾ごと吹き飛ばす!!!!!!）

美琴はポケットからコインを取り出そうとするが焦ったのかコインを掴み損ねてしまう。

（マズった!!!!!!間に合.....）

そしてぬいぐるみが完全に球体に飲み込まれ爆発しかけた時だった。突如その球体のまわりに四角い正方形が球体を包んだのだ。

そして球体は爆発することなく依然とその大きさを保っている。

「何がどうなって.....」

美琴は目の前で起こっている事がよく分らないようだ。

すると後ろから足音が聞こえ振り向くとそこには麻生恭介が立っていた。

麻生は正方形で包まれた球体に近づきそれに掌をかざす。

すると包まれた球体は徐々に小さくなり最後にはパンツと音をたて

て消滅した。

第4話（後書き）

意見や質問や改善点などがありましたらコメントください。

第5話

「あんた一体なにしたの。」

美琴は麻生が一体何をしたのか聞く。

麻生はめんどくさそうな顔をしながら美琴の質問に答える。

「あれは重力子^{グラビトン}の数ではなく速度を増加させそれを一気に周囲にまき散らす。

ならあの重力子^{グラビトン}を空間の檻で囲みその中の重力子^{グラビトン}に干渉してその速度の増加を止める。

その後、速度を減少させていって最後には消滅する。

これで満足か？」

美琴はその説明を聞いて哑然とする。

美琴は麻生の能力は空間能力者の類だと思っていた。

しかし重力子^{グラビトン}の速度に干渉するなど明らかに空間能力者とは違う能力を使っていた。

「ほんとあんたは一体何者なの。」

前にも同じ質問をする。

「通りすがりの一般人Aだ。

それ以上でもそれ以下でもない。」

美琴と麻生が普通に話をしていると初春は何も起こっていない事に気づき周りを確認する。

「あの・・・爆弾は・・・」

「ああ、それはこいつが・・・」

美琴があゝの爆弾を止めたのは麻生だと言おうとした。
しかし麻生が美琴の言葉を遮るように言う。

「それよりお前達はこの男を探せ。」

麻生はポケットから何かを出して美琴に見せる。

麻生が持っていたのは写真でそれに写っていたのはあのぬいぐるみ
を持った男の顔だった。

「こいつが例の爆弾をあの子供に持たせた犯人だ。」

「!?・・・どうしてあんたがこの男の写真を持ってたのよ?」

「あの子供にぬいぐるみを渡す所を見たからな。」

その時見た男の顔を能力で写真化しただけだ。」

ますます麻生の能力が分からなく美琴。

ふと初春の方を美琴が見るとじーっと麻生の方を見ていた。

麻生もその視線に気づいたのか初春の方を見る。

「俺の顔に何かついてるのか?」

麻生が初春にその視線について聞く。

「やっぱりあの時の人ですね!!!」

初春はそう言って麻生の手を掴みブンブンと上下に振り回す。

「ねえあんた初春さんと知り合いなの？」

「いいや、初対面の筈だが……」

麻生は自身の記憶を辿ろうとした時、ヒュンと音と同時に何も無い所から白井が現れる。

どうやら初春が狙われたことに気づき能力で此処まで飛んで着たようだ。

「初春！！！！大丈夫ですよ！！？」

「あっ！！！白井さん！！！」

見てください、この人を！！！！」

初春に言われ白井も麻生の顔を見る。

すると白井も麻生の顔を凝視するとあっ！！！！の言葉と同時に麻生の左腕をがっちり掴む。

「ようやく見つけましたわ。

もう逃がしませんわよ。」

「あんた黒子とも知り合いなの？」

「どちらとも初対面だ。」

時を遡るほど去年の冬。

白井がまだ常盤台中学入っておらず風紀委員ジャッジメントの資格は持っていたが実践に参加した事はなく裏方の雑用や先輩同伴のパトロールばかりなのだ。

ジャッジメント
風紀委員

学園都市における警察的組織その二。
生徒（能力者）によって形成され、基本的に校内の治安維持にあたる。

九枚の契約書にサインして、十三種の適正試験と4ヶ月に及ぶ研修を突破しなければならぬ。
風紀委員活動の際には、盾をモチーフにした腕章をつける。

「こっちは特に異常なしと。」

肩まで伸ばした黒髪と眼鏡が特徴の女子高校生、固法美偉が機械の画面を見ながら呟く。

今日も先輩である固法美偉と一緒に第七学区に見回りをしている。

白井は固法に自分の待遇について聞く。

「なぜわたくしに任されるのは裏方の雑学や先輩同伴のパトロールばかりなんですか？」

白井は座学も実技も能力測定全てにおいて成績優秀な自分が半人前扱いされるのが不満なのだ。

白井は自分が小学生だから任せられないのだと思っている。

固法はそんな白井の質問に白井の頭に手を乗せて答える。

「年齢の問題だけじゃないわ。

あなたの場合なまじポテンシャルが高い分全てを一人で解決しようとするきらいがあるからね。

もう少し周りの人間を頼るようにならないと危なっかしいのよ。」

頭をなでながら固法は言う。

白井はこの行為がすでに子供扱いされているのだと思う。

固法と白井は再びパトロールを再開する。

そして郵便局に入り怪しい人物がいなか確認する。

すると入り口の方で初春が郵便局に入ってくるのが見えた。

初春と白井は風紀委員訓練所^{ジャッジメント}で知り合った仲だ。

「白井さん！」

偶然ですね。」

「初春・・・なぜ貴女がこんな所（第七学区）に？」

「もうすぐ中学生になるし学校や寮の下見に来たんです。」

「中学生？」

どなたがですの？」

「やだなーもー私に決まっているじゃないですか。」

白井は初春が同い年である事に驚く。

白井は初春が絶対年下だと思っていたらしい。

「白井さんはもうどこに行くか決まっていますか？」

「え・・・ええ、わたくしは常盤台中学という所へ・・・」

白井が常盤台中学に行く事を知ると初春は白井に尊敬の眼差しを送る。

初春は常盤台のイメージを白井に語るが白井曰く、常盤台は生徒間で派閥なんてものを作っている生徒もいるらしく常盤台にあまり良い印象は持っていないようだ。

「特に「超電磁砲」^{レベルガン}などと呼ばれる超能力者（レベル5）がいるらしいのですがきっとコーマンチキでいけ好かない性悪女に決まっていますわ。」

「知らない人の事をよくそこまで言えますね。」

白井は初春になぜ郵便局に来たのか尋ねる。

何でも帰りの電車賃が無くなったらしくお金をおろしにきたらしい。白井と初春は一旦別れ白井は固法の元に戻る。

「すみません、知り合いがいたもので……」

白井は固法に近づき謝ろうとしたが固法はある客を凝視していた。そして白井にしか聞こえない声で話す。

「あの男、郵便局に入ってから順番待ちをするでもATMを使うまでもなく局員の居場所や目ばかり窺っているわ。

人の所有物を勝手に透視するのは気が引けるけど……」

そう言って少ししゃがみ男を再び凝視する。

固法が持っている能力は透視能力。^{クレアボーイアンス}

眼球に頼らず視覚情報を得る能力。

内部が隠れて見えないものを解析したり、遠隔地を見たりできる。

固法はその能力で男のカバンの中身などを透視する。

「カバンの中に工具・・・ボール・・・とワイヤー・・・!!」

これだけ聞いていれば何かの作業の帰りなのかそれとも今から向かうのかもしれない。

次に持っている道具を見なければ。

「右ポケットに拳銃。」

それを聞いて白井はその男が強盗に來たのだと思った。

確かに郵便局で局員の動きを確認してさらに拳銃をもってくる輩など大抵は強盗かその類だろう。

固法は局員に伝え白井に避難誘導にを任せるよう指示する。

白井は逮捕しませんの？と固法に提案するが固法は既に風紀委員の手では負えないと判断してこれを警備員アンチスキルに任せようとする。

アンチスキル
警備員

学園都市における警察的組織その一。

次世代兵器で武装した教員で構成されている

超能力を持たないが、暴走した超能力者をも取り押さえられるようかなり強力な武装が許されている。

白井は固法の判断に納得いかない表情をする。

固法は局員にあに連絡しようと呼びかけるが次の瞬間パンッ!と音がする。

固法がその音の方に見るとさっきの男が拳銃を持っていた。

(クソッ・・・先に動かれた。)

男は局員や客に動くなと命令する。

そして男が局員の方を見ている時、白井はその男に向かって走る。男が局員の方に向いている時は白井から見て背を向けているのだ。

（訓練通りにやれば・・・）

まず白井は右足の踵で男の左足のつま先をおもつきり踏みつける。相当痛かったのか男はすぐさま白井に向けて左手で殴りつける。

しかしそれはあまりに単純な殴りであり白井はそれをかわし男のパーカーの帽子を掴むと同時に左足で男の左足の膝を後ろから蹴りバランスを崩す。

後ろに体重が乗り仰向けに叩きつけられる。

男は拳銃で白井を狙おうとするがすぐさま白井が倒れた男のみぞを踏みつけて気絶させる。

（何だ、簡単ではありませんの。）

簡単に犯人を倒す事ができたと思った時だった。

「きゃあっ！！」

聞き慣れた声が叫び声をあげその方に向くとそこには別の男が初春にナイフと突きつけていた。

麻生はいつもの通り散歩していた。

真っ黒なズボンに真っ黒なコートを羽織り黒一色で染めた服装は麻生の髪の毛の白さを際立てていた。

すると前の方の郵便局のシャッターが閉まっている事に気づき次の瞬間、ヒュン！！と音と同時に花飾りのカチューシャをした女の子が突然現れる。

女の子は自分が外にいる事に驚いているようだ。

女の子はシャッターの閉まった郵便局に何か言々と周りの人に助けを求める。

「お願いします！！助けてください！！！！」

中で風紀委員が強盗に襲われて！！！！」

周りの女の子が助けを求めても誰も助けようとしなない。

それもそうだ。

郵便局で何があるうと自分には関係ない。

誰も助けようとはしないだろう。

麻生もそう言った人間だ。

助けを求められれば助けそれがなければ助けない。

その女の子が麻生に助けを求めた訳ではない。

しかしその女の子は泣いていた。

おそらく知り合いの風紀委員が襲われているのだろう、と麻生は考える。
ジャッジメント

そして麻生はゆっくりと郵便局に近づき右手でシャッターに触れる。

（何で助けようと思ったんだろうな・・・）

この時、麻生は突然助けようと思った。

本当に突然そう思ったので自分でもなぜそう思ったのか分からないのだ。

対する女の子も麻生が何をするかよく分からないようだ。

（映像に残ると面倒だから壁をつたって監視カメラに干渉してこれ

から起こる映像を映らないようにする。」

その作業が終了すると麻生は左手を握りしめ拳を作りシャッターに叩きつけた。

男に殴られ床を滑るように吹き飛ぶ。

仲間がいることを考えずに勝手に行動してあまつさえ先輩である固法も自分をかばい怪我をして気絶している。

何とか自分の能力で人質である初春を何とか外に飛ばす事が出来た。後は人質がまた捕られないよう犯人に注意を白井に向け時間を稼ぎ警備員が来るのを待つ。
そう白井は考えていた。

「お前が何を考えているか当ててやろうか。」

警報が鳴ってだいぶ経つ、間もなく警備員が到着するだろう。

コイツは外に出られないのだから人質を取られないよう引き付ければこちらの勝ち・・・凶星だろ？」

白井が考えていたことを見抜かれていた。

男はポケットからパチンコ玉みたいな物を取り出す。

「警備員がいくら来たところで怖くはないがウジャウジャ囲まれるのは厄介だ。」

男はその玉を閉まっているシャッターに投げようとした時だった。
ドオン！！と音と同時に男が玉を投げつけようとしたシャッターがいきなり外側から穴があいたのだ。

男は警備員と思ったが違った。

黒一色の上下の服を着て白い髪が特徴の麻生恭介が立っていた。

「何だお前は!!!!」

男は麻生が突然シャッターに穴をあけた事に驚いている。

「俺は通りすがりの一般人Aだ。」

男はその言葉と同時に手に持っていた玉を麻生に投げる。

通常投げた玉は重力により下へと引っ張られ放物線のように下がっていく。

しかし男が投げた玉は下に下がることなく一直線に進んでいく。

イコールスピード
絶対等速

これが男の持つ能力だ。

投げた物体が、『能力を解除するか投げた物が壊れるまで、前に何があろうと同じ速度で進み続ける』能力。

速度は大したことはないが、手のひらに複数個納まるサイズの鉄球と組み合わせることで、防犯シャッターすら破壊可能な威力を発揮する。

そんな能力が付加した玉が麻生に飛んでくるが麻生はその玉を右手で掴んだ。

「は？」

男は一瞬咄然とする。

イコールスピード

絶対等速の能力が付加した玉を掴む事は不可能だ。

そんな事をすれば麻生の身体が玉に身体が貫かれてしまう。

しかし麻生は掴んだ玉を指先でこねている。

「ふうん、絶対等速^{イコールスピード}って所か。
そんなちんけな能力じゃ俺を殺す事なんて出来ないな。」

麻生は飛んでくる玉に干渉して玉に付加している絶対等速^{イコールスピード}の能力を消したのだ。

男にはその原理が分かる訳がなく今度は複数の玉を同時に投げる。

麻生がその複数の玉の原子に干渉しその原子を腐敗させる。

原子を腐敗されたら当然玉は腐敗してしまう。

「ど・ど・どなっているんだ!!!!!!」

男が目の前の一連の光景が信じられないようだ。

麻生は素早く男の懷に飛び込み男の腹と左手に少し隙間を開ける。

そして空気を圧縮した物を間に作りそれを男に目がけて押し出すように放つ。

「ぐぶあ!!!!!!」

その叫びと共に壁に打ち付けられ気絶する。

白井はその光景を目にして言葉が出ないようだ。

麻生は白井に近づき右手を白井の足に置く。

（!?!?!?足の痛みがなくなっていますの!!!!!!）

次の瞬間には足の痛みや殴られた所の痛みが消えていたのだ。

麻生は固法にも白井と同じように手を置くと固法の背中に刺さっていた金属の破片がゆっくりと抜けていき刺さっていた傷も無くなっている。

「これで終わりだ。」

傷の治療はサービスだ。」

そう言って麻生は自分が入ってきたシャッターの穴から出ようとする。

しかし白井は麻生の手を掴む。

「お待ちになって。」

傷の治療はあなたがしたのですか？

それにこの事件に関わったのでしたら参考人ですので逃げられては困ります!!」

ちっと麻生は舌打ちをする。

この一連の事件に関わってしまった事に激しく後悔する麻生はあくため息と同時に白井の方を見る。

「手……を離せ」

その言葉と同時に白井の手が自分と意思と関係なく手を離す。

（何がどうなっているのですの……あの方が言った瞬間勝手に手が……）

自分の手を見つめてはっと麻生の方を見る。

そこに麻生の姿がなかった。

「と、まあこのような事件があったのですのよ。」

場所は変わり風紀委員の支部の一つである第一七七支部。
ジャッジメント

あの虚空爆破事件の後、麻生が持っていた写真のおかげで犯人は捕まえることが出来た。

今は麻生、テーブルを挟んで白井、初春、美琴、佐天が向かい合っている。

「どうして俺を取り調べるみたいな状況になっているんだ？」

初春達を救ったの事に感謝されるこそすれ、こんな取り調べがない事をされるのはおかしいと思うのだが。」

「あの時の事件の事、そして今回の事件について色々聞きたい事がたくさんありますので。」

「あの時の事件に関わったのは気まぐれ、今回の事件に関わったのはその場に俺が居て被害を受けかけたからだ。

これでいいか？」

「そんな雑な説明で納得するとても？」

白井の顔は笑いながらも全然笑っていなかった。

初春と佐天はその光景を見ながらオロオロして美琴は麻生の能力についてさらに謎に包まれる。

麻生はため息と同時に席を立つ。

「どこえ行くつもりですか？」

「帰るんだよ。」

「こんな所に居ても時間の無駄だ。」

部屋のドアに手をかけて出ようとした時だった。

「お待ちになって。」

その言葉を聞いて立ちどまる。

「色々聞きたい事がありましたけどまずはこれだけ言わしてくださいまし。」

あの時とそして初春やお姉様を助けていただいてありがとうございます。」

「何度も助けていただいてありがとうございます!!」

白井と初春の言葉を聞いて少しだけ白井達に振り向く。

「別にお前達の為にやった訳じゃない。

俺の目の前で死なれてはこっちが気分悪くなるからな。だから助けた・・・それだけだ。」

その言葉と同時に支部から出て行った。

「白井さん、よかったですね!!!」

何度かお礼を言いたいて言っていましたもんね!!」

「初春・・・少しお話があるのでですけどよろしいですか?」

白井は初春に襲いかかりそれを美琴と佐天で止めようとするだった。

第5話（後書き）

主人公紹介の人物に少しだけ追加しました。

此処でオリジナル宝具や宝具以外を使った戦闘など募集します。
送ってくれたコメント見て自分風に改良して今後どこかで使おうと
思っています。

意見や質問や改善点も募集してます。

第6話

「それと明日から夏休みです。

皆さん、はめを外しすぎて事故など起こさないでください。

特に上条ちゃん!!!!」

小萌先生はビシッと上条に指を指す。

まわりの生徒は無理無理、上条が問題を起こさない訳がない、とまわりにも上条の不幸がどれほどの物か知られているようだ。

上条も何とかして夏休みを生き抜きますと言って今から疲れた顔をしている。

クラスが笑いに包まれているのに麻生だけが笑うことはなく窓の外をじっと見つめていた。

放課後、麻生が一人で学校の廊下を歩いている時だった。

「おっ！麻生じゃん。」

自分の名前を呼ばれその方に振り向く。

「うん？・・・愛穂か。」

尻まで届く長さのロングヘアを後ろに縛り冴えない緑のジャージ姿をした女性教師が麻生に近づく。

彼女の名前は黄泉川愛穂。

彼女は麻生の命の恩人の一人である。

麻生が真理を見て廃人になった時、麻生の親は学園都市に麻生を送り治療してもらおうと考えた。

その時、麻生の担当になったのが愛穂の友人である芳川桔梗だ。

桔梗は麻生の治療に困っていて外に連れ出した時、偶然愛穂と出会

う。

愛穂は麻生の状態を桔梗から聞き二人を問答無用で色々な所に連れまわした。

その時麻生から見た二人はとても楽しそうに見えたのだ。

そして麻生は二人に問いかけた。

「何であんた達はそんなに楽しく生きていられるんだ？

この世界はとても醜く人間は欲深く傲慢な生き物だ。

こんな希望も何もない世界で何でそんなに楽しく生きていられるんだ？」

麻生の質問に愛穂は麻生の目線まで腰を落として優しく話しかける。

「ウチはそんな難しい事よく分からないけどそれでもこの世界にはあんたが思っている以上に楽しめる事があるとウチは思ってる。」

それを聞いて麻生は鳩が豆鉄砲くらったような顔をする。

続いて桔梗が麻生の頭に手をのせる。

「私は愛穂より人間のそういった暗い所は少しは知っている。

人間はそういった生き物だけど全部が全部そういった人間じゃないわ。」

その言葉は麻生を元に戻すためのその場限りの嘘かもしれない。

それでも麻生の心に深く響いた。

桔梗は六時まで病院に帰ってくるのを約束するなら自由に見て回っているわよ。

麻生は一人でふらふらと歩く。

そこである公園で何人か同い年くらいの子供達がちょうど遊び終わったのか解散する所を見た。

麻生はこちらに向かってくる女の子に声をかけて簡単に一つだけ質問した。

「ねえ君は生きてて楽しい？」

その問いかけに女の子は最初、首をかしげたがすぐに満面の笑顔に変わる。

「うん！！私は今とっても楽しいよ！！！！」

そう言って女の子は自分の家に戻っていた。

麻生はその答えだけで充分だった。

（もう少しこの世界を見て見るか。）

そう思い現在に至る。

彼女たちがいなければ麻生は今頃こうやって学校などには通っていないだろう。

なので麻生は彼女達に少なからず恩を感じている。

愛穂は麻生に近づきパソコン！！と頭を殴る。

「学校では黄泉川先生じゃん。

ウチも恭介って呼ばないよう気を付けてるじゃん。」

「俺はその呼び名でも構わないだけだな。」

「駄目じゃん。

それで麻生は今から家に帰るの？」

「ああ、寮に戻って寝る。」

愛・・・・・・黄泉川先生は何をするのですか？」

下の名前で呼ぼうとすると今にも殴られそうだったのですぐに呼び名直しなぜか敬語になる。

「明日から夏休みだけどウチは学校に行って色々作業があるじゃん。」

「何かあつたら呼んでくれ、手伝うよ。」

期待しているじゃん、と言って用事を思い出したのか麻生から離れていく。

麻生も学校を出て寮に戻りベットに転がり目を瞑り睡眠をとる。

何時間か寝た後ガンガン！！とドアを誰かが叩いている音で目を覚ます。

麻生はゆっくり腰を上げ未だにガンガン！！とドアを叩いている方に歩く。

ドアを開けるとそこには上条が立っていた。

「よっ麻生。」

これから飯を食いにいかないか？」

上条の誘いに麻生は時計を確認する。

午後八時。

麻生はこのままでは暇だな、と思い上条とご飯を食べに行く事にする。

とあるファミレス店。

上条は苦瓜ゴーヤと蝸牛エスカルゴの地獄のラザニアと言うよく分からない物を頼んだ。

ちなみに麻生は水だけだ。

「お前は何も頼まないのか？」

「こんな栄養の悪い物を食べるなら自分で作る。」

上条は麻生に作ってもらえばよかったと心底後悔する。

上条は何回か麻生の作ったご飯を食べた事あるがそのおいしさは凄まじくこんなファミレス店何かとは比べ物にならないくらいおいしかったのだ。

「麻生に作ってもらえばお金もかからなくて済んだのに……不幸だ。」

頼んでしまったのだから食べるしかないと上条は割り切る。

上条と麻生は向かい合わせで座っている。

麻生は通路側に背を向けているので後ろの状況は分からないが上条側から見ると後ろの状況がよく見える。

何か見つけたのか上条は席を立ちどこかへ行く。

麻生はその方向に視線を向けると何人かの不良が一人の女子生徒に財布を狙っているように見えた。

（あの制服にあの髪……美琴か？）

上条から見ると不良達が美琴にお金を取り上げようとしている様に見えるのだろう。

すると不良達と上条の間に不穏な空気が流れ今にも喧嘩が始まりそうな勢いだっただ。

上条が相手は不良三人。

不良の強さによるが上条の強さを考えれば何とか勝てるかどうかの際どい所だ。

上条が拳を構えた時だった、トイレの方からゾロゾロと何人も不良達が出てくる。

合計九人。

上条一人で勝てる人数でもなく上条はすぐに振り返り逃走する。

不良達は上条を追い美琴もその後を追う。

（美琴が追うという事は何かあったのか・・・どうでもいいか。）

すると麻生のテーブルに先ほど上条が頼んだ苦瓜ゴーヤと蝸牛エスカルゴの地獄のラザニアが運ばれる。

麻生はそれをスプーンですくい一口だけ口に運ぶ。

（不味い。）

そう思い席を立つとお金を払い少し散歩をしながら寮に戻ろうとする。

するとゴロゴロと音と同時に雷雲が現れ巨大な雷が落ちる所を見る。麻生は美琴が上条に雷でも落としたのか、と予想した。そして次の瞬間にはまわりの電気が消え停電になる。

（あいつらは必ず周りに迷惑をかけるな。）

そう思いながら寮に戻り寝るのだった。

七月二十日、夏休み初日。

上条当麻は朝っぱらから絶句した。

昨日美琴のおかげで電化製品の八割が殺ヤられていて冷蔵庫の中身が

全て全滅していた。

加えて非常食のカップ焼きそばを食べようとしても流し台に麺を全部ぶちまけ外食しようにもキャッシュカードを踏み碎き小萌先生から電話があり。

「上条ちゃんは馬鹿ですから補習です〜♪」

と連絡網^{ラフコール}が来た。

とりあえず上条はカードの再発行と冷蔵庫・・・というより朝ご飯をどうするか悩んでいた。

麻生に作ってもらうかと思ったが上条の冷蔵庫が殺^ヤられているのなら麻生の冷蔵庫も同じだろうと考えコンビニで何か食べるかという結論に至った。

「いい天気だし、布団でも干しとくかなー。」

そう呟いて気持ちを切り替えて網戸を開ける。

天気もよく補習から帰ってくればふかふかの布団になっているはずだ。

二メートル先にビル壁がなければ。

「空はこんなに青いのにお先は真っ暗♪」

一人でこんな事を呟かないとやってられない状態まで追い込まれる。とりあえず布団を干そうとベランダを見たら既に白い布団が干してあるのが見えた。

上条は一人暮らしなので布団をベランダにかけられるのは上条以外存在しない。

よく布団を観察するとそれは布団ではなく白い服を着た女の子だった。

「はぁ!？」

手に持っていた布団がぼさりと落ちた。

鉄棒の上でぐったりとバテていて身体が折り曲り両手両足をだらりと真下に下がっている。

年は上条より一つか二つ年下に見える。

外国人らしく肌は純白、髪の色は銀髪だろう。

髪の長さはとても長くおそらく腰ぐらいまで伸びているだろう。

服装は教会のシスターさんが着そうな服装だった。

色は漆黒ではなく純白だが。

上条が観察しているとピクンと女の子の指先が動いた。

だらりと下がった顔がゆっくりと上がる。

女の子は割と可愛い顔をしていた。

上条は一目で外国人と判断した。

上条の英語のスキルは英語の教師に一生鎖国していろ、と言われるレベル。

どうやって対話をするか考えていると。

「オ・・・・・・」

その言葉を聞いて一歩後ろに下がる。

次に女の子が言った言葉は。

「おなかへった。」

ガンガン!!と麻生の部屋のドアが音をたてる。

麻生はその音で目が覚めて昨日と同じ事が起こった事を思い出す。
麻生はおそらくドアの前に立っている人物も同じだろうと考えドア
ノブに手をかけドアを開ける。

ドアの前に立っていたのはやはり上条だった。

そしてその後ろには純白の色のシスターが着るような服装を着てい
て銀髪が腰まで伸びている外国人が立っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・誘拐でもしたのか？」

「ちげえよ!!!!!!なんでお前はそんな方向に考えるんだよ!!!!!!」

麻生はなぜ上条が幼い外国人を連れているのかよく分からなかった。
ただこれだけは分かっていた。

（また面倒な事に巻き込まれそうだな。）

上条の説明を受けた内容によると布団を干そうとした時この女の子
がベランダに引っ掛かっていて第一声がおなかへったらしい。

あいにく上条の部屋にはこの女の子に食わせてあげる食べ物がなく
緊急事態として麻生の所に助けを求めに来たのだ。

麻生は俺の部屋はそんな部屋ではないのだがと思い二人を部屋に招
き入れる。

上条一人だけなら追い出すのだが知らない人とはいえ上条のご飯を
食べさせるともっと面倒な事がこっちに降りかかりそうなのでご飯
だけだぞ、と言って部屋に入れた。

麻生の冷蔵庫も上条と同じ状況になっていた（中身は水だけだが）。
なので仕方なく麻生の能力で三人分の食材を具現化させる。

麻生が料理を作っている間、上条とその女の子が話をしている。

「まずは自己紹介からだね。

私の名前はね、インデックスって言うんだよ。」

「誰がどう聞いても偽名じゃねか!!!」

「見ての通り教会の者です、ここ重要。

ちなみにバチカンの方じゃなくてイギリス清教の方だね。

それと禁書目録インデックスの事なんだけど・・・あつ魔法名ならDedicator
atus545だね。」

「もしもし? もしもーし?

一体ナニ星人と通話中ですかこの電波は?」

上条はインデックスが何を言っているのか全く分かっていないようだ。

しかし麻生は違った。

麻生は料理を作りながらさっきのインデックスの言葉を聞いて考える。

(魔法名・・・禁書目録・・・どうやらこいつはあっち側の人間
ってことか。

どうやら上条の不幸は学園都市を超えてあっち側まで及ぶとはね。

)

そう思いながら料理が完成したので二人の所に持っていく。

メニューは野菜炒めに目玉焼きに味噌汁とご飯の簡単なメニューだった。

それを見たインデックスは目を輝かせて今にでも食べそうな勢いを出していた。

対する上条も同様にお腹が減っていたのかすぐに食いつきそうな雰

困気を出していた。

麻生が食べていいぞと言うといただきますと二人が同時に言い一気に食べ始める。

「おいしい！！これすつごくおいしい！！！」

「さすが麻生の作った料理だ。

この味なら料理屋とか出せるだろ。」

二人が興奮しながら話しかける。

麻生はそれはどうも、と軽くスルーして自分もご飯を食べる。

三人が食べ終わり麻生が食器を洗っている最中に上条とインデックスの会話が再開される。

「そういえばどうしてお前はあんな所に引っ掛かっていたんだ？」

「落ちたんだよ。」

本当は屋上から屋上に飛び移るつもりだったんだけど。」

確かにこの学生寮と同じようにビルとビルが並んでいて隙間はだいたい二メートルぐらいしかない。

走り幅跳びの要領で飛べば何とか飛び越える事が出来るだろう。

上条はなぜそんなことを？、と聞くとインデックスは。

「追われてたからね。」

インデックスがそう答えると一瞬空気が止まる。

「追われてるって何に追われてたわけ？」

「魔術結社だよ。」

また三人の空気（実際には麻生は会話に入っていないが）がまた止まる。

その言葉を聞いて上条はまじゅつなんてありえねえ！！、と頭から否定している。

対するインデックスは魔術はある！！、と言い張っている。

麻生は二人の会話が平行線を辿ると思い洗い物が終わると会話に入る。

「魔術はあるかもしれないぞ。」

麻生が以外にも魔術はありと言い出したことに驚いている。

「麻生はこいつの言葉を信じるのか？」

「いや、あるかもしれないと言っただけだ。」

世界は広い、そんな世界ではもしかしたら呪文を唱えて炎を出す魔術師だって居るかもしれない。

あくまで可能性の話だよ。」

麻生の言葉を聞いて上条は一応納得？した表情をした。

麻生は続いてインデックスに質問する。

「インデックスは何でその魔術結社に追われているんだ？」

「私の持っている一〇万三〇〇〇冊の魔道書。」

それが連中の狙いだと思う。」

三度目の空気が停止する。

今度は上条は呆れ顔をしながらインデックスに質問する。

「その一〇万三〇〇〇冊の魔道書はどこにあるんだよ？」

まさか馬鹿には見えないとか言い出すんじゃないだろうな。」

「バカじゃなくても見えないよ。」

勝手に見られると意味がないもの。」

上条はインデックスに馬鹿にされているのでは？と思う。

そして上条はもう付き合ってられないと言った顔をする。

麻生は早く二人を追い出したい（面倒事には巻き込まれたくないので）で話を進める。

「ならこういうのはどうだ？」

麻生の提案に二人が耳を傾ける。

「インデックスが何か魔術を使いそれを上条が打ち消す。

そうすれば魔術が存在している事の証明になり超能力も証明にもなる。」

二人はその提案を聞いて納得するがインデックスは少し戸惑っているようだ。

「わ、私魔力無いから魔術使えない……」

上条はそれを聞いて魔術の証明出来ないのに魔術があると言い張っていたのか、と呆れる。

「なら魔力の通った物はないか？」

こいつの右手は幻想殺しイマジンプレイカーって言ってな。

触れる物が異能であれば全て打ち消す能力を秘めている。」

魔力の通った物を出してもそれが魔術の道具だという証明にはならないがこの場を早く収めたい麻生は適当に提案していく。

「それならこの服。

これは「歩く教会」っていう極上の防衛結界なの。

布地の織り方、糸の縫い方、刺繍の飾り方まで全てが計算されているの。」

そうですかい、と上条は言うとう右手でインデックスの肩に触れる。

（待てよ・・・あいつの言っている事が本当なら俺の右手が触れただけでこの服が木端微塵になるってことじゃないか！！！！）

そう考えたが時すでに遅し。

上条の右手はしっかりとインデックスの肩に触れている。

上条は反射的に絶叫（麻生はうるさそうな顔をしている）するが何も起きない。

「あれ？」

「ほらほら何が幻想殺しイマジンプレイカーなんだよ。べっつに何も起きないけど？」

インデックスは両手に腰を当てて小さい胸を大きく張るインデックスだが次の瞬間にはプレゼントのリボンをほどくようにインデックスの衣類がストンと落ちた。

頭一枚布の帽子は右手で触れなかったので無事だがそれ以外は全部床に落ちている。

詰まる所完全無欠に素っ裸だった。

第6話（後書き）

今回のように原作と同じセリフを引用する場合があります。
ご了承ください。

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第7話

インデックスは自分の状態が素っ裸の状態になった事に気づくと涙を溜めて麻生には噛みつかず上条だけに噛みついて上条は何で俺だけなんだよ！！！！、と叫びながらインデックスに噛みつかれ麻生はその光景を水を飲みながら傍観していた。

インデックスは麻生から毛布を借りそれを身体を包み安全ピンも借りてそれを使い何とか修道服の形を整えようとしてもぞもぞと動いていて上条はお前は蚊か何か？とぶつぶつ呟いている。

そしてインデックスは毛布をばっ！！と脱ぎ捨てると元の修道服になっていた・・・安全ピンが何十本もギラギラと光らせていて上条はそんな服を着るのかと疑問に思ったがインデックスはシスターだから着る！！！！とまた涙を溜めながら言った。

「そういえば補習があるのを忘れてた！！」

上条は焦って立ち上がると小指をテーブルの角に打ち付けあまりの痛みに悶絶しているとポケットから携帯がするりと落ちそれを足で踏んでしまう。

「ふ・・・不幸だあああああ！！！！！！！！」

両手を頭に抱えて上条は吠える。

インデックスは上条の右手をじっと見つめていた。

「もし君の右手が本当にそんな力を宿していたら仕方ないかもしれないね。」

「・・・・・・・・・・どういう事ですか、シスター様？」

「君は魔術マジックの世界のお話なんて君は信じないと思うけど神様のご加護とか、運命の赤い糸とか、そういうものがあつたとしたら君の右手はそういうものもまとめて消してしまっているんだと思うよ。」

クスクス笑い安全ピンまみれの修道服をひらひらさせながら「歩く教会」にあつた力も神の恵み（ラッキー）だからね、と言い上条は魔術の事は全く信じなかったが不幸の話は疑いなく信じているようで不幸だ、とまた一人で呟いていた。

「それでお前はこれからどうするんだ？

麻生の家に「俺はご飯だけと言つたはずだ。」・・・なら俺の部屋の鍵でも渡しておこうか？」

上条の不幸は今に始まつた事ではなくすぐに切り替え今度はインデックスの身の心配をしている。

インデックスの言っている事は全部信じた訳ではないが実際上条の右手がインデックスの服に反応したので何かに追われている事は信じていいと思っている。

麻生は本当にこいつは、と呆れを通り越しているようだ。

「いい、出てく。」

インデックスは簡潔にそう言うのと部屋の出口まで歩いていく。

「どうしてだ？

追われているなら俺の部屋でじっとしていれば問題ないだろう。」

「そうでもないんだよ。」

そう言ってインデックスは自分の服を掴む。

「この歩く教会は魔力でできているの。
だから敵はこの歩く教会の魔力を探知して追ってくるの……
君の右手に粉碎されちゃったけど。」

「悪かったから涙目でこっち見るな。
けどその発信源を俺がぶっ壊れてしまったんならもうその機能は
無くなっちゃったんじゃないか？」

「だとしても「歩く教会が壊れた」って情報は伝わっちゃうよ。
「歩く教会」防御力は簡単に言うとな「要塞」並みの。
理由はどうかあれ「要塞」が壊れたと分かれば迷わず打って出ると
思う。」

「ちょっと待てよ、だったらなおさら放っとけねーだろ。
オカルト魔術は信じらんねーけどとにかく「誰か」が追って来てるって分
かってんのにお前を外になんか放り出せるかよ。」

その言葉を聞いたインデックスはきょとんとした顔をしてにっこり
と笑顔になって上条に言った。

「じゃあ、私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？」

その言葉を聞いて上条は言葉を失う。
インデックスは優しい言葉を使って暗にこう言ったのだ。
こっちにくんな。

麻生は立ち上がり上条の肩に手を置くと上条に話しかける。

「これ以上は関わるな。」

インデックスもそれを望んでいるはずだ。
もし何かに追われているとしてお前に何が出来る？」

麻生にそう言われ上条もそれ以上は関わろうせずインデックスもそれが分かれると教会に逃げれば何とかかなると言って部屋を出て行った・
・帽子を麻生の部屋に置き忘れて。

「おい、上条。

この帽子、お前が持っている。

お前が起こした不幸なんだからな。」

麻生がそう言うと黙ってインデックスの帽子を左手で受け取り上条は自分の部屋に戻り麻生は上条が出ていくいつもの服に着替えて部屋を出ていきそのまま散歩を始める。

ふらふらと宛てもなく歩いていると麻生の名前を呼ぶ声が聞こえそ
の方に振り向くとそこには初春と佐天がこっちに来ていた。

「こんにちは、麻生さん。

何をしているんですか？」

佐天が麻生に質問する。

「散歩だ。」

簡潔に答えるとまた佐天が麻生に質問してきた。

「ところで麻生さんはレベルはいくつですか？」

「0だがそれがどうかしたのか。」

その事を聞くと佐天はなぜか嬉しそうな顔を見ると麻生の手を取り良い物を見せてあげます、と言って強引に麻生を連れて行き初春が申し訳なさそうに頭を下げながらついてくる。

少し歩くと喫茶店に到着すると窓際のテーブルに美琴、白井ともう一人ボサボサな栗色のロングヘアの女性で、目の下には濃いクマがある女性も座っていた。

佐天は窓にぴったりとくつつき、美琴達に自分がいる事をアピールすると美琴達は佐天達に気づき初春は美琴達に少し頭を下げ麻生はめんどくさそうに頭をかいていた。

店内に入り知らない女性の所に初春と佐天が座り麻生は美琴の隣に座る、麻生は帰ると言ったが佐天がそれを許さなかったので仕方なく座る事にした。

もう一人の女性の名前は木山春生と言う名前で大腦生理学専門チーム所属の女性でA I M拡散力場について色々調べているらしい。

A I M拡散力場

A I M拡散力場とは能力者が無自覚に発してしまう微弱な力のフィールド全般を指す言葉。

A I M拡散力場はとても微弱で、精密機器を使わなければ人間には観測できないレベルであるが、千差万別の力や種類を持つ、現実に対する無意識の干渉であるこの力場を探ることで、能力者の心や『自分だけの現実』パーソナルリアリティを調査することもできる。

佐天と初春が木山に自己紹介をして麻生も一応自己紹介をする。

「麻生恭介、レベル0で通りすがりの一般人Aです。」

「ほう、面白い自己紹介だな。」

「何が通りすがりの一般人Aよ!!!!」

私の電撃を一度も当たってないでしょ!!!!」

その発言を聞いて麻生と美琴以外が驚いた顔をする。

それもその筈、超能力者（レベル5）で「超電磁砲^{レベルガン}」で有名な美琴相手に一撃も電撃が当たってないと分かれれば誰であろうと驚く。

麻生は面倒な質問をされる前にこちらから何とか話をはぐらかす。

「それでどうしてAIM拡散力場とか調べている学者と一緒に行動しているんだ？」

その質問を聞いて初春も同じ事を思っていたらしい。

「もしかして白井さんの頭に何か問題が？」

それを聞いた白井は少しむかついた顔をしていたが真面目に答えを返す。

「「幻想御手^{レベルアップバー}」の件で相談していましたの。」

白井の言葉を聞いて佐天がポケットから音楽プレイヤーを取り出し何か言おうとしたが次に白井が言った言葉で動きが止まる。

「「幻想御手^{レベルアップバー}」の所有者を搜索して保護する事になると思われますの。」

それを聞いて初春は疑問を述べる。

「なぜですか？」

「まだ調査中ですのではっきりとした事は言えませんが使用者に副作用が出る可能性がある事、そして急激に力をつけた学生が犯罪に走ったと思われる事件が数件確認されているからですの。」

「なるほど・・・どうかしましたか、佐天さん？」

不自然な状態で固まっている佐天に初春は呼びかけるが佐天はすぐに手を引っ込めながら別にと続きを言おうとしたが腕にコップが当たりその中身が木山の足にかかる。

佐天は木山に謝るが木山は気にしないでいい、と言い立ち上がるとスカート脱ぎ始めその場でストッキングを脱ぎ始めた。

「かかったのはストッキングだけだから脱いでしまえば・・・」

目の前でスカートとストッキングを脱がれ周りの男性は顔を赤くして同性である美琴達も顔を赤くするがそんな中、麻生だけ、興味ないのか水を飲みながら窓の外をじっと見ている。

色々ごたごたがあり既に夕方になっていた。

「確か麻生と言ったか。」

君に興味が出てきたから近い内に話が出来ればと思っている。」

木山は麻生にそう告げ去って行った。

佐天も何かに焦っていたのかすぐに美琴達と離れていき麻生も別れの挨拶もせずに美琴達から離れていき美琴は離れようとする麻生を追いかける。

「ちょっと待ちなさい！！」

「この間のリベンジよ！！！！」

美琴がそう宣戦布告すると麻生はため息を大きく吐いて、美琴の方に振り向く。

「前にも言ったと思うがお前じゃあ俺には勝てないよ。」

「そんなのやってみないと分からないでしょ!!!!」

「いや勝てないよ。」

お前が人間である限りな。

始め聞いたとき美琴は何を言っているか理解できなかった。

「人間である限り？」

一体どういう事!!!!」

麻生は美琴の質問にめんどくさそうに答える。

「簡単な事だ。」

俺を殺す事が出来るのは人外・・・所謂、神様や天使、悪魔と言った神話に出てきそうな奴じゃない限り俺を殺す事なんてできないよ。」

ますます美琴は麻生の言っている事が理解できなかった。

麻生は美琴の質問に答え終わると振り向きどこかへ行こうとするのを美琴は引き止めようと声をかけようとした時だった。

麻生がちらっと美琴を見ただけなのに一瞬美琴を見た目はとても冷たく拒絶の表しているかのような目だった。

美琴はその目を見ると足が止まりなぜか麻生を追う事が出来ず麻生も視線を前に向けどこかへ歩き出して行った。

(あいつ・・・あんな寂しくて冷たい目してたんだ。)

美琴はなぜか麻生を追う事が出来ず自分も寮に戻るのだった。

上条は小萌の補習がようやく終わりました。すぐ部屋に帰っていてエレベーターに乗り込み七階で降りるとその直線の通路の向こう、自分の部屋の前で清掃ロボットが三台もたむろしている。

この学生寮には五台の清掃ロボットが配備されておりその内の三台が上条の部屋の前で体を小刻みに前後させている所を見るとよっぱどひどい汚れを掃除している様に見える。

しかし上条にはこれを見てとても不幸な予感を感じた。

この清掃ロボットは床に張り付いたガムを素通りで剥がすほどの破壊力を持つドラム缶ロボなのだがそれが三台もいて苦戦するなど珍しい光景なのだ。

上条はその清掃ロボットが何を掃除しているか確認しに行くところには不思議少女インデックスが空腹でぶっ倒れていた。

それを見た上条は不幸だ、と呟きながらインデックスに呼びかける。

「おい！こんな所でナニやってんだよ？」

そしてまた一歩近づくとようやく重大な事に気づく。

インデックスは血だまりの中に沈んでいる事に。

「あ・・・？」

最初に感じたのは驚きではなく戸惑い。

インデックスの背中を見ると腰に近い辺りが真横に一閃されているのが確認できる。

さっきまで補習に出かけつい先ほどまで晩御飯はどうしようか考えていたのにあまりにもギャップすぎる現実の上条の思考は混乱させた。

上条はインデックスに集まっている清掃ロボットをインデックスから何とか引きはがそうとするが清掃ロボットはとても重く1台どかしていると別の二台がインデックスに向かってしまう。

「何だよ、一体何なんだよこれは！？ふざけやがって、一体どこでいつにやられたんだ、お前！！」

「うん？僕達「魔術師」だけど？」

インデックスの者ではない声の上条の後ろから聞こえた。

上条は殴りかかるように身体ごと振り返る。

男はエレベーターの横にある非常階段からやってきたようだ。

白人の男は二メートル近い身長だが顔は上条より幼く見えて服装は教会の神父が着てそうな漆黒の修道服、十五メートル離れているのに甘ったるい香水の香りを感じ、肩まである髪は夕焼けを思わせる赤色に染め上げられ、左右一〇本の指にはメリケンのような銀の指輪ギラリと並び耳には毒々しいピアス、ポケットから携帯電話のストラップが覗き、口の端には火のついた煙草が揺れて、極めつけには右目まぶたの下にバーコードの形をした刺青が刻み込んである。タトゥーこれだけをみてこの男を「神父さん」と呼ぶ男は世界中を探しても誰一人として存在しないだろう。

神父と呼ぶにも、不良と呼ぶにも奇妙な男。

魔術師 ステイルⅡマグヌスがそこに立っていた。

第7話（後書き）

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

主人公の戦闘の所に少し追加しました。

第8話

美琴達と喫茶店で話を終えた麻生はまた散歩を再開していたが美琴達と話をして疲れたのか寮に戻る事にする。

寮の前につくと上条がそこに立っているのだがまわりには自転車が何台も倒れており上条はずっと上の方を見ていて何か考え事をしてるようだ。

「おい、そこで何やっているんだ？」

「!?!?・・・何だ、麻生か。」

麻生が声をかけると一瞬驚いた顔をしてこっちを見るが声の主が麻生だと分かれると途端に上条は安心した顔をする。

麻生は上条が学生寮を見上げていたのを思い出し麻生も同じように見上げるとそこには炎でできて人の様な形をした者が二階の手すりを持ちながらこちらを見ていた。

上条はあの炎の化け物に麻生が気づいた事にどうやって説明しようか悩んでいると意外な言葉が麻生の口から出てきた。

「へえ」イノケンティウス「魔女狩りの王」か。

実際に見るのは初めてだな。」

「ど、どうして麻生はあれの名前を知っているんだ!?!?」

「理由はないな。」

ただ知っている、それだけだ。」

麻生は上条にアレがいる原因を聞く。

上条はあれはステイルと言う男が魔術によって作られた物だと説明してインデックスを追って来ていた奴らはあいつらの事という事をそしてインデックスが重傷である事を麻生に説明する。説明を聞いた麻生は結局お前の不幸が招いた事か、と言うと興味をなくしたのか学生寮に入ろうとするので上条がそれを止める。

「ちょっと待てよ!!」

お前はインデックスが重傷で死にかけているのにもしいつらに捕まったら何をされるか分からない状況でお前はインデックスを放っておくのかよ!!!」

「そうだ、別にあいつらが何をしようとも俺に被害が及ばなかったら何をしてても俺は邪魔はしない。

それにインデックスと俺はご飯を作った仲、それだけだ。

あいつらの事情に深く関わるつもりはない。」

関わるだけで面倒だと麻生は言い放った。

その言葉を聞いた上条は麻生の胸ぐらを強く掴んだ。

「何でそんなことが言えるんだよ!!!」

全くの赤の他人なら関わりたくないって気持ちはわかる、でもお前はインデックスが今どういう状況にいるのか知ってるだろう!!!」

上条は麻生があんな言葉を言った事がつらかったのだ。

なんだかんだ言いつつも自分の不幸や勝手な行動に付き合ってくれる麻生の口からそんなことを聞きたくなかったのだ。

麻生はそんな上条を見ながら思う、もし自分が星の真理を見なければこいつの手助けをしたのだろうか？麻生はおそらく手助けするだろうな、と思いながら胸ぐらを掴んでいる上条の手を振りほどく。

「生憎これが俺の性格でな。

自分から決して動かないが誰かが助けを俺に求めない限り動かない。

俺はそういった人間だ。」

麻生は何で上条にこんな事を言ったんだろうな、と自分に疑問を持つ。

いつもの麻生ならこんな面倒事に関わろうとはしない、もしかしたら自分でも気づかない内に上条の性格に影響されているのかもしれない。

麻生の言葉を聞いて上条は少し笑いながら麻生に言った。

「麻生、一緒にインデックスを助けてくれ。」

麻生は大きくため息を吐くと上を見上げて上から落ちてきたオレンジ色にひしゃげた金属の手すりを受け止める。

「敵の注意は俺が引き付ける。

その間に上条は非常階段を登ってインデックスを確保して安全な所に避難及び治療しろ。

俺が手伝うのはここまでだ。」

麻生と一緒にインデックスを助けてくれるの事に上条は嬉しく思うがどうやって注意を引き付けるんだ？と上条は疑問に思う。

なんせ相手は魔術師とあの炎の巨神の二つを同時に相手にしないといけないのだ、上条は学生寮に入ろうとする麻生にその事を伝えると麻生は少し楽しそうな顔をして答える。

「安心しろ、俺の殺せるのは神様や天使くらいだ。」

ステイルは煙草を吸いながら学生寮から飛び出した上条が戻ってこない事について考えていた。

イノケンティウス
「魔女狩りの王」に怯えて逃げ出したのか？、と考えそれなら早くインデックスを回収して立ち去ろうとした時、後ろの方からキンコンと音が聞こえた。

ステイルは上条が戻ってきたのか？、と思ったがそれはあり得ない
と考える。

イノケンティウス
「魔女狩りの王」は戦闘機に積んだ最新鋭のミサイルと同じような物で一度でもロックしたら絶対に逃げ切る事は不可能で例え隠れたとしても三〇〇〇度という炎の塊は障害物や壁、鋼鉄さえも溶かして一直線に進んでくる。

イノケンティウス
もしエレベーターのような密室に逃げれば確実に「魔女狩りの王」に殺されてしまう。

なら誰が？、と思い小刻みに揺れながらステイルは振り向くとそこには上条ではなく白髪に黒一色の服を着た男、麻生恭介が立っていた。ステイルは上条でないことに少しホッとして麻生に話しかける。

「君は此処に住んでいる生徒なのかな？」

ステイルは必要以上に騒ぎを起こしたくないのであくまで魔術師としての顔を伏せようとしたが麻生が次に放った言葉で意味をなくす。

「無理をしなくてもいいぜ、魔術師。」

その言葉と同時に「魔女狩りの王」^{イノケンティウス}の身体が一瞬にして凍りつくが「魔女狩りの王」^{イノケンティウス}の炎の温度は三〇〇度近くあるので凍った所ですぐにその氷を溶かし麻生に突進する筈だ、とステイルは考えていたが一向に「魔女狩りの王」^{イノケンティウス}は動き出さない。

「どうした、」^{イノケンティウス}「魔女狩りの王」！！！！！！

さっさとその男を殺せ！！！！！！」

「無駄だ、そいつは動かないよ。」

その氷はただの氷じゃない。

魔力を練りこんで封印の術式をかけているからな。

「魔女狩りの王」^{イノケンティウス}でもその氷から出る事は不可能だ。」

ステイルは麻生の言っている事が信じられなかった。

「魔女狩りの王」^{イノケンティウス}を凍らせ封じる魔術などステイルは聞いた事がなかったからだ。

麻生はゆつくりとステイルに向かって歩いていく。

「それとお前の「魔女狩りの王」^{イノケンティウス}には色々弱点が多すぎる。特に駄目なのがこれだ。」

そう言っただけ麻生はステイルがこの学生寮に張り付けたルーンが書かれている紙を取り出す。

「これはコピー用紙を使っているみたいだがこれじゃあ水に濡れた途端、書かれているインクがとれてしまうぞ。」

後、ルーンの紙の配置が集中しすぎているから簡単に「魔女狩りの王」^{イノケンティウス}をこちらが操る事だってできた。」

ステイルはこの男は何者なんだと、思う。

この学園都市の人間なのにやたら魔術に詳しくこっちの魔術にダメ出しをするなど普通の学生とは到底思えない。

ステイルは呪文を唱え炎の剣を右手に作る。

「お、お前は一体何者なんだ!!!」

そう言いながら炎の剣を麻生に向かって振りかぶる。

その炎の剣の温度は三〇〇〇度近くあるがその炎の剣を麻生は右手で受け止めた。

「ただの通りすがりの一般人Aだ。」

右手で炎の剣を握り潰し左手で拳を作りその拳がステイルの顔面に突き刺さり向こうの壁まで吹き飛ぶとそのままステイルの意識は途切れる。

麻生は指をパチン!!と鳴らすと「イノケンティウス魔女狩りの王」の氷が砕けステイルが気絶したのかそのまま「イノケンティウス魔女狩りの王」は燃え尽きてしまう。どうやらインデックスは上条がうまく回収して逃げる事が出来たようだ。

それを確認すると麻生は欠伸をしながらいつも通り自分の部屋に入りベットに寝ころびそのまま睡眠をとるのだった。

朝になって携帯の音が鳴りそれで麻生は目を覚まし携帯をとり画面を見るとその名前は上条当麻と映っていた。

「何だ、こんな朝っぱらから。」

「その調子だとそっちは何とか撃退したみたいだな。」

声の主は間違いなく上条でどうやら麻生の無事を確認する為に電話をしてきたようだ。

「こっちは小萌先生の家に居候している。

そっちは敵が待ち構えているかもしれないからな、あとインデックスは怪我も治したし大丈夫だ。」

麻生はそんな状況の報告に一体何の意味があるのかよく分からなかったが上条が一方的に話しているだけなので適当に相槌を打つ。

「なあ麻生に聞きたい事があるんだけど、どうしてお前は魔術の事とか知っているんだ？」

「別に昨日も言ったが俺はただ知っているだけだ。

実は俺も魔術師でした、なんてそんな落ちはない。」

「そうか・・・けど、昨日は助かった。

また何かあったら助けてくれるか？」

「さあな、俺はお前の様に困っていたら誰でも助けるような事はないからな。」

麻生は上条にそう言い携帯のボタンを押して通話を切る。

そのまま立ち上がりいつもの服を着ると麻生はいつもの散歩に出かける。

学生寮から麻生が出ていくところを六〇〇メートル離れた所からステイルは双眼鏡で麻生を観察していた。

「インデックス禁書目録に同伴していた少年の身元を探りました。

……かのじよ禁書目録は？」

ステイルはすぐ後ろまで歩いてきた女の方も振り返らずに答える。

「生きているよ。

だが生きているとなると向こうにも魔術の使い手がいるはずだ。」

ステイルはあの男が治療したのでは、と考えている。

女の方は無言だったが誰も死ななかった事に安堵しているようだ。

女の歳は十八だが十四のステイルよりも頭一つ分も身長が低いがステイルの身長が二メートルを超す長身なので女の方も日本人の女性の平均からすればやはり高い。

腰まで届く長い黒髪をポニーテールにまとめ、腰には「令刀」と呼ばれる日本神道の雨乞いの儀式などで使われる、長さ二メートル以上もある日本刀が鞘に収まっている。

服装は着古したジーンズに白い半袖のTシャツで、ジーンズは左脚の方だけ何故か太股の根元からばっさり斬られTシャツは脇腹の方で余分な布を縛ってヘソが見えるようにしてあり、脚には膝まであるブーツ、日本刀も拳銃みたいな革のホルスターベルトに挟むようにぶら下げている。

彼女を「日本美人」と呼ぶのは少し抵抗があるだろう。

ステイルと同様まともな格好とは思えなかった。

「それで、神裂。

アレは一体何なんだ？」

「それですか、少年の情報は特に集まっては「そっちの方じゃない。……両方とも情報は集まっています。」

少なくとも魔術師や異能者といった類ではない、という事になるでしょうか。」

「何だ、もしかしたらアレらがただの高校生とでも言うのかい？ やめてくれよ。」

僕はこれでも現存するルーン二四字を完全に解析し、新たに力のある六文字を開発した魔術師だ。

何の力持たない素人………」

ステイルは言葉が続けようとしたが出来なかった。

最初にステイルと対峙した男、上条は確かに異常な能力を持っていたが魔術戦においては素人、神裂から見れば「ただのケンカっ早いダメ学生」という分類に入る。

しかし二人目の男、麻生は違った。

ステイルの「イノケンティウス魔女狩りの王」を封じその弱点を一瞬で見抜き、ステイルを殴り飛ばした時も神裂から見れば何かしらの武術、それもかなりのレベルまで習得している事が分かった。

二人が注意しているのは上条ではなく麻生の方だった。

「神裂、本当にあの男はどこの組織の者か分からないのか？」

「ええ、何より貴方の「イノケンティウス魔女狩りの王」を封じ込めるほどの者が魔術側こちらに居たら確実に何か情報があるはずです。」

しかし彼の情報はほとんど見つからず学園都市からも目立った情報が手に入らなかったのでステイルと神裂と呼ばれる女は麻生を観察しているのだ。

すると麻生は足を止めとあるビルの屋上を見る。

その視線の先にはステイルと神裂がこちらを見ていた。

「っ!？・・・気づかれている。」

「ステイル、場所を変えましょう。」

神裂がそう言うのと二人はビルの屋上から移動する。

（視線を感じたから誰がいていると思って目を……変えて見たら昨日の奴らか。）

一人見慣れない女がいたが麻生は気にすることなく散歩を再開するのだった。

第8話（後書き）

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第9話（前書き）

今回は短いです。

第9話

ステイル達の監視の目がなくなった事を確認すると麻生は再び散歩を再開する。

いつもは街中など散歩しているのだが今回はビルの間を適当に散歩して曲がり角を曲がった時ちょうど目の前でガン！！と何かがぶつかる音がした。

麻生は前を見て見ると男二人が傷だらけの男の両腕を持ちもう一人の男が女の子の顔の真横に蹴りをしている所だった。

麻生は面倒な場面を見てしまったと思う、なぜならその女の子はあの佐天だった。

こういう経緯があって佐天が不良達に絡まれているか分からないが確実に言える事は佐天が危険だという事は傍から見てもすぐに分かったが麻生は手出しするつもりはなかった。

「なんだ・・・お前も俺達の邪魔しにきたのか？」

傷だらけの男の腕を持っていた男の一人が麻生に向かって歩き出し麻生の胸ぐらを掴む。

麻生は自分から人助けはしない、他人から助けを求められない限り動こうとはしないのだが相手から麻生に喧嘩を売るのは話は違ってくる。

「汚い手で俺の服に触るな。」

麻生はそう言って胸ぐらを掴んでいる男の手首を右手で掴み左足で男の両足を払い一回転させて地面に叩きつける。

麻生の一連の動作は早く男は麻生がどうやって自分を地面に叩きつけたのか分からなかった。

麻生は男のみぞを踏みつけ気絶させて他の不良達を睨みつける。

「どうやらなかなか強いみたいだな。

けどな・・・」

傷だらけの男の腕を掴んでいたもう一人の男が右手の指を動かすと近くにあった鉄柱や鉄パイプなどが浮かび上がってくる。

「俺の能力でその高く伸びた鼻、へし折ってやるぜ!!!!」

右腕を麻生の方に振りかぶるとそれに応じるかのように鉄柱などが麻生に向かって飛んでくる。

「危な・・・」

佐天がそう叫ぼうとしたが麻生はそれを簡単にかわし、さらに飛んで来た鉄パイプを左手で掴みそのまま接近して男の脇腹に横一文字のように殴りつけうめき声もあげる事無くそのまま真横に吹き飛び地面に転がり動かなくなる。

「カカカカカツ、能力なしでそこまで戦えるってことは相当慣れてるな。」

佐天の顔の真横に蹴りをしていた男はいつの間にか煙草を吸って麻生の戦いぶりを見ていた。

「正直、手を出すつもりはあんまりなかったけどそっちから手を出してくるのなら話は別だ。」

麻生は手に持っていた鉄パイプを横に投げる捨てて男に向かって歩

きながら接近する。

「オレ達はよー」

対する男の方も煙草を捨て麻生に向かって歩いてくる。

「盗みや暴行に恐喝にクスリ、他にもいろいろあくどい事して楽しんできたけどよ。」

最後にはいつも風紀委員や警備員に追われてなウゼってー目に遭わされてきたんだ。

だからお前みたいに正義面した奴を見るとなぶっ殺したくなってくるんだよ！！！！」

その言葉と同時に男は一気に麻生との距離詰めてくるが麻生は頭をかきながら言う。

「お前は何か勘違いしているようだな。」

俺は一度も正義面をした覚えはない、そんなのはあいつだけで充分だ。

ただ俺はな・・・」

男はポケットからナイフを取り出しそれを麻生の顔に向かって振りかぶるがそれをかわし左手で握り拳を作る

「俺に喧嘩を売ってくる奴らを叩き潰すだけだ。」

麻生は男の顔の顎を殴り男を打ち上げる。
そのまま後ろに倒れこんだ男はすぐに立ち上がり麻生との距離をとる。

（なんでだ！？）

俺の能力が効いてねえのか！？）

男は自分の能力が麻生に通じていない事に焦りの表情を浮かべる。

男の能力は偏光能力^{トリックアート}。

自身の周囲の光を捻じ曲げ、誤った位置に像を結ばせ周囲の目を誑かす能力。

相手が無能力者や能力者でも一対一戦で広範囲ではなく単体攻撃の能力なら相手なら有利に戦える能力。

麻生は普通に男の顔を殴りに来ていたので偏光能力^{トリックアート}の影響を受ける筈なのに男の顔面を捉えてきた。

「お前が思っている疑問に答えてやろう。」

そんな男の心情を見透かすように麻生は答える。

「俺の能力の副産物でな、俺の五感や俺自身に干渉してくる能力は俺が受けていいと思わない限り全て拒絶するようになっていく。

お前の能力は俺の目を誤認させる能力だろうが俺には通じない、それにもしお前の能力が俺に通用してもお前は俺には勝てない。

なぜなら……」

麻生は右手の掌を男の方に向ける。

「お前の能力は広範囲で攻撃する能力には何も役に立たないからな。」

すると男は突然身体が重くなり地面に倒れこんでしまい男の周囲の地面が大きくへこんでいく。

麻生は男の周りの重力を変換させて男を圧迫しているのだ。

今までにない重みを身体に受けミシミシと男の身体が悲鳴をあげそのまま意識を失った。

麻生は重力を元に戻し散歩を再び再開させようとするが待って下さい！、と佐天が引き止めたので足を止める。

「俺に何か用か？」

「あ、麻生さんは確かレベル0ですよね？」

「システムスキャン身体検査ではその結果が出たな。」

「で、でもさっき凄い能力を「これはどういう事ですか？」・・・あ、白井さん。」

佐天と話をしていると今度は白井もやってきて麻生は早々に立ち去ろうとするが白井にがちりと腕を掴まれてしまう。

「何を逃げようとしているのですか？」

貴方には色々聞かなければならない事がありますので一緒に来てくれませんか？」

どうやら逃げる事は出来そうにないので（能力を使えば簡単に逃げる事はできるが面倒なので使わないようだ）一緒に風紀委員の支部まで連行されることになった。

白井は佐天も来るように言おうとしたが佐天の姿はどこにもなかった。

第一七七支部につくとそこには初春もいて麻生は二人にさっきの出来事を簡単に説明する。

「ふむ、つまり貴方は喧嘩をふっかけられたのでそれに対応した、

これでよいですわね？」

「まあ大体合っている。

それでもう帰っていいか？」

麻生は白井に聞いたがまだ帰してはくれならしく麻生は当分散歩は控えようかな、と考える。

すると白井は何か思い出したかのように麻生に質問する。

「そういえば麻生さん。

レベルアップ幻想御手と言う物はご存知ですか？」

「いいや、俺は聞いた事はない。」

白井は最近^{レベルアップ}幻想御手が使われ能力者の犯罪が増えその能力者が原因不明の昏睡状態になっている。

白井は麻生に何か情報を持っていると期待したのだがその期待は外れたようだが麻生はその^{レベルアップ}幻想御手に興味が出てきたのか白井に説明を求める。

「^{レベルアップ}幻想御手は音楽ソフトの事を指しておりましてそれを聞く事で能力者のレベルを上がっているのです。」

その説明に続くかのように初春も麻生に説明する。

「麻生さんは木山さんを知っていますよね？」

^{テストメ}あの喫茶店にした人に聞いた話だと本来能力を上げるには^{レベルアップ}学習装置のような五感全てに働きかける事でレベルが上がるらしいのですがこの^{レベルアップ}幻想御手は音楽、つまり聴覚だけでレベルが上がる事は困難だそうです。」

「しかし、情報提供者によれば幻想御手はこれで間違いないそうです。レベルアップバー

なぜ聴覚だけでレベルが上がるのかそれは作ったのは誰で何が目的なのかさっぱり分からないのですの。

ですのでも情報を集めようとしているのですのよ。」

麻生は幻想御手レベルアップバーの説明を受けてもう興味をなくしたのか最後の方は適当に相槌をうっていた。

そして麻生は席を立ち帰ろうとする、白井もこれ以上呼び止める必要もないのか麻生を呼び止めようとしないと麻生は扉に手をかけると白井達にこういった。

「もしかしたらその幻想御手レベルアップバーは本当に聴覚だけでレベルを上げているのかもな。」

「どういことですか？」

「もしかしたら曲事態が五感に働きかけているかもな。」

その言葉を残し麻生は部屋を出ていく、初春は麻生が座っていた椅子の近くのテーブルに麻生の携帯が置かれていたのを発見して初春は麻生に返しに行く。

幸い気づいたのが早かったのですぐに麻生に追いつくことが出来た。

「麻生さんへ。」

「うん？」

「これ、携帯を忘れていますよ。」

初春の手には麻生の携帯が握られており麻生は初春にお礼を言い携帯を受け取る。

「あのゝ突然で申し訳ないんですけど麻生さんの携帯の番号を教えてくださいませんか？」

「なぜだ？」

「そのまた何かあったら助けてもらえたらな〜と思って。」

少し笑いながら言う。

麻生は別に構わないと言って自分の携帯番号を初春に教える。

初春は嬉しそうに番号を登録して白井さんにも教えます!!と言いつて走って立ち去った。

麻生は教えた事を後悔して再び散歩を再開するのだった。

第9話（後書き）

今回は短めになりました。

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第10話

朝、常盤台の女子寮の洗面器で美琴はパチン！と自分の頬を叩き気合いを入れる。

前回、麻生を追いかけてしようとしたが麻生の冷たい目を目の当たりにしてからなぜだか分からないがいつもより元気がなかったがグジグジしているのも自分らしくないと朝から自分に喝を入れる。

「いつまでもグジグジ引きずってらんないわね！

あの馬鹿達はいつか必ず倒すとして、今は自分にできる事からこなししていこう！！

まずは・・・・・・・・」

そう意気込むと美琴は女子寮を出てある所に向かった。

場所は変わり風紀委員の第一七七支部で白井は初春に傷の治療を手伝ってもらっていた。

「幻想御手」の情報を少しでも集めようと「幻想御手」を取り扱っている不良達に情報を聞こうとしているのだが日頃、風紀委員に邪魔をされているのがむかついていたのか白井が風紀委員だと分かるジャッジメントと襲いかかってくる者もいれば犯罪に走る者も少なくはない。

しかも相手は「幻想御手」でレベルが上がっており白井が苦戦する場面も何度かあった。

世間では「幻想御手」を使用すれば植物状態になると言う事実はまだ知られていないのだがこれが知られれば「幻想御手」を使用した生徒が自暴自棄になりどんな行動を起こすか分からない。

それに植物状態から回復した生徒はまだ一人もない。

白井はまず「幻想御手」の拡大を阻止しし、昏睡した使用者の回復させ、最後にこの一連の騒動を引き起こした者を捉える、これが今、白井達が解決しなければならぬ事だ。

その事を初春に伝えると白井は自分で巻いた包帯に違和感を覚え初春に巻き直すようお願いをする。

「そうだ、白井さん。」

この一件、御坂さんや麻生さんに頼まないんですか？」

「お姉様にわたくしのこんな姿を見せる訳にはいきませんわ。ただでさえここ数日元氣がないのに。」

麻生さんに関しては何度も助けてもらってますし頼むに頼めませんわ。

そういえば麻生さんは前に気になる事を言っただけでしたね。」

「えっと、レベルアップ「幻想御手」と言う曲事態が五感に働きかけているかもしれない、でしたね。」

一体何を言っているのでしょうか？」

「確か似た様な話をどこかで見た覚えが……」

白井はどこで話をしたのか考えている時だった。

突然支部の扉が開くとそこにおっす！と掛け声と共に美琴が入ってきたその瞬間、白井は初春の身体を美琴の頭上に空間移動させ美琴にこの傷を見られないよう初春で目隠しさせて美琴の頭と初春の頭がぶつかり二人が伸びている隙に急いで服を着る、白井。

美琴は一応、レベルアップ「幻想御手」の事はあらかじめ知っており何か手伝える事はないかと捜査を手伝いに來たのだ。

白井は美琴を巻き込みたくなかったが初春が美琴に自分達が知っている情報を美琴に教える。

「ふーん、テストメント「学習装置」かぁ……」

「五感全てに働く機材がない事には能力開発はできないとの事なのですが……」

「植物人間になった被害者の部屋を捜査しても『レベルアップ幻想御手』以外に何も見つからないんです。」

完全に手詰まりであることを美琴に知らせるがその報告を聞いていた美琴はある事を思い出す。

「逆に仮の話だけど『レベルアップ幻想御手』という曲自体に五感に働きかける作用がある可能性はないかしら？」

「そういえば麻生さんも同じ事を言っていましたね。」

麻生の名前が出た事で美琴の顔が一瞬、ムツとした表情になるが今は気にせず話を続ける。

「前にカキ氷を食べた時の会話覚えてない？」

「えーと何でイチゴ味を注文してしまったのか……いや、そっちでなく……あとは赤い色を見ると暖かく感じるとか……」

その会話を思い出すと美琴と同じ答えを答える。

「『共感性！！』」

「？」

共感性

共感覚性とは一つの感覚を刺激することで二つ以上の感覚を得る事。分かりやすい例を述べると暑い時に風鈴の音を聞くと涼しく感じる時があるだろう。

このように目や耳など一つの情報で五感に働きかける事を指す。

初春は早速この事を木山に報告する。

木山自身も共感覚性については見落としていたらしくそれらの理由があれば「ツリーダイアグラム 樹形図の設計者」の使用許可がおりるらしい。

ツリーダイアグラム
「樹形図の設計者」

ものすごい高性能な並列コンピューターで、正しいデータさえ入力してやれば、シミュレーション 完全な未来予測が可能。

そのため学園都市では天気予測は「予報」ではなく「予言」、確率ではない完全な確定事項として扱われる。

それを使えばすぐに結果が出てくると初春は安心して初春も木山の所に向かう為にバスに乗り込むと電話がかかってきたので画面を見ると佐天の名前が映っていた。

佐天とは最近連絡も取る事が出来ず初春はとても心配していたようですぐに出る。

「佐天さん!! 何日も連絡がとれないから心配したんですよ!!」

バスの中である事を忘れ、大声で話す。

すると周りの視線が初春に集まりようやく状況を掴み一旦切ろうとした時だった。

「アケミが急に・・・倒れちゃったの。」

「!?!」

佐天の話では佐天もたまたま「レベルアップ幻想御手」を手に入れたのだが前に喫茶店で白井が所有者を捕まえると言っていたので誰にも相談することが出来ずに一人で悩んでいた。その時偶然アケミやその他の友達と会いアケミ達が能力の補習があると言い出したので試しに「レベルアップ幻想御手」を使ってみるという話になったらしい。

「でも、でも、本当は一人で使うのが怖かっただけ。」

「と、とにかく今どこに……」

初春は佐天の様子が気になり近くのバス停で降り佐天の元に急ぐ。

「あたしもこのまま眠っちゃうのかな……そしたらもう二度と起きれないのかな？」

あたし何の力もない自分が嫌で……でも憧れは捨てられなくて……」

佐天は学園都市に入れば誰でも能力者になれると思っていたが実際に入ってみると無能力者（レベル0）と言う結果で何も能力を得る事が出来なかった。

同年なのに大能力者（レベル4）白井や超能力者（レベル5）である美琴に少なからず嫉妬していたのだ。

「ねえ初春、無能力者（レベル0）は欠陥品なのかな？
それがズルして力を手にしようとしたから罰があたったのかな？
危ない物に手を出して周りを巻き込んで……わたしっ！！！！」

「大丈夫です！！！！」

初春の言葉を聞いて佐天は言葉を失う。

「もし眠っちゃっても私がすぐに起こしてあげます！」

佐天さんもアケミさんも他の眠っている人達もみんな！！

だからドーンと私に任せて下さい、佐天さんきつと「あと五分だけ」とか言っちゃいますよ？」

「初・・春？」

「佐天さんは欠陥品なんかじゃありません！！！」

能力が使えなくなっただっていつも私を引っ張ってくれるじゃないですか！！

力があってもなくても佐天さんは佐天さんです！！

私の親友なんだから！！！！・・・だから・・・だから・・・そんな悲しい事言わないで。」

周りの目を気にすることなく涙を流しながら初春は佐天に言う佐天は涙声で笑い初春に言った。

「迷惑ばっかかけてゴメン。

あと・・・よろしくね。」

その言葉と同時に電話が切れ初春は急いで佐天のマンションに向かう。

部屋を開けると佐天も他の被害者と同様に昏睡状態になっていた。初春は病院に電話をして佐天を病院に運んでもらう、付き添いに行こうとしたが初春は行かずそのまま救急車が去っていくとある男に電話をかけた。

いつも通りに起きると麻生はいつもの服に着替える。

初春に電話番号を教えてからの三日間は何事もなく平和な三日間だった。

美琴に会う訳でもなければ白井や初春に会う事もなく上条も電話で状況報告以外に連絡もなく魔術師からの襲撃もなかったので麻生はようやく元の生活に戻ったか？と思った時麻生の携帯の電話が鳴り響く。

学生寮を出て歩きながら画面を見ると初春の名前が映っていた。

麻生はまた面倒な事が起こると思ったが出ない訳にはいかず着信ボタンを押す。

「麻生さん……」

元気な声で名前を呼ばれるかと思ったが以外にも初春の声は小さく元気がなかった。

「どうした、元気がないぞ。」

「佐天さんが倒れました。」

「……」

麻生は驚くわけでもなく初春の言葉を聞いていた。

佐天が「レベルアップ幻想御手」に手を出しその影響で昏睡状態になったと報告を聞く。

「麻生さん、佐天さんは欠陥品なんかじゃないですよね？」

あの電話の時佐天にああ言ったがその答えを誰かに聞きたかったの

だ。

そして麻生なら良い答えが返ってくると思ったが麻生の口から返ってきた言葉は初春が思っていた言葉と逆だった。

「そうだな、欠陥品だ。」

「!?!?・・・どうしてそんなこと言えるんですか!!!!!!」

周りの視線を気にせず電話越しに声を荒げて麻生に伝える。

麻生は最後まで聞けと初春を落ち着かせる。

「初めに言っておく、完璧な人間なんてこの世の中には存在しない。」

「えっ・・・」

「誰しも人間は人それぞれだがどこか欠陥している。

それは俺もそうだし美琴も白井もお前もどこか欠陥している。

たまたま佐天は能力のレベルが0という事実がその佐天の欠陥している所なんだろう。

というより能力のレベル何てな自身の努力で幾らでも上がるものだ、だが例えば佐天が努力してレベルが上がってもまた佐天のどこか欠陥が出来る。

人間はその欠陥を埋めようとしてもまたどこか欠陥してしまう者なんだよ。」

麻生の答えは難しく初春はその意味をうまく理解できないでいるとそれを見透かしたように麻生は大きいため息を吐く。

「簡単に言っていると佐天が欠陥品だ。」

だがそれは人間である限り仕方がない事だ。

こういう俺もどこか欠品しているしな。

いいか、初春、大切なのは自分を信じる事だ。

例えば周りがどんなに自分の事を無能だの欠陥品だの言われても自分を信じ続ける、自分で自分を信じられなくなった時こそ本当の欠陥品になってしまうのだからな。」

簡単に言われても完璧に意味を掴めることはできなかったがそれでも麻生の言葉を聞いて初春の気持ちは軽くなった気がした。

「ありがとうございます!!!」

私、佐天さんや他の人の目を覚ませるように頑張ります!!!」

「ああ、それじゃあ切る「それと・・・」・・・まだ何かあるのか?」

「麻生さんも手伝ってはもらえませんか?」

「・・」

・気分が乗ったらな。」

答えを曖昧にしたのに初春はありがとうございます!!!と大声でお礼を言い多分電話の向こうでも自然とお辞儀しているな、と想像しているとブチッ!!!と勝手に電話を切られた。

まだ行くとは言っていないんだけど、と思ったがもう聞こえないかと諦め麻生は散歩を止めて一七七支部に足に向けた。

一方、白井と美琴は佐天が昏睡状態になった事を聞いてすぐに病院に向かうとあるカエル顔をした医者が美琴達に話しかける。

その医者は患者の脳波に共通するパターンを見つけたらしい。

通常人間の脳波は活動によって波は揺らぐらしいのだがその波を無

理に正せば人体の活動に大きな影響が出るらしい。

被害者たちは「^{レベルアップ}幻想御手」に無理矢理脳波をいじられ植物状態になったのか？と美琴は推測する。

その医者は人間の脳波をキーにするロックがありそれに登録されているある人物の脳波と植物患者のものと同じだという。

初春も木山の部屋にたどり着き佐天が倒れた事、そして自分が今まで集めた情報を木山に伝える、木山はコーヒーを入れてくると言って部屋を出ていく。

その間部屋を見渡していると棚の隙間から一枚のプリントがはみ出ている事に気づき、初春はそれを棚の中に直そうとして棚を開けるとそこには木山が調べたであろう研究の資料がたくさん入っていた。ただの資料なら初春も気には留めなかったがそのファイルに書かれている題名を見て目を奪われる。

そこには共感性や音楽を使用した脳への干渉などの資料が書かれていたファイルが入っていた、初春はそれを読むのに夢中になっていると後ろから木山が来ている事に全く気づかなかった。

「いけないな、他人の研究成果を勝手に盗み見しては。」

「登録者名、木山春生！！」

第10話（後書き）

麻生の言っている事訳分からんかも（笑）

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第11話

レベルアップバー
「幻想御手」

「幻想御手」とは使用者の能力を引き上げる物ではなく同じ脳波のネットワークに取り込まれることで能力の幅と演算能力が一時的に上がっているだけに過ぎない。

一人の能力者がいてその力が弱い力だとしてもネットワークと一体化する事で能力の処理能力が向上してさらに同系統の能力者の思考パターンが共有される事でより効果的に能力を扱う事が出来る。

しかし「幻想御手」の使用者は他人の脳波に強要される続ける事を意味している。

その為使用者が昏睡してしまうのもネットワークに完全に取り込まれ脳が自由を奪われているからである。

白井と美琴は「幻想御手」の本当の力について話し合い白井は風紀ジヤット委員の支部のセキュリティを解いて部屋に入るとテーブルに腰掛けしている麻生が部屋の中にいて美琴と白井は思わぬ人物がいる事に驚いている。

「な、なんであんたが此処にいんのよ!!!」

「どうもこうも初春に手伝ってくれと頼まれたから此処でお前達が戻ってくるのを待ってたんだよ。」

それと白井、此処のセキュリティは甘すぎる。

もう少し強化した方がいいぞ。」

会って早々いきなりセキュリティの駄目出しをする。

白井は色々言いたかったが今の状況を考えるとそうも言ってもらえないので黙っておき麻生に今の状況について説明する。

一方初春は手には手錠されている状態で木山の車に乗せられてどこかに向かっている。

木山は初春を拘束しただけで危害は加えるつもりはなく初春の花飾りについて質問するなど何も変わらず初春に話しかける。

初春はその質問には答えず「レベルアップ幻想御手」を使い何を企んでいるのかを木山に聞く。

「あるシュミレーションを行う為にね。」

「ツリーダイアグラム樹形図の設計者」の使用申請をしたんだがどういう訳か却下されてね、代わりに演算機器が必要なんだ。」

「それで能力者を使おうと？」

「ああ、一万人大ど集まったから多分大丈夫だろう。」

「!？」

一万人もの人を巻き込んだ木山を初春は睨みつける。

「そんな怖い顔をしないでくれ。」

シュミレーションが終わればみんな解放するのだから。」

そう言って木山はポケットに手を入れある物を初春に渡そうとするが止める。

それは「レベルアップ幻想御手」のアンインストールする治療用プログラムでそれを使えば植物状態の人達を後遺症なく元に戻す物だが木山は此処で彼女に渡したところで意味はないと考え止める。

なぜなら木山は誰が相手だろうと負ける訳にはいけない、だから自分は負けてもいいと言う逃げ道を作る訳にはいけないと思った時、

車の中にある画面が反応を示す。

「もう踏み込まれたか。」

君との交信が途絶えてから動きだしたにしては早すぎるな。

別ルートで私にたどり着いたか……」

木山のパソコンは所定の手続きを踏まずに起動させるとセキュリティが作動してパソコン内のデータが全て失われるように設定されている。

木山は尚更負ける訳にはいかないと決意を決めた時、目の前に警備員達アンチスキルが銃器などを装備して道路に展開していた。

「私も出るわ。」

風紀委員の支部の中でジツとしているが性に合わないと言って現場に行こうと美琴が言い出す。

「初春も風紀委員の端くれ、いざとなれば自分の力で……多分何とか……運が良ければ……」

初春も風紀委員だが白井の様な強力な能力は持つておらず一人の力で抜け出すのは厳しい。

「ですが、単なる一科学者にすぎない木山に警備員を退ける術はな
いかと……」

「何千人もの昏睡した能力者の命を握られているのよ、そう上手く
いかないかもしれないわ。」

それに何か嫌な予感がするのよね。」

「ならなおのことこは風紀委員^{ジャッジメント}のわたくしが……」

白井は美琴に行かせるわけにはいかないと席を立つがそれと同時に美琴は白井の肩に手を置く。

そこは白井が怪我をしている場所で白井は触られただけで痛みに震えた。

「おねっ・・・お姉様気付かれて・・・」

「当たり前でしょ・・・アンタは私の後輩なんだから、こんな時くらい「お姉様」頼んなさい。」

白井はその言葉を聞くとそれを実行するかのよう^{よう}に美琴に抱き着こうとするが美琴に叩かれてしまう。

麻生は依然とテーブルに腰掛けて二人のやり取りをずっと見ていたが美琴は現場に行く前に麻生の前に立つ。

「あんたも一緒に来なさい。」

「お姉様・・・白井ではなく麻生さんをお連れになるなんてお二人の関係はそこまで進んでおられたのですね・・・」

「ば、馬鹿ね!!!! 誰がこんな奴と!!!!」

こいつは私が何度も電撃を撃っているのに一度も直撃した事ないから何かの役に立つと思ったから連れて行くだけよ。」

少し顔を赤くしながら白井に言う。

「初春にも手伝ってくれとも言われたしな、いいぜ一緒に行ってや

るよ。」

美琴は警備員から何か情報が入ったら教えてくれと白井に頼むと麻生を連れて支部を出てタクシーを捕まえると現場に向かった。

「木山春生!!」レベルアップ「幻想御手」の頒布の被疑者として勾留こうりゅうする、直ちに投稿せよ。」

「どうするんです？
年貢の納め時みたいですよ。」

初春も木山一人だけではあの数の警備員アンチスキルを退けないと思っているのだが木山は余裕の表情を浮かべていた。

「レベルアップ幻想御手」は人間の脳を使った演算機器を作るためのプログラムだ。

だが同時に使用者に面白い副産物もたらを齎す物でもあるのだよ。」

木山はそう言うとき車から降り警備員アンチスキルの言うとおりに両手を頭の後ろに組む警備員は初春が無事である事を確認すると木山アンチスキルを確保する。
だが、一人の警備員アンチスキルの銃が勝手に動きだし他の警備員アンチスキルに向けて発砲する。

「!?!?・・・貴様一体何を!!!!!!」

「ち、違う!!オレの意味じゃない!!!!!!
銃が勝手に・・・」

男がそう言った時、木山は両手を前につき出すとそこに炎が集り一つの炎の塊が出来る。

「馬鹿な！！学生じゃないのに能力者だと！！？」

美琴と麻生は現場近くまで来ると突然大きな爆発音が鳴る。

「な・・何だあ？」

「早くあそこまで！！」

「む、無茶言わないで下さいよ。

早く引き返しましょう。」

「だー！！！！もういいわ、ここで降ろして！！！！」

美琴はお金を運転手に渡し携帯を持って爆発音がした所に走って向かい麻生はゆっくりとタクシーから降りると歩きながら美琴の後を追う。

「黒子、何が起こってんの？」

何か情報が入っていると思い美琴は白井に電話を掛ける。

「それが情報が混乱してて・・・木山が能力を使用して警備員と交戦している模様ですの。」

「彼女、能力者だったの？」

「いえ、「書庫」^{バンク}には木山が能力開発を受けたという記録はないのですが……」

白井は警備員の車にあるカメラの映像を見ながら答える。

「しかしこれは明らかに能力……それも「複数の能力」を使っているしか……」

「どういう事それこそありえないじゃない!!
能力ってのは一人に一つだけ例外はない筈よ!!」

「状況から推測するしかないのですが……木山の能力は「幻想御手」^{ツパー}を利用したものではないでしょうか？」

何千人もの能力者の脳とネットワークと言う名のシナプスでできた「一つの巨大な脳」、もしそれを操れるのなら人間の脳では有り得ない事も起こし得ますの。

この推測が正しいのなら今の木山は実現不可能と言われた幻の存在……「多重能力者」^{デュアルスキル}。」

「多重能力者」^{デュアルスキル}

二つ以上の超能力を持つ能力者の事だが脳への負担が大きすぎるため実現不可能とされていて幻の存在とも言われている。

美琴は急いで階段を登るとそこには車などが横転して警備ロボも大破しており警備員も死んではいないがボロボロで気絶していた。

「警備員が全滅？」^{アンチスキル}

すると車の中に初春を見つけすぐに駆け寄り声をかけるが反応がない。

「安心していい。」

戦闘の余波を受けて気絶しているだけで命に別状はない。」

後ろから木山の声が聞こえたので振り向く。

「御坂美琴・・・学園都市に七人しかいない超能力者（レベル5）か。」

私のネットワークには超能力者（レベル5）は含まれていないがさすがの君も私のような相手と戦った事はあるまい。

君に一万の脳を総べる私を止められるかな？」

美琴と木山は向かい合っていると美琴が登ってきた階段から遅れて麻生がやってくる。

「おや？君も来ていたのか。」

意外だな、見た限りではこういった揉め事には積極的に介入してこない人だと思っていたのだが。」

「出来れば俺も関わりたくなかったがそこで寝ている花飾りに手伝ってほしいと言われたからな。」

「君に興味はあるのでね。」

どんな能力かこの目で確かめさせてもらおう。」

その言葉と同時に木山は片手を美琴と麻生に向けるとサッカーボールくらいの炎の玉ができそれが二人に飛んでくる。

美琴は後ろに下がり避けるが麻生はじっと動かないでいて炎が麻生

にぶつかり爆発するが煙が晴れると麻生は傷一つなく立っている。

「ふむ、あの攻撃で無傷か・・・ならこれならどうだ？」

木山は右手の指を握りしめると道路の割れ目から麻生に向かって一直線に炎が噴き出すが麻生はそれを横に移動する事でかわす。

「本当に能力を使えるのね。

それも「デュアルスキル多重能力者」！」

「その呼称は適切ではないな。

私の能力は理論上不可能とされるアレとは方式が違う。
言うなれば「マルチスキル多才能力者」だ。」

「呼び方なんてどうでもいいわよ。

こっちがやる事に変わりはないんだから。」

美琴は木山の頭上に電撃を降らせるが木山に当たる直前、電撃が木山の身体を避けるかのように移動する。

「!？」

「どうした、複数の能力を同時に使う事は出来ないと踏んでいたのかね？」

その言葉と同時に木山の足元から円を描くように何かが広がり麻生はそれにいち早く気づき後ろに下がる事でその円の領域から逃れるが美琴はそんなに身体能力は高くはなく（女性からすればかなり高い方だが）その円の領域に入った道路が一気に崩れる。

美琴は電磁力を使う事で道路を支えているコンクリートの柱の中に

ある鉄筋に反応させ足が柱に張り付く。

一方、木山は風を操り衝撃なく地面に降り立ち美琴に視線を合わせると空中に水が現れそれが小さく集まると美琴に向かって何個も飛んでいき、美琴は柱を下るように走りその水の塊を避けていきもう一度木山に電撃を放つがさつきと同じ様に電撃が独りでに木山を避けていく。

（やっぱり電流が誘導されている？）

さつきの台詞からするといくつかの能力を組み合わせて周囲に避雷針の様なものを作り出しているみたいね。）

「拍子抜けだな、超能力者（レベル5）というものはこの程度の者なのか。」

心底がっかりしたような声をあげる木山だがそこ言葉にカッチーンときたのか右手をあげると同時に電磁力を利用して柱のコンクリートの一部を浮きあげる。

「まさか電撃を攻略したくらいで勝ったと思うな！！！」

それを勢いよく木山に投げつけるがふむ、と木山が呟くと右手からレーザーの様なものが出てくるとそれが一メートルくらい伸びて飛んでくるコンクリートに合わせてるように振りコンクリートを切断する。

そして左手の指を美琴が足で張り付いているコンクリートの柱に向けてと今度は指先からレーザーなものが発射されコンクリートに当たると円を描きコンクリートが消滅する。

張り付いていたコンクリートが剥がれ美琴は地面に落ちる。

「いたた・・・もう！！！！あんたは見ていっただけで手伝わぬのか

「!!!!!!」

美琴は腰をさすりながら上で自分達の戦いを見ている麻生に向かって叫ぶ。

「私も気になっていたところだ。
どうして降りてこない？」

「どうしてと言われても俺が手を出すまでもないからだ。
お前はそこの電撃少女に負ける。」

そう言って麻生は傍観に徹するようだ。

「君もあの子と同じように傍観してくれればいい。
私はある事柄について調べたいだけなんだそれが終われば全員解放する。」

誰も犠牲にはしない「ふざけんじゃないわよっ!!!!」・・・

「誰も犠牲にしない？」

アンタは身勝手な目的にあれだけの人間を巻き込んで人の心をもてあそんで・・・こんな事をしないと成り立たない研究何てロクなものじゃない!!!!

そんなモノ見過ごせるわけないでしょうが!!!!」

美琴の言葉を聞いて木山は大きくため息を吐く。

「君は何もわかっていない。」

学園都市が君達が日常に受けている「能力開発」、アレが安全で人道的な物だと君は思っているのか？

学園都市は「能力」に関する重大な何かを我々から隠している。

学園都市の教師達はそれを知らずに一八〇万人にも及ぶ学生達の脳を日々「開発」しているんだ。

それがどんなに危険な事か分かるだろう？」

「なかなか面白そうな話じゃない。

アンタを捕まえた後でゆっくりと調べさせてもらおうわ！！！！」

電磁力で地面の砂鉄を操りそれを何本の剣の形にして木山に放つが木山は地面を壁代わりにしてその砂鉄の刃を防ぐ。

「調べるか・・・それもいいだろう。」

君が関わっているのも少くないしな、と美琴に聞こえない声で呟くと近くに落ちている空き缶を引き寄せるとそれを美琴に投げつける。

「だが、それもここから無事に帰れたらの話だ。」

その空き缶を見て美琴は前にあった虚空爆破事件グラビトンの事を思い出すと同時に空き缶が爆発する。

しかし美琴は咄嗟に電磁力で周りの鋼鉄や砂鉄を組み上げ即席の盾を作るが今度は空き缶が大量に入っているごみ箱を浮かび上がらせるとその中身を全て美琴に投げつける。

「今度は即席の盾で耐えられるかな？」

「ハッ！！」

だったら爆発前に全て吹き飛ばせばいいだけでしょーが！！」

美琴の周りに大量の電気が集まるとそれを使いものすごい速さで空

き缶を破壊していく。

（さすがに正攻法で攻略するのは不可能か。
だが・・・）

密かに空き缶を一個だけ手に持ちそれを操り美琴の後ろに回り込ませる。

美琴は空き缶を打ち落とすのに夢中で空き缶が背後に回り込んでくる事に気づいていない。

「ざっとこんなもんよ!!」

もうお終・・・」

言葉が続けようとしたがその瞬間空き缶が爆発した。

「正面が駄目なら搦め手に回るまで、もっと手こずるかと思っていたが意外に大したことがなかったな、

超能力者（レベル5）。」

美琴は空き缶に気づくことなく爆風に巻き込まれてしまう。

木山は上で傍観していた麻生に話しかける。

「さて、君は降りてこないのか？

君が勝つと言っていた少女は私に負けたがどうする？」

依然と木山は余裕の表情を浮かべながら言うが麻生は木山には聞こえなかったがため息を吐くと木山に言った。

「あんたに一つ忠告してやる。

見た目だけを見てそいつが死んだとか思わない事だ。

ちゃんと確認する事をお勧めするよ。」

麻生の忠告を聞いて木山は振り向こうとした時後ろから誰かに抱き着かれる。

この場面で抱き着ける者など限られてくる。

「つーかまーえたーー♪」

先ほど爆発に巻き込まれた美琴だった。

木山は美琴が倒れていた所を見るとそこには先ほどと同じ鋼鉄などで作られた盾が作られていた。

「AIM拡散力場の専門家に説明するのはアレだけど私の身体からは常に電磁波が出てるの。

妙な動きとかあったら反射波で察知できるから死角とか関係ないのよ。」

さっき倒れた振りをしていたのは木山を油断させる演技だったのだ。

「零距离からの電撃・・・あのバカには効かなかったけどいくら何でもあんなトンデモ能力までは持ってないわよね?」

「くっ!!」

木山は周りにある鉄筋を操りそれを美琴に向けて放つがそれよりも早く美琴が木山に電撃を浴びせた。

第11話（後書き）

今回は原作とあんまり変わりませんでしたね（笑）

次回は麻生君が頑張っちゃうよ！！

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第12話

麻生は橋の上から今までの戦いをずっと傍観している。

正直、木山は美琴には勝てないと麻生は分かっていた、なぜなら木山はこの学園都市の全能者の能力を手に入れた訳でもなくそのネットワークにも超能力者（レベル5）は入っている訳でもない。

電撃使いにおいて最強の強さを持つている美琴相手に幾ら能力を複数使っても勝てる筈がない。

麻生は結局無駄だったな、と美琴を置いて帰ろうとした時だった。

「あああああああ……！！！！！！！！！！」

突然木山の叫び声が聞こえてその足を止め再び橋の下を覗くと木山の頭の中から頭に輪っかが浮いている胎児のような生物が現れる。

「キィイヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

その叫び声と同時に周りの地面が抉られ吹き飛んでいき美琴もその爆風に飲まれていくが地面の砂鉄を使い盾を作り何とか防ぐ。

「何なのよ、アレ!!!!!!」

その問いに誰も答えてくれる筈がなくとりあえず電撃をその胎児に向けて放つとあっさりと電撃が直撃する。

（爆ぜた！？）

血も出てないしやっぱり生物じゃない？)

すると胎児の爆ぜた所が徐々に再生していき胎児の目が美琴を捉え

ると美琴の足元の地面から土の柱が美琴に向かってくる。
美琴は後ろに向かって走り何とか回避して応戦しようと振り返った時、胎児は美琴と逆の方向に向かって進んでいた。

「追ってこない？」

闇雲に暴れているだけなの？」

その頃、木山の能力を受けた警備員アンチスキルの中でもまだ動ける人達が集まりあの胎児に向けて発砲しているが弾が貫通してもすぐに再生してさらにどんどん大きくなっていく。

男の一人が背中を持っているグレネードランチャーのような銃器で胎児に発砲する。

「よっしゃ、命中！！！」

「やったか？」

爆風で見えないが全弾命中したので倒したかのように思われたが。

「気をつけてください。」

こういうパターンって大抵やられてない……」

眼鏡をかけた女の警備員アンチスキル言葉を続けようとしたがその前の二人の警備員アンチスキルが突然吹き飛んだのだ。

胎児はさらに大きくなり女はそれに恐怖して発砲するが全く効かず弾が切れてしまい胎児の身体から触手が一本、女の方に向かって伸びてくる。

「ア、アハハハハ・・そっ・・そっか立ホログラフイ体映像よね・・ぜん

ぶ幻……」

胎児が女に何かしようとした時、女の後ろから誰かに引っ張られて女のいた地面が数メートルくらいへこんでしまう。

女が自分を助けてくれた人を見るとそこには黒一色の服を着て髪が白髪の方が立っていた。

もし彼が引っ張ってくれなかったら女は今頃ぺしゃんこになっていただろう。

「おい、あんたに聞きたい事がある。」

「えっ……何ですか？」

「今回の任務に黄泉川愛穂と言う女の警備員は居るか？」
アンチスキル

「えっと、確か今回の任務に黄泉川さんは居ないはずです」

男はそうかと心なしか安心したような表情を浮かべる。

「と言うよりあなた誰！？」

民間人がこんな所で何しているの！？」

その言葉と同時に二人に向かって光の玉が飛んでくるが男が掌をその光の玉に向けると何かにぶつかったのか爆発しても男と女を避けるように爆風が広がっていったので被害はなかった。

「今の内にどこかに逃げろ。」

情報を教えてもらったから助けたが次はないぞ。」

「そもいかないのよ。」

女は近くにある建物を指さす。

「あの建物何かわかる？」

原子力実験炉。」

その頃美琴によって安全な所に寝かされていた木山は目を覚ますと遠くの方で暴れている胎児を見る。

「アハハハハハハ！！！」

凄いな、まさかあんな化け物だったとは……学会で発表すれば表彰ものだ。」

小さく息を吐くと後ろに差し込んでいた拳銃の銃口を自分の頭に向ける。

「もはや、ネットワークは私の手を離れあの子達を取り戻す事も恢复させる事もかなわなくなった……か。

おしまいだ。」

車の中で目を覚めた初春は状況を確認めようと橋の上から降りるとそこに木山が銃口を自分の頭に向けている所を見る。

「ダメエエエエエエエ！！！！！！！！！！」

そのまま飛び込んで自殺を阻止するが手錠の鎖が木山の首を絞めて死にそうになっていた。

木山に手錠を外してもらってあの胎児について聞く。

「虚数学区？」

あれって都市伝説じゃなかったんですか？」

「巷に流れる噂と実体は全く違ったわけだがね。

虚数学区とはA I M拡散力場の集合体だったんだ、アレもおそらく原理は同じA I M拡散力場でできた「幻想猛獣」（A I Mバースト）とも呼んでおこうか。

「レベルアップ幻想御手」のネットワークによって束ねられた万人のA I M拡散力場が触媒になって生まれ学園都市のA I M拡散力場を取り込んで成長しようとしているのだろう。

そんなモノに自我があるとは考えにくいがネットワークの核であった私の感情に影響されて暴走しているのかもしれないな。」

「どうすればあれを止める事ができますか？」

初春がそれを聞くが木山はポケットから「レベルアップ幻想御手」のアンインストールする治療用プログラムが出てくるが先ほどの美琴の電撃を受けて破損していた。

「やはり壊れているか。

こんな事になるのならあの時、君に渡した方が良かったな。」

「それは何のソフトですか？」

「これは「レベルアップ幻想御手」で昏睡状態を後遺症なく元に戻すデータが入っているソフトだ。

だがご覧のとおり完全に壊れていて私のパソコンもアンチスキル警備員が手順を踏まずに起動させたからデータは全て消えている。

あれを止めるには能力者を殺してA I M拡散力場そのものをなく

すしか方法はないな。」

学園都市には二三〇万人の八割が学生でそれを全員殺すなど実行できるわけがなく木山は「幻想猛獣」（AIMバースト）を止める方法はないと諦めた時だった。

「いいや、まだ手はある。」

木山が顔をあげると初春の後ろに麻生恭介が立っていた。

「話は全部聞かせてもらった。」

「何か考えがあるのか？」

あれを止めるなど100%不可能だ。

それこそ能力者を全員殺すくらいのことしない限りは。」

麻生は木山の言葉を聞いて木山の視線までしゃがみ目をじっと見る。

「この世に0と100は存在しない。」

「なに？」

「あんたは100%止められないと言ったが100%や0%ってことは絶対にできないということ。」

この世に絶対はない。

もし絶対なんてことがあるとすればそれは人は必ず死ぬこれだけだ。」

そう言って麻生は立ち上がり「幻想猛獣」（AIMバースト）に向かって歩いていく。

「俺が証明してやる。」

あんたが絶対にできないと言った事を俺が可能にしてやる。」

美琴は「幻想猛獣」(AIMバースト)の進行をどうにかして止めようとするが何度電撃や砂鉄で攻撃してもすぐに再生してしまい全く意味がない。

さらに「幻想猛獣」(AIMバースト)は原子力実験炉に向かって進んでいる。

美琴は眼鏡をかけた警備員アンチスキルにこの建物が原子力実験炉だということを知っている。

(何でまた原子力施設に向かってくるのよ!!)

怪獣映画かつーの!!!!)

すると水の塊が空中に出現してそれが美琴に向かって放たれてそれを後ろに飛んでかわすが着地した瞬間、足に「幻想猛獣」(AIMバースト)の触手に捕まってしまう。

「やばっ!!!!」

視線の先には鋭い棘が生えている触手が美琴を襲おうとしている。電撃で応戦しても再生するので全く意味がない。

(これってまずすぎる!!!!)

絶体絶命のピンチに「幻想猛獣」(AIMバースト)の後ろから何かが飛んでくるのが見える。

「死にたくなかったら動くな。」

その言葉と同時に雨の如く何かがいくつも飛んできて美琴の足を掴んでいる触手に当たり何とか拘束が解かれる。

一旦下がり、飛んで来たものを見ると鉄で作られた矢が地面に何本も刺さっていた。

そして美琴を庇うかのように麻生が前に立つ。

その手には鉄で作られた弓が握られていた。

「あんたが助けてくれたの？」

「そうだ。」

美琴、選手交代だ。

後は俺がやるから後ろで見ている。」

先ほど美琴を襲うとした棘のついている触手が麻生に向かってくるが麻生の手にはいつの間にか何本の矢が握られておりそれを連続で素早く放つ。

だがそれを受けてもすぐに再生して触手が麻生を襲うがそれを後ろに飛んでかわす。

「アレはAIM拡散力場の塊だ。」

普通の生物の常識は通用しない。

体表にいくらダメージを与えても本質には影響しないんだ。

あれを倒すには自立させている核の様なものがあるはずだ、それを破壊すれば倒せるはずだ。」

木山も麻生についてきたのか「幻想猛獣」(AIMバースト)についてアドバイスする。

「ふーん、正攻法じゃあ駄目ってことか。
まああれは人間じゃないし少し本気でも出すか。
お前達もう少し下がってろ。」

「あんた一人に任せておけないわよ。」

「私も同じ意見だ。」

あれを生み出した責任がある、私はどうなっても構わない。」

「そういう事じゃない。」

俺が巻き込むかもしれないから下がってろって意味だ。」

麻生の後ろからまた触手が迫ってきて美琴は電撃で防ごうとしたが
麻生が後ろに掌を向けると触手の動きが止まる。

「お前は人じゃないからな遠慮なく殺させてもらう。」

麻生の右手には刀が握られており振り向くと同時に刀を抜刀し動き
を止めている触手を一刀両断する。

美琴はすぐに再生するから無駄な攻撃だと思ったが何故かその触手
は再生しなかった。

麻生を見ると先ほど持っていた刀ではなく白い剣と黒い剣を両手で
持っていてその両方を「幻想猛獣」（AIMバースト）に投げつけ
る。

二本の剣は回転しながら飛んでいき「幻想猛獣」（AIMバースト）
の身体を斬りながら飛んでいき斬られた箇所も再生する事はなかつ
た。

「どうなっている？」

なぜ復元しないんだ？」

「私に聞いても何も分からないわよ。」

麻生は同じ白黒の剣を創り両手に握る。

すると飛んで行った白黒の剣が弧を描き再び麻生の方に戻ってくる。

麻生が持っている剣の名前は黒い方が陽剣・干将、白い方が陰剣・莫耶。

干将・莫耶

古代中国・呉の刀匠干将と妻の莫耶、及び二人が作った互いに引き合う性質を持つ夫婦剣。

その特性を利用して飛んでいる干将・莫耶を自在に操っているがこの剣に再生を封じる能力は備わっていないその正体は麻生の目だ。麻生の目の色は黒色だがなぜかこの時だけ青い色に変わっていた。この目の名前は直死の魔眼。

直死の魔眼

意味や存在が、その始まりの時から内包している「いつか来る終わり」を視覚情報として捉えることが出来るという能力。

この「死」は生命活動の終焉ではなく「存在の寿命」であるため、殺せる対象は生命体に留まらない。

それにこの眼に見えるのは死の線と死の点であり線をなぞれば本体の生死関係なく行動、治療、再生不能になり点を突けば対象の死期を発現させ殺す事が出来る。

曰く、生きているのなら神様だって殺せる。

麻生は能力を利用して一時的に目を直死の魔眼に変換しているのだ。

直死の魔眼を使い「幻想猛獣」(AIMバースト)の身体を殺して再生を不可能にさせているのだ。

麻生は夫婦の剣を持ち「幻想猛獣」(AIMバースト)に向かって走り出す。

「幻想猛獣」(AIMバースト)は身体から何本の触手を出しそれを麻生に襲いかかせるがその触手の間を移動しながらかわしていきすれ違い様に死の線を確認してそれをなぞるように触手を斬る。

すると触手は麻生に襲いかかるのを止めてまわりを取り囲み触手の檻を作り逃げ場のない空間を作ると内側から一斉に棘が麻生を襲うが突然麻生を守るかのように風が吹き荒れその触手の檻ごとずたずたに切り裂いていく。

しかしいくら直死の魔眼を使って触手を殺してもその大きな身体から新しい触手が何本も出現してきりがない。

「面倒な身体だ。

ならこれならどうだ？」

麻生は「幻想猛獣」(AIMバースト)に向けて掌を向けると突然「幻想猛獣」(AIMバースト)が苦しいような声をあげる。

麻生は能力を使って「幻想猛獣」(AIMバースト)に干渉して触手の出現をキャンセルしているのだ。

麻生の干渉能力は人間相手なら触れなければ駄目だが「幻想猛獣」(AIMバースト)は人間ではなくAIM拡散力場によって生み出された言わば現象や概念といった部類には入る。

干渉能力は人間以外なら触れる必要はない。

ただし神や天使といった存在には干渉することすら不可能。

すると麻生の頭の中で何か映像が入ってくる。

ある一人の男の野球選手がいた。

その男は野球のチームに入り日が昇る時から日が沈むまでひたむき

に練習していた。

それが積み重なりやがて自身に繋がっていた。

だが学園都市ではスポーツに能力の使用が認められており幾錢幾万の努力がたった一つの能力に打ち碎かれる現実、だから男は何が何でも強い能力が欲しかった。

ある女学生がいた。

ある日その女に突然話しかけてきた女がいてどうやら後輩らしくさらに能力も同じだった。

その後輩は能力の扱い方を教えてもらいたくて話しかけたらしい。女はその後輩に親身に扱い方を教えたのだが何日か経つとその後輩の姿を見かける事はなくなったので気になったので後輩の教室まで行くとすでに身体検査システムスキャンを抜かれてしまった。

学園都市は残酷だった、能力を数値化してどっちが優劣かハッキリさせてしまう。

だからもっと強い能力が欲しかった、後輩を見返すほどの能力が。

ある男がいた。

その男は落ちこぼれた無気力な学生を見るとよく話しかける。

男は超能力者（レベル5）になる為カリキュラムに授業をこなし少しずつだが能力が上がっていったのだからある日、本物の超能力者（レベル5）の力を目の当たりにする。

そして自分の目の前にはそこに辿りつく事が出来ない大きな壁がある事によりやく気付いた。

だから男は落ちこぼれの学生を見かけたら話しかける。上を見上げず前を見据えず下を見て話す。

だが憧れは捨てる事が出来ずどうしても超能力者（レベル5）のよきな能力が欲しかった。

他にも様々な映像が麻生の脳にリアルタイムで流れる。

これは「幻想御手」^{レベルアップ}の使用er達の記憶だ。

普通の人がこの膨大な負の感情や記憶を見せられれば手を緩め、ひと時の夢だけでも見せてあげようと思うかもしれない。
だがこの男は違った。

「それがどうした。」

たった一言だけ言い放った。

ブローケン・ファンタズム
「壊れた幻想」

麻生がそう告げると「幻想猛獣」(AIMバースト)のまわりを飛んでいた干将・莫耶が爆発する。

ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想

魔力の詰まった宝具を爆弾として相手にぶつけ破裂させる技能。

土煙が晴れ手に持っていた干将・莫耶の柄を合わせると二つの剣が繋がり弓に変形する。

「自身の能力を上げたいが為にこんなくだらない幻想に頼って、その幻想に飲まれ自身を苦しめてどうする。

自分の事だけを考えそれがどれだけ周りに迷惑がかかったか考えるんだな。」

麻生は左手を虚空に伸ばす。

「骨子、捻じれ狂う。」

その言葉と同時に螺旋を描く刀身を持つ剣が麻生の左手に握られる。そして弓を構え直死の魔眼で「幻想猛獣」(AIMバースト)の死の点を探し狙いを定め魔力を込める。

「さて、良い夢は見れたか？」
わるいゆめ

見れたのなら自分の脳に帰って少しでも能力が上がるよう努力するんだな。

前に進むのを止めてしまったらそこでお前達の物語は終わってしまふのだからな。」

その言葉を拒絶するかのように「幻想猛獣」(AIMバースト)が悲鳴を上げると空中に鋭い岩石が出現して麻生に向かって飛んでくるが風の刃がその岩石を切断する。
そして麻生はその剣の真名を開放する。

「偽・螺旋剣(カラドボルグ?)」

偽・螺旋剣(カラドボルグ?)

アルスター伝説に出てくる名剣カラドボルグ。

しかしこれはある男が独自に改良した物でありその威力は空間をも捻じ切る貫通力を誇る。

矢が放たれ「幻想猛獣」(AIMバースト)の死の点を貫きその貫いた先には三角柱のような物体にぶつかりそれを捻じ切るように貫通してぼろぼろに砕けていった。

核を破壊されたのかそれとも死の点を貫かれたのか「幻想猛獣」(AIMバースト)は消滅していった。

一連の戦いを見て木山はつぶやく。

「あの少年は一体何者なんだ？」

その問いに美琴が答える。

「さあね、自称通りすがりの一般人Aらしいわよ。」

その後、増援の警備員アンチスキルがぞくぞくやってきて木山は抵抗することなく捕まる。

麻生は面倒な事を聞かれる前に立ち去ろうとするが木山が麻生を呼び止める。

「君の能力を使って私の生徒達を治療してくれないか？
もし出来るのなら報酬は何でも用意する。」

木山は麻生の凄まじい能力を目の当たりにしてもしかしたら生徒達を救う事が出来るのでは？と考えたのだ。

本来、自分が助けたいのだが此処までの事をしたのでいつ表舞台に戻れるか分からないからだ。

麻生はめんどくさそうな顔をしていつもの様にため息を吐く。

「病院は？」

「え・・・」

「その生徒達が入院している病院の事だ。」

俺だとその患者のその後まで見てやれんから腕のいい医者任せ
る事にする。」

「その医者は信頼できるのか？」

「一度俺も見て貰ったからな。

あの医者は患者を助ける為なら何でも用意する気前のいい医者だぜ。」

麻生がここまで言わせる人物なのなら信頼できると思った木山は病院の名前を教える。

それを聞いた麻生はさっさと立ち去ろうとする。

「君の言うとおりだ。」

麻生は振り返らず何がだ？と聞き返す。

「この世に絶対なんてない、まさにそれを思い知ったよ。」

木山の言葉を聞いて少しだけ笑みを浮かべるとそのまま立ち去ろうとするが今度は美琴が立ちはだかる。

「あんな力があるのなら前の戦いの時、あれくらいの力を使えば良かったじゃない。」

「あんな力を使えばお前を殺してしまうだろ。」

俺はある女性と約束してな、どんな奴だろうと人は殺すなって言われているんだ。」

今回は人が相手じゃなかったからやり易かったよ、と言い麻生は携帯を取り出しある医者に連絡し木山に教えてもらった病院とその事情を説明する。

医者は二つ返事で了承した事を確認すると電話を切り美琴の横を通りすぎる。

「どこに行くつもり。」

「寮に帰って寝るんだよ。」

白井とかには適当に言い訳でも考えて何とかしてくれ。」

私はあんたのパシリじゃないわよ!!と叫びながら電撃が飛んで来たが空間の壁を作りそれを防ぐと麻生は追いかけると面倒なので珍しく走って寮に戻る。

しかし麻生の戦いはまだ終わっていなかった。

この夜、「幻想猛獣」(AIMバースト)よりも強い敵と戦う事になる。

第12話（後書き）

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第13話

あの魔術師の襲撃があつてから三日がたち上条とインデックスは洗面器を抱えて銭湯に向かつていた。

インデックスは背中に重傷と言えるほどの刀傷があつたが緊急避難に小萌先生の所に転がりこみ小萌先生の協力のおかげでインデックスの傷を何とか治療することが出来た。

小萌先生は上条とインデックスの関係や傷の事などは一切聞かず二人を居候させてくれている。

傷を治した影響かインデックスは三日間は風邪をひいたような状態になったが今ではすっかり治りようやく出歩けるようになったインデックスの願いが風呂だった。

「とうま、とうま。」

上条のシャツの二の腕甘く噛みつつインデックスはややくぐもった声で言う。

インデックスは噛み癖あり（なぜか上条にしかしてこない）服を引っ張ってこっちを向かせるぐらいのジェスチャーらしい。

「何だよ？」

上条は呆れたように答える。

インデックスは上条の名前を知らないと言われ今朝、自己紹介してかれこれ六万回ぐらい名前を呼ばれまくったからだ。

ちなみにインデックスは料理を作ってくれ男の名前も知リたかったようなので上条は麻生の名前を本人の了解なしで教えた。

「何でもない。」

用がないのに名前が呼べるって、なんかおもしろいかも。」

たったそれだけでインデックスはまるで初めて遊園地に来た子供みたいな顔をする。

インデックスの懐き方は尋常ではないのだがその原因は三日前のアレなんだろうと上条は嬉しいと思うより、今まであんな当たり前の言葉すらかけてもらえなかったインデックスの方に複雑な気持ちを抱いてしまう。

三日前、上条はインデックスの頭の中に抱えている物やその事情の全てはインデックスから教えてもらった。

インデックスの頭の中にある一〇万三〇〇〇冊がどれほど危険な物なのかそしてそれがどれだけの力を秘めているのか上条はインデックスに説明してもらってもいまいち実感が湧かなかったがインデックスは好き好んで一〇万三〇〇〇冊の魔道書を頭に叩き込んだわけではない事は分かった。

ただ彼女は少しでも犠牲者を減らすために、ただそれだけの為に生きてきたというのに。

インデックスはごめん、と上条に謝ったがその一言で上条は本当にキレた。

なぜそんな大事な話を黙っていたのか、と上条はインデックスを睨みつけてたったそれだけのことだろ？、とその言葉を聞いてインデックスは両目を見開かれた。

自分の事情などを教えれば必ず嫌われると思っていたインデックスだが上条はただインデックスの役に立ちたかったのだ、たったそれだけの事だった。

そんなこんながあり現在に至る。

インデックスは日本の銭湯について独特の意見を述べる。

「ジャパニーズ・セントリーにはコーヒー牛乳があるって、こもえが言ってた。」

コーヒー牛乳って何？カプチーノみたいなもの？」

「んなエレガントなモン銭湯にはねえ。

けどお前にゃデカイ風呂は衝撃的かもな。

お前んトコってホテルにあるみたいな狭っ苦しいユニットバスがメジャーなんだろう？」

「私、気がついたら日本こっちにいたからね。

向こうの事はちよつと分からないんだよ。」

上条はガキの頃から日本に居たらそりゃあ日本語がぺらぺらに話せる訳だと答えるがインデックスはそうじゃない、と言う。

「私、生まれはロンドンで聖ジョージ大聖堂の中で育ってきたらしいんだよ。

どうも、こっちにきたのは一年ぐらいまえから、らしいんだね。」

らしい？、とその言葉に上条は眉をひそめる。

「うん、一年ぐらい前から、記憶がなくなっちゃってるからね。」

インデックスは笑っていた。

その笑顔が完璧だったからこそ上条はその裏にある焦りや辛さが見て取れた。

くそつたれが、と上条は夜空を見上げて呟く。

インデックスがなぜ上条に懐くのか理由も分かってきた。

何もわからずに世界に放り投げだされて一年、ようやく会えた最初の「知り合い」がたまたま上条だったただけだ。

そんな答えが上条をひどくイライラさせる。

「むむ？とうま、なんか怒ってる？」

「怒ってねーよ。」

「なんか気に障ったなら謝るかも。」

とうま、なにキレてるの？思春期ちゃん？」

「その幼児からだ体型にだきや思春期とか聞かれたくねーよな、ホント。」

「む、何なのかなそれ。」

やっぱり怒っている様に見えるけど。

それともあれなの、とうまは怒っているふりして私を困らせてる？とうまのそういう所嫌いかも。」

「あのお、元から好きでもねーくせにそんな台詞吐くなよな。」

いくら何でもお前にそこまでラブコメいた素敵なイベントなんぞ期待しちゃねーからさ。」

「……………とうま。」

名前を呼ばれたのでとりあえず返事をするがとてつもなく不幸な予感がした。

「だいきらい。」

上条は女の子に頭のとっぺんを丸かじりされるというレアな経験値を手に入れた。

かじり終えた後、インデックスはさっさと一人で銭湯に向かってしままい上条はトボトボと歩いて銭湯に向かっていた。

インデックスは上条を見ると野良猫みたいに走り去ってしまうのだ

がしばらく歩いていると上条を待っていたみたいにインデックスの背中が見える、そして走り去る、これの繰り返しだった。目指す所は一緒だからいつか合流できると思い上条は追いかけるのを止めている。

「英国式シスター、ねえ。」

インデックスを「イギリス教会」に連れて行ったら彼女はそのままロンドンの本部に行ってしまういそれで上条との縁は切れてしまうだろう。

そう考えると何か胸にチクリと刺さるものがある上条だが教会に保護してもらわないとインデックスはいつまでも魔術師に追われ続ける事になる。

そもそもインデックスと上条は住んでいる世界、立っている場所、生きている次元、何もかも違う人間、科学と魔術、この二つは決して混ざり合うことはない。

そう上条が考えている時だった、ある異変に気付いた。

時刻は午後の八時でまだ人が眠る時間でもないのに上条の周りには人一人見かけずまるでひどい田舎の農道でも見ているかのようだった。

「ステイルが人払いの刻印^{ルーン}を刻んでいるだけですよ。」

全く気が付かなかった。

隠れていたわけでもなく上条の一〇メートルくらい先の滑走路の車道の真ん中に女が立っていた。

暗がりで見えなかったとか気づかなかったとか、そんな次元はなく一瞬前までは誰も居なかったのだが瞬きした瞬間にはそこに立っていたのだ。

「この一帯にいる人に「何故かここには近づこうと思わない」とうに集中を逸らしているだけです。」

多くの人は建物の中ですのでご心配なさらず。」

上条は女の姿を見て無意識に右手に全身の血が集まっていき直感的に思ったのだ、コイツはヤバイと。

女はTシャツに片足だけ大胆に切ったジーンズという、まあ普通の範囲の服装ではあったが腰から拳銃のようにぶら下げた長さ二メートル以上もの日本刀が凍る殺意を振り回していた。

「神浄の討魔、ですか・・・良い真名です。」

女は世間話をするかのように気楽に話しかけてくるが上条はその気楽さが恐怖を引き立てていた。

「テメエは・・・」

「神裂火織、と申します。

できれば、もう一つの名は語りたくないのですが。」

「もう一つ?」

「魔法名、ですよ。」

ある程度予想していたとはいえ上条は思わず一步後ろに下がる。

魔法名、ステイルが魔術を使って上条を襲った時に名乗った「殺し名」だ。

「テメエもステイルと同じ魔術結社とかいう連中なんだな。」

インデックス

「禁書目録に聞いたのですね。」

率直に言って魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが。」

「嫌だ、と言ったら？」

目の前の敵に悪寒を覚えながらも上条には退く理由など、どこにもなかったから。

「仕方ありません、名乗ってから彼女を保護するまで。」

ドンと衝撃が地震のように足元を震わせ視界の隅で蒼い闇に覆われてたはずの夜空の向こうが夕焼けのようにオレンジ色に焼けていた。どこか遠く何百メートルも先で巨大な炎が燃え上がっているのだ。

「イン、デックス！！！」

敵は「組織」で上条は炎の魔術師の名前を知っている。

上条は反射的に炎の塊が爆発した方角へ目を向けようとして瞬間、神裂火織の斬撃が襲いかかってきた。

上条と神裂の間は一〇メートルもの距離があり加えて、神裂の持つ刀は二メートル以上の長さがあり、女の細腕では振り回すおろか引き抜く事さえ不可能に見えた筈だったが次の瞬間には巨大なレーザーでも振り回したように上条の頭上スレスレの空気が引き裂かれた。驚愕に凍る上条の斜め右後ろにある風力発電のプロペラがまるでバターでも切り裂くように音もなく斜めに切断される。

「やめてください、私から注意を逸らせば辿る道は絶命のみです。」

すでに神裂の二メートル以上ある刀を鞘に収めていてあまりに速すぎて上条には刀身が空気に触れた所さえ見る事が出来なかった。

「もう一度言います。」

魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが。」

「な、なにを、言ってやがる。」

テメエを相手に降参する理由なんざ……」

「何度でも問います。」

瞬、とほんの一瞬だけ何かのバグみたいに神裂の右手がブレて、消えると轟！という風の唸りと共に恐るべき速度で何かが襲いかかってきた。

アスファルト

地面が、街灯が一定の間隔で並ぶ街路樹が水圧カッターに切断されるように切り裂かれ宙に舞った握り拳ほどもある地面の欠片が上条の右肩に当たり吹き飛ばされて気絶しそうになる。

上条は右肩を押えながら視線だけで辺りを見回すと地面には合計で七本の直線的な刀傷何十メートルに渡って走り去っていた。

「私は魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが。」

右手を刀の柄に触れたまま憎悪も怒りもなく神裂はただ「声」を出した。

あの一瞬で七回もの「居合い斬り」見せその気になれば七回とも上条の身体を両断できるが刀が鞘に収まる音は一度きりだった。

上条はあの七つの太刀筋は何らかの魔術という異能力で生み出された太刀筋だと考える。

「私の七天七刀が織りなす「七閃」の斬撃速度は一瞬と呼ばれる時間^間に七度殺すレベルです。」

上条は右手を強く握りしめる。

あの斬撃は「異能の力」が関わっているのならあの「太刀筋」に触れる事ができれば打ち消す事が出来る筈と上条は思った、だが神裂の言葉がその思考を遮る。

「絵空事を、ステイルからの報告は受けています。

貴方の右手は何故か魔術を無力化する。ディスプレイ

ですがそれは貴方が右手で触れない限り不可能ではありませんか？」

触れる事が出来なければ上条の右手は何の意味も持たない。

単なる速度だけの話ではない、御坂美琴の電撃ビリビリの槍や超電磁砲レールガンと違い神裂の変幻自在の七閃の狙いを先読みする事も出来ない。

「幾らでも問います。」

神裂の右手が静かに七天七刀の柄に触れる。

距離はおおよそ一〇メートル、街路樹などを輪切りにする破壊力のある七閃に何かの物陰に隠れるといった行動は自殺行為にしかない。

この距離なら筋肉が引き千切る勢いで駆ければ四歩で相手の懐へ飛び込める距離。

動け、と上条は先ほどから動かない両足に必死に命令を送る。

「魔法名を名乗る前に、彼女を保護させてもらえませんか？」

地面に張り付いた両足を無理矢理引き剥がすように一歩前に踏み込んだ。

「おおっ・・・あああああああ！！！！！！！」

さらに一步、後ろへ逃げるにも左右に避ける事も何かを盾にする事も出来なければ、残るのは一つ、前へ進んで道を切り拓く他に方法がない。

「何が貴方をそこまで駆り立てるのは分かりませんが。」

神裂は呆れるより哀れみの色が混じるため息を吐きだす。

七閃。

アスファルト

辺りには砕かれた地面や街路樹の細かい破片が砂埃のように漂うよう轟！！という風の唸りと共に砂埃が上条の眼前で八つに切断された。上条は右手で消せると頭で分かっているにもかかわらず回避を選んではまう。

頭を振り回すような勢いで身を屈め、頭上を通り過ぎる七つの太刀筋に心臓が凍える。

避けたのはたまたま運が良かったただだがさらに一步踏み出していく。

七閃がどれだけ得体のしれない攻撃だったとしてもその基本は「居合斬り」で一撃必殺の斬撃を繰り出す古式剣術、逆に言えば刀身が鞘から抜けている間は居合斬りを使えない無防備な「死に体」という事だ。

懷に飛び込めば勝てる、そう思った上条の最後の余裕はチン、と鞘に収めた刀が立てるほんの小さな金属音によって木っ端微塵に撃ち砕かれた。

七閃。

轟！！と上条の目の前でゼロ距離と呼べるほど間近で繰り出される。身体の反射神経がとっさに避けようとする前に七つの太刀筋が上条の目の前に七つの太刀筋が目にも迫る。

「ち、くしょ・・・あああああああ！！！！！！」

叫びと共に右手を太刀筋に向かって右手の拳を突き出す。

ゼロ距離という事もあってか七つの太刀筋はバラけず一つの束ねて上条へと襲いかかるがこれなら立った一度の幻想殺^{イマジネーション}しで七つ全てを吹き飛ばす事も出来る。

だが月明かりに青く光る太刀筋が、上条の拳を作る指の皮膚に優しく触れてそのままめり込んできた。

「なっ!？」

上条はとっさに手を引こうとするが間に合わず、次の瞬間には辺り一面に肉を引き裂く水っぱい音が鳴り響いた。

上条は血まみれの右手を左手で押さえつけ、その場で膝を折って屈んでいた。

「なんて、こった……そもそも魔術師じゃなかったのか、アンタ。」

七閃の正体は異能の力ではなく七本の鋼糸^{ワイヤー}だった。

なによりあの馬鹿長い刀はただの飾りで刀を抜いた瞬間も見える訳がなかった、わずかに鞘の中で刀を動かして、再び戻す。

その仕草で、七本の鋼糸を操る手を隠していたのだ。

「言った筈です、ステイルから話は聞いていた、と。」

これで分かったでしょう、力の量ではなく質が違います。

ジャンケンと同じです、貴方が一〇〇年^{トリック}グーを出し続けた所で、私のパーには一〇〇年経っても勝てません。

それに何か勘違いしているようですが私は何も自分の実力を安い七閃でごまかしている訳ではありません。

七天七刀は飾りではありませんよ、七閃をくぐり抜けた先には真

説の「唯閃」待っています。

何より私はまだ魔法名を名乗ってすらいません。
名乗らせないでください、少年。

私は、もう二度とアレを名乗りたくない。」

神裂は唇を噛んで言う。

それでも上条は拳を握る、血まみれで感覚もない右手を握りしめる。
神裂はステイルと明らかに違う、基本の基本、つまり作り方が全く
違う人間なのだ。

「降参、できるか。」

インデックスを思い出す。

彼女は神裂に背中を斬られても上条を助ける為に降参しなかった。

「何ですか？・・・聞こえなかったのですが。」

「うるせえつつたんだよ、このロボット野郎！！！！！」

血まみれの拳で神裂の顔面を殴り飛ばそうとするが神裂のブーツの
爪先が上条の水月みそおちに突き刺さり顔の横を七天七刀の黒鞘で殴り飛ば
され地面に叩きつけられる。

痛みと呻き声をあげる前に上条は自分の頭を踏み潰そうとするブー
ツの底を見て横に転がって避けようと転がった所で。

「七閃。」

声と同時に七つの斬撃が周りの地面アスファルトを粉々に砕き、四方八方からの
爆発で細かい破片が吹き飛び上条の全身に豪雨のようにぶち当たる。
まるで五、六人にリンチされたような激痛が走り、さらに・・・

「七閃。」

先ほどとは違い七つの鋼糸は上条に向かって襲いかかる。
今の上条に七つの斬撃を避ける事は出来ない。
まずい！！、と思った時だった。

「弦結界、揺り籠。」

その声と同時に迫ってきていた七つの斬撃が何かにぶつかりそのまま神裂の元に戻る。

上条の前には彼を守るかのように糸が張り巡らされていた。
すると上条の後ろから足音が聞こえたので振り返るとそこには左手に糸の束を持った麻生恭介が歩きながらこちらに向かっていた。

第13話（後書き）

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第14話

麻生は帰りながら後悔していた。

あの「幻想猛獣」(AIMバースト)との戦いの後、白井や警備員などに色々事情を聞かれると時間もかかり何よりめんどくさいので麻生は早々に帰る事にした。

だが、あの場所から学生寮に戻るまでかなりの距離がありやっと思慣れた街並みに戻る頃には日も落ちてすっかり夜になっていた。

麻生はこんな事ならめんどくさくても白井達に送ってもらった方が早く着いていた、と後悔しながら道を歩いていると裏路地から突然、人が現れ麻生とぶつかる。

ぶつかった人は麻生より背が低く、何より服装に見覚えがあった。

(確かあの時上条が助けた女・・・インデックスだったな。)

インデックスは麻生の顔を見ると一瞬ほっとした表情になるが裏路地から炎がインデックスと麻生に向かって襲いかかってくる。

インデックスは麻生だけでも助けようと思ったのか自分を盾にするように前に出るがそれよりも早く麻生の手が前に出る。

炎は麻生の掌の直前でその勢いが止まり麻生は何かを唱える。

「炎は御身に返る。」

そう唱えると炎は時間を巻き戻すかのように先ほどと同じ勢いで裏路地の奥へと戻っていく。

炎が戻っても爆発音一つしないので麻生は上手い事退けたのだと考えて次の炎が来るのを待つが一向にやってこない。

するとインデックスは麻生の黒シャツを掴み大きな声で叫んだ。

「お願い、とうまを助けて!!!!!!」

いきなり上条を助けろと言われ麻生は哑然とする。

インデックスも色々事情を説明したいのだが自分も追われているのでそう長く此処にいられない。

インデックスはかすかに覚えている、あの炎の魔術師が自分を回収しに来た時、麻生が助けてくれた事を、インデックスは知っている、上条は何かあれば麻生に助けを求めると彼が言っていて彼が心から信頼している事を。

インデックスは正直な所、麻生も巻き込みたくなかったが今の自分では上条を救うことが出来ない。

麻生は事情も聞かずインデックスの頭に手を置き、目を瞑り再び目を開けると大きくため息を吐いた。

「帰ってきて早々また面倒な事に巻き込まれるとはな。」

すると麻生は後ろを振り向き来た道を戻っていき、少し歩いた所で振り返らずインデックスに聞いた。

「お前、一人で大丈夫か？」

インデックスはその言葉を聞いて思わず笑みを浮かべる。

麻生はこう言っているのだ、「これから上条を助けに行くがお前は一人であの魔術師から逃げ切れるか？」と。

「私は一人でも大丈夫!!!!!!」

だからとうまをお願い。」

それを聞いた麻生はインデックスに返事を返さず上条の元に向かって行き、インデックスも麻生とは別の方角に走って行った。

「なぜ、貴方が此処に。」

人払いの刻印^{ルイン}が刻んであったはずです。」

神裂は七天七刀を構え麻生に問いかける。

「残念だったな、ああいった俺自身に干渉してくる奴は自動補正がかかって俺には通じないんだよ。」

だが探すのに苦勞した、と少し疲れた表情をする。
神裂は麻生の行動を觀察していてこちらから仕掛けなければ麻生は自分から向かつては来ないと判断していた。

（誰かが彼に少年を助けるように頼んだのか？

だが、一体誰が・・・）

そこまで考えてようやく気付く、この一件に絡んでいる人間はごくわずかだからだ。

「お前が考えている通り俺はインデックスに上条を助けてほしいと頼まれたから此処に来たんだ。

そうじゃなかったら自分からは絶対に来ないよ。」

「インデックスは無事なのか!？」

地面に倒れながらも自分ではなく他人を心配する上条を見て麻生はため息を吐く。

「まあ元気ではあったな。」

上条、お前はその弦の結界からは出るなよ。

それは内側からなら簡単に崩れるように仕込んであるからなお前の右手とか関係なく触れるだけで結界が解けてしまう。

できればお前を連れてさっさと帰りたいのだがあの女性は簡単に通してくれなさそうだ。」

カツンとブーツの音がこちらに一步だけ迫ってくる音がして上条は神裂を見る。

さっきの表情とは違い真剣な面持ちでこちらに一步ずつ歩いて来ていて麻生も一步ずつ神裂に向かって一步一步近づいていき、お互いの距離が約八メートルあたりで足が止まる。

「先ほどの七閃を防いだ技、お見事でした。」

「そりゃあどうも。」

「できれば貴方の方からあの少年を説得してもらえませんか？」

「俺もそうしたい所だけどあいつは俺なんかの説得で聞くような男じゃないぞ。」

それはあんたが一番わかっていると思ったんだが。」

「そうですね、でしたら貴方を倒し、少年を倒し彼女を保護するままで。」

そして二人の間に言葉がなくなる。

「七閃。」

轟！！と七つの斬撃が麻生に襲いかかる、先ほどとは違い加減なしの斬撃だったが麻生は手に持っていた弦を口にくわえて引っ張り弦の束を空中に投げ捨てる。

「弦術、魔鏡^{まきよう}。」

麻生が唱えると一本であった弦が七本に増えさらに神裂の七閃と全く同じ軌道と勢いで神裂に襲いかかるが同じ軌道と勢い通しがぶつかればその勢いは相殺される。

鋼糸^{ワイヤー}と弦がぶつかり合いそのまま持ち主の所に戻ると再び神裂は七閃を麻生は魔境と呟き先ほどと同じ様にぶつかり合いそれぞれの糸は持ち主にまた戻る。

神裂はその光景を見て麻生の術を観察していた。

「七閃と全く同じ軌道で同じ威力、相手が使う技をそのまま写し相殺する技ですね。」

「ご名答。」

正確には同系統の技でしか使えないがどうやらあんたとは相性が良さそうだ。」

神裂は七閃は封じられたと考え今度は刀に持ち鞘から刀身を抜く。すると麻生の手にも神裂ほどではないが150センチくらいの長さを誇る日本刀が左手の手の中にあった。

神裂はすうくと少し息を吸って一気に八メートルという距離を詰めて横一文字に斬り払うが麻生はその斬撃を上弾き右手で柄を持ち神裂の首を狙い斬るが弾かれたのに神裂はすぐに自分の手元まで戻し首を狙う一撃を防ぐ。

麻生はそのまま素早い突きを三連、突き出すが神裂はそれを見切り全て避けてカウンターの様に麻生の右側面に七天七刀を振うが麻生

の脇腹に当たる直前、何かにその刀の軌道を遮られる。

（これは糸！？）

神裂が気づいた瞬間、麻生の右足が神裂の顔面に向かってきて神裂は七天七刀の鞘を持っている方の手でその蹴りを何とか防ぎそのまま後ろに下がる。

「先ほどの七閃との打ち合いの時に張り巡らせていた、という訳ですか。」

「ご名答、さすがに分かるか。」

それにしてもあんたは強いな、これじゃあ上条が手も足も出ないはずだ。」

麻生は自分を守っている弦の結界を解く。

同じ手は二度通じない相手だと分かっているから解いたのだ。

下手に結界に頼ってしまいそれが破られた時には麻生は死んでいる事になるのでそれなら初めから解いておき警戒した方がまだましだ。そして今度は神裂と麻生の純粋な刀の打ち合いが始まる。

神裂は二メートルの刀を振り回して攻め続け、麻生はその攻めをいなし、軌道をずらし、カウンターで攻めるといった戦法だ。

上条はその激しい攻防を見続けぎゅ、と感覚のない右手を握りしめると呟いた。

「なんでだよ。」

上条の小さな呟きに麻生と神裂の耳に届かない。

「何でだよ！！！！！」

上条の叫びに二人の動きが止まる。

そのまま上条は震える足で立ち上がり前に進む、揺り籠の結界を内側から破壊するが上条は全く気にしない。

「何であんたはそんな力があるのにインデックスを傷つけるんだよ！！

そんな力があれば誰だって何だって守れるのに、何だって誰だって救えるのに。」

上条は悔しかった。

麻生に助けてもらわなければ今頃インデックスは連れ去られてたかもしれない自分の無力が。

そんなにも強い力を持っているのに女の子一人を追い詰める事にしか使えない事が。

神裂は今、戦いである事を忘れたかのように刀の下げてしまう。

そして神裂は血を吐くような声で言った。

「私だって、好きでこんな事をしている訳ではありません。

けど、こうしないと彼女は生きていけないのです・・・死んで、しまっうんですよ。

私の所属する組織の名前は、あの子と同じ、イギリス教会の中に
ネセサリウス
ある必要悪の教会。

彼女は、私の同僚にして大切な親友なんですよ。」

上条は神裂の言っている言葉の意味が分からなかった、対する麻生はその話を冷静に聞いている。

どうやら訳があると思い一旦、刀を下げている。

「完全記憶能力、という言葉に聞き覚えがありますか？」

その問いに麻生が答える。

「視覚、聴覚で捉えた映像や音などを完璧に覚えそれを忘れることが出来ない、だったな。」

その答えに神裂は頷く。

「その完全記憶能力のおかげで彼女は一〇万三〇〇〇冊の魔道書を記憶する事が出来ました。」

ですがその完全記憶能力が彼女を苦しめているのです。」

「どういう事だ？」

その先の言葉を聞きたくなかったがそれでも聞かなければと上条は疑問を口にする。

「彼女の脳の八五%以上はインデックス禁書目録の一〇万三〇〇〇冊に埋め尽くされてしまっているんですよ。」

残る十五%をкаろうじて動かしている状態でさえ、わたしたち凡人とほぼ変わらんいです。」

そこで麻生は神裂の説明を受けて一つ疑問に思ったが最後まで話を聞く。

「だから、何だよ。
ネセサリウス

必要悪の教会ってインデックスの所属している教会なんだろう。」

だったら何で必要悪の教会がインデックスを追い回しているんだよ、インデックスはお前達を魔術結社の悪い魔術師だって呼んでいるんだよ!!」

神裂は一度言葉を躊躇ったが答えた。

「何も、覚えていないんです。」

私達が同じ必要悪の教会の人間だという事も、自分が追われている本当の理由も覚えていないから、自分の中の知識から判断するしかなかった。

インデックス
禁書目録を追う魔術師は、一〇万三〇〇〇冊を狙う魔術結社の人間だと思ふのが妥当だ、と。」

上条はさっきのインデックスの言葉を思い出す。

インデックスは一年ほど前から記憶を失っているらしい、という話を。

「でもおかしいだろう。」

インデックスには完全記憶能力があるんだろ？ だったら何で忘れたんだ、そもそもアイツは何で記憶を失っちゃってんだ？」

上条の問いは神裂ではなく麻生が言い当てる。

「お前達が記憶を消したのか。」

麻生の答えに神裂は頷くが上条は麻生みたいに冷静にはいられなかった。

「どうして！ アンタはインデックスの仲間なんだろ！！ 大切な仲間なんだろ！！ だったらどうして！？」

「そうしなければインデックスが死んでしまうからですよ。」

上条の呼吸が死んだ。
神裂は肩を震わせながら言った。

「言ったでしょう、彼女の脳の八五％は一〇万三〇〇〇冊の記憶に使われている、と。

ただでさえ、彼女は常人の十五％しか脳を使えません、並みの人間と同じように「記憶」していけば、すぐに脳がパンクしてしまうんですよ。」

「そ、んな・・・だって、おかしい。

お前、だって、残る十五％でも、俺達と同じだって・・・」

「ですが、彼女には完全記憶能力があります。

完全記憶能力は先ほど彼が言ったように見た事、聞いた事を全て記憶して忘れる事が出来ない症状です。

街路樹の葉っぱの数から、ラッシュアワーで溢れる一人一人の顔、空から降ってくる雨粒の一滴一滴まで「忘れる」事の出来ない彼女の頭は、そんなどうでも良いゴミ記憶であつという間に埋め尽くされる、元々、残る十五％しか脳を使えない彼女にとって、それが致命的なんです。

自分で「忘れる」事の出来ない彼女が生きていくには誰かの力を借りて「忘れる」以外に道はないんです。」

「いつまで、だ？・・・アイツの脳がパンクするまで、あとどれくらい保つんだ？」

上条は聞いてしまう、否定ではなく質問してしまった時点で心のどこかが認めてしまっていた。

「記憶の消去はきっかり一年周期に行います。

あと三日が限界です。

早すぎても遅すぎても話になりません、ちょうどその時でなければ記憶の消すことが出来ないんです。

あの子の方も、予兆となる、強烈な頭痛が現れていなければ良いのです。」

神裂は明らかに顔色が悪くなっている上条を見て一瞬悲しい表情になるがすぐに魔術師のインデックスの仲間としての顔に戻る。

「私達に彼女を傷つける意思はありません、むしろ私達でなければ彼女を救う事は出来ない。」

引き渡してくれませんか、私が魔法名を名乗る前に。」

上条は目の前にインデックスの顔が浮かんだような気がして奥歯を噛むように目を閉じる。

「それに記憶を消してしまえば彼女は貴方の事も覚えていませんよ。今の私達を射抜く目を見れば分かるでしょう？ 貴方がどれだけ彼女を想った所で、目覚めた彼女にはあなたの事は「一〇万三〇〇〇冊を追う天敵」にしか映らないはずです。」

神裂の言葉を聞いた上条はわずかな違和感を捉え、その違和感が一瞬で爆発する。

「ふざけんな！ アイツが覚えているか覚えてないかなんて関係あるか！！」

俺はインデックスの仲間なんだ、今でもこれからもアイツの味方であり続けるって決めたんだ！！

それに何か変だと思ったぜ、アイツが「忘れてる」だけなら、全部説明して誤解を解きゃ良いだけの話だろ？ 何で誤解のままにして

んだよ、何で敵として追いましてんだよ！
テメェらなに勝手に見限ってんだよ！！
アイツの気持ちを何だと……」

「うるっせえんだよ、ど素人が！！！」

「「！？」」

上条の言葉に神裂は感情を剥き出しにして叫ぶとそのまま上条に突っ込んでいく。

上条を守っていた弦結界は上条の手で破壊されている、麻生はすぐに弦を口にくわえてもう一度結界を張ろうとしたが神裂の動きが止まり突然麻生の方に振り返ると。

「七閃！！！」

先ほどとは比べ物にならないくらいの七つの斬撃の勢いが麻生に向かってくる。

麻生は神裂は上条を狙っていると思い上条に結界を張ろうとしたので完璧に不意をつかれる。

（まずい、結界が間に合わん。）

何とか刀で七閃を受け止めることが出来たがその威力は凄まじく刀で受け止めているにも関わらずそのまま後ろのビルの壁まで吹き飛んでしまう。

「麻生！！！」

壁にぶつかり砂煙は舞い上がり麻生の安否が分からないでいる、だ

が神裂は容赦なく上条の脇腹を蹴り飛ばされそのまま二、三メートル吹き飛んでしまう。

腹の中から口の外へ、一気に血の味が溢れ、神裂は脚力だけで真上に三メートルも飛びあがりそのまま七天七刀の鞘で上条の腕を潰す。

「私達だって頑張ったよ、頑張ったんですよ！」

春を過ごし夏を過ごし秋を過ごし冬を過ごし！

思い出を作っても忘れないようにたった一つの約束をして日記や写真アルバムを胸に抱かせて！！」

叫びながら電気ミシンの針のように鞘の先端が連続して降り注ぎ、腕、脚、胸に顔に次々と降り注ぐ鈍器が身体のあちこちを潰していく。

「それでもダメだったんですよ。」

日記を見ても、アルバムの写真を眺めても・・・あの子はね、ゴメンなさいって言うんですよ。

それでも、一から思い出を作り直しても、何度繰り返しても、家族も、親友も、恋人も、全てゼロに還る。

私達は・・・もう耐えられません。

これ以上、彼女の笑顔を見続けるなんて、不可能です。」

何度も何度も味わっていく地獄のような在り方。

死ぬほどの不幸と、直後にそれを忘れて再び決められた不幸へ走っていく無残な姿。

だから神裂達は残酷な幸運てあひを与えるよりできうる限り不幸を軽減する方法を選んだ。

初めからインデックスが失うべき「思い出」を持たなければ記憶を失う時のショックも減る、だから親友を捨てて「敵」である事を認めた。

しかし上条は奥歯を噛み締めて言った。

「ふ、ざけんな……」

それに続かのように別の声も聞こえた。

「ああ、本当にふざけるな。」

その瞬間、神裂に向かって衝撃波が地面を抉りながら向かってくる。神裂はそれを後ろに下がる事で避けるが地面を抉った衝撃波はまるで上条を守るかのように境界線を引く。

衝撃波を放たれた所を見ると麻生が神裂を睨みながら歩いていた。

「何が彼女の笑顔を見続けるなんて不可能です、だ。」

お前達は自分の無力さをインデックスの完全記憶能力のせいにしてその無力をインデックスに押し付けているだけだ。

結局はインデックスの事を考えていない、自分の事しか考えていない。」

麻生はそう言いながら神裂に近づき、神裂は麻生が近づくとそれに合わせるように後ろに下がっていく。

「何より辛かったのはインデックスだったはずだ。」

自分達の思い出を見せられそれでも何も覚えてなくて、それを見て悲しむお前達を見てインデックスはもっと辛かった筈だ。」

麻生はあの時、インデックスの記憶の覗いた時に確かに見えた。

インデックスは覚えてなくても神裂達の悲しむ顔を見て辛い思いを感じている事を。

「あなたに・・・あなたに私達の気持ちがかかるっていうのですか
!!!!」

「分からねえよ。」

神裂の悲痛な叫びに麻生は正直に答える。

「分かる訳ないだろう。」

俺はお前達みたいにそんな経験は一度もない。
けど、これだけは言える。

自分達に力が無いからってインデックスのせいにするな。

お前達は敵になる事を選んだわけじゃない、敵になる事でインデ
ックスから逃げたんだ。

そんな小さな友情で親友なんて言葉を口にするな。」

「だまれえ!!!!!!」

神裂は納刀の七天七刀を一気に抜刀して麻生に斬りかかる。
唯閃。

彼女が持つ技の中で間違いなく最強の威力を誇る、抜刀術。

麻生は刀を斜めに傾けそれを前に出し、右手で刀身を支え刀で道を
作り神裂の唯閃を上に乗せ流す。

そして神裂の懐に大きな隙が生まれる。

「ッ!？」

「そんな怒りの剣、見えてんだよ!!!!!!」

そして、両手で刀を持ち右下から左上に斬りつけようとするが神裂
の身体に触れる直前に刀身が砕け散る。

刀が唯閃の威力に耐えられなかったのだ。

だが、二人の勝敗は今ので決まった。

神裂はそのまま後ろに尻餅をついて麻生は折れた刀を一瞬見て、そのまま上条の所に行って肩を担ぐ。

先ほどの神裂に身体を鞘で殴られたのか既に意識は無くなっていた。そのまま小萌先生のアパートまで送る。

「私達は・・・私はどうすればよかったのですか。」

自分に聞いたのか麻生に聞いたのかどちらか分からない、だが麻生は答えた。

「自分でその答えを探せ。

俺からもらった答えを聞いた所で何の意味もないからな。」

麻生は振り返らずに神裂に言い、刻印^{ルーン}の結界から出るのだった。

第14話（後書き）

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第15話

上条を肩で担ぎながら小萌先生の家に目指すがある事に気づく。

（そういえば、先生の家ってどこだ？）

歩いていた足が止まり考えるが此处、第七学区でも結構な広さがある。その中で小萌先生の家を特定するなど非常に時間がかかる。

イマジンプレイカー

上条の記憶を覗こうにも幻想殺しが邪魔をして記憶を覗けない、麻生は携帯を開け電話帳を見るとそこにある人物の名前が載っていた。
黄泉川愛穂。

彼女は小萌先生と同じ学校の教師なのでもしかしたら住所を知っているかもしれないと麻生は考え電話をかける。

「お前から電話をかけてくるなんて珍しいじゃん。」

ワンコールで出たので暇を持て余しているのだな、と麻生は思う。
しかも心なしか楽しそうな声で出たので何かいい事があったのか、と考えるが今はその事を聞いている場合ではないと思い用件だけ話す。

「愛穂、小萌先生の家の住所を知っているか？」

「・・・知っているけど知ってどうするの？」

さっきまで楽しそうな声だったのに一気に不機嫌そうな声で答えるので麻生は本当に何があったんだ、と真剣に考える。

「いや、少しあの先生に届け物があったな。」

「それって授業の提出物とか何か？」

全然違うが事情を説明してもややこしくなりそうなので適当に答える。

「そうだ、いざ渡そうとしても住所が知らなくて困っているんだ。」

「なら全然オッケーじゃん。」

さっきまでの不機嫌な雰囲気はどこにいったのか、住所を教えて貰い麻生は通話をきる、きり際に愛穂は何か言っていたが今は長話している暇はないのですぐにきる。

愛穂に教えて貰った住所を携帯のGPSを使い場所を特定してそこに向かうとそこには超ボロい木造二階建てのアパートで通路に洗濯機に置いてあり見た限り風呂場はないようだ。

本当に此処に住んでいるのかと麻生は疑ったが二階の一室のドアが開くとそこから小萌先生がちょうど出てきた。

「あれ、麻生ちゃん？ どうして先生の所について、上条ちゃんどうしたんですか！？」

肩に担いでいた上条を見て慌ててこちらに走ってくる。

麻生は詳しい事は話さなかったが傷の具合を説明すると小萌先生に預けてこの場から去ろうとする。

「麻生ちゃんはどこに行くのですか？」

「用が済んだから寮に帰るんですよ。」

此処まで運んできたのはアフターサービスだが。」

そう言って麻生は去っていきある程度歩いて周りに誰も居ない事を確認すると自分の右腕を確認する。

麻生の右手は青く腫れ上がっていた。

あの時、神裂の唯閃を受け止めた時その衝撃を直に伝わったからである。

（さすがに身体強化なしで厳しかったな。）

そう思いながら能力を発動して全身の怪我や痛みを治していく。

麻生の能力である「星^{テラ}」は一日30分しか発動できない。

麻生は能力がきれたり使えなくなったりした時の事を考え、戦闘経験や武術経験など戦闘に役立ちそうな経験を身体に刻み込む事で身体能力を上げている。

しかし、身体強化や自身の眼を変換させるといった能力の使用は身体に刻み込んで常時発動する訳ではなく一時的に発動しているだけに過ぎない。

これが発動している間は能力使用時間は無くなっていく、なら常時発動するようにして時間を節約すればいいと思うがそういう訳にはいかないのだ。

まず、麻生の身体能力はこれ以上上げることが出来ない、上げるとなると星のバックアップがどうしても必要なのだがもし身体強化を常時発動状態にすれば麻生の身体はその強化の負担に耐えられなくなり動くおろか死んでしまう事もあるのだ。

ゆえに星のバックアップなしでは発動することが出来ない、能力使用時間がきればその瞬間、麻生は死んでしまうと同じ事なのだ。魔眼などは日常生活に支障が出る可能性があるので常時発動型にしない。

あの時の神裂は怒りで刀の軌道など先読みすることができ唯閃に至っては本来の力は出ていなかったなので身体強化なしで何とか迎撃す

ることが出来た。

もし神裂が冷静な状態なら強化なしで勝つ事など不可能なのだ。

それから三日後。

三日経っても上条から何も連絡はなく自分の力で解決したのか、と思ったが自分でその考えを否定する。

（あの神裂の話を上条はほとんど信じているようだった。
だったらあの疑問点に気づいていないだろう。）

神裂は三日後にインデックスの記憶を消すと言った。

もし上条がそれを否定しても神裂とステイルと協力して力づくでもインデックスを回収して記憶を消すだろう。

あの時神裂は麻生に答えを聞いたが麻生は答えなかった、なら今の神裂に残されている道はインデックスの敵になり続けること。

麻生は三日前から散歩に出る事はなくただ時計をずっと見ていた。
もうすぐ夜の十二時になる。

まるで上条からの連絡を待っているかのようだった。

上条は朝に一度目が覚めてその時、ステイルと神裂は小萌先生の家
にやってきた。

その時は襲撃に来たのではなく様子を見に来たらしいがすぐに立ち
去って行った。

そして、再び眠ってしまい気づけば夜になっていた。

神裂から電話がかかり最後の警告を言いに来たが上条は最後まで足掻いてみせるとお前達を潰してみせると言った、そして何か方法はないか考えていて小萌先生に電話して脳について聞こうとした時、小萌先生の言葉を聞いて上条は凍りつく。

「だって、もう夜の十二時ですよ？」

えっ？と上条が聞き返してギチギチとインデックスの方に向くとインデックスは投げ出された手足はピクリとも動かないでいた。そのまま受話器を取り落としてしまいいカンカンとアパートの通路を歩く足音が聞こえた。

最後に神裂が電話で言った言葉を思い出す。

「それでは魔術師^{われわれ}は今晚零時に舞い降ります。

残り時間はわずかですが、最後に素敵な悪あがきを。」

上条がその言葉を思い出した瞬間、アパートのドアが勢い良く外から蹴破られた。

そこには二人の魔術師が立っていた。

土足のままステイルは部屋に入ると呆然と立ち尽くしている上条を片手で突き飛ばし、ぐったりと手足を投げ出したまま動かないインデックスの側にしゃがみ込んで、何かを口の中で呟いている。

「神裂、手伝え。

この子の記憶を殺し尽くすぞ。」

その言葉に上条の胸の一番脆い部分に刺さったような気がした。

あの時上条は神裂にこう言った。

本当にインデックスの為だけを想って行動するなら、記憶を殺す事をためらうな、と、何度記憶を失おうが、そのたびにもっと幸せな、

もっと面白い思い出を与えてあげれば、彼女だって記憶をなくし「次の一年」を迎える事を楽しみにする事だって出来る筈だ、と。だけど、それはもう他に方法がないと諦めきった後の妥協案のはずじゃなかったのか？

上条は知らず知らずの内に爪が砕けるほど拳を強く握り締めていた。そして顔を上げて魔術師たちに言った。

「待てよ、待ってくれ！もう少しなんだ、あと少しで分かるんだ！

この学園都市には二三〇万もの能力者がいる、それらを統べる研究機関だって一〇〇〇以上ある。

サイコメトリー マリオネット テレキネシス マテリアライズ
「読心能力、洗脳能力、念話能力に思念使い！「心を操る能力者」

も「心の開発をする研究所」もゴロゴロ転がっているんだ、そういう所に頼っていけば、もう最悪の魔術こんなほうほうなんかに頼らなくても済むかもしれないんだよ！」

「・・・・・・・・」

「お前達だってこんな方法取りたかねーんだろ？心の底の底じゃ他の方法はありませんかってお祈りしてんだろ！だったら少し待ってくれ、俺が必ず誰もが笑って誰もが幸福な結末を探し出してみせるから！だから・・・・・・・・！？」

「・・・・・・・・」

ステイル・マズヌスは一言も告げない。

上条もどうして自分がそこまでするか分からないがああ笑顔が、あの仕草が、もう二度と自分に向けられる事がないと、この一週間の思い出が他人の手によってリセットボタンを押すように軽々と真っ白に消されてしまうといちばん優しい部分が、痛みを発した。そして沈黙が支配する。

上条は恐る恐る魔術師の顔を見る。

「言いたい事はそれだけか。出来損ないの独善者が。」

そうして、ルーンの魔術師、ステイルⅡマグヌスが放った言葉はそれだけだった。

「見ろ。」

ステイルは何かを指さしたが上条がそちらへ視線を移す前に、ステイルは勢い良く上条の髪の毛を掴んだ。

「見ろ！！君はこの子前で同じ台詞が言えるのか？」

こんな死人の一秒前みたいな人間に！激痛でもう目が開ける事もできない病人に！ちよつと試したい事があるからそのまま待ってろなんて言えるのか！！」

インデックスの指がもぞもぞと動いていた。

動かない手を必死に動かし上条の顔に触れようとしている。

まるで魔術師に髪を掴まれた上条の事を、必死に守ろうとしている。

「だったら君はもう人間じゃない！今のこの子を前に、試した事もない薬を打って顔も名前も分からない医者どもにこの子の身体を好き勝手にいじらせ、薬漬けにする事を良しとするなんて、そんなものは人間の考えじゃない！！」

答えろ、能力者。

君はまだ人間か、それとも人間を捨てたバケモノなのか！？」

上条は答えられない。

ステイルはポケットの中からほんの小さな十字架のついたネックレス

スを取り出した。

「これはあの子の記憶を殺すのに必要な道具だ。

推察通り、「魔術」の一品だよ。

君の右手で触れれば、僕の「魔女狩りの王」^{イノケンティウス}と同様、触れるだけで力を失うはずだ。

だが、消せるか、能力者？

この子の前で、これだけ苦しんでいる女の子の前で、取り上げることが出来るのか！

そんなに自分の力を信じているのなら消してみろ、能力者^{ヒーロー}気取りの異常者が！」

上条は、見る。

インデックスの言う通り、これさえ奪ってしまえばインデックスの記憶の消去を止められる。

上条は震える右手を岩のように硬く握りしめて、けれど、できなかった。

この魔術は「とりあえず」安全かつ確実にインデックスを救う事ができる唯一の方法だ。

これだけ苦しんでいて、これだけ我慢を続けてきた女の子の前で、それを取り上げるだなんて、できるはずがなかった。

上条は本棚に背中を預けて呆然という。

「これだけの右手を持っていて、神様の奇跡^{システム}でも殺せるくせに、どうして、たった一人の……苦しんでいる女の子を助ける事もできねーのかな。」

笑っていた、ただ己の無力さを噛み締めて。

「儀式を行うのに午前零時十五分まで、一〇分ほど時間が余ってい

ますね。」

突然、神裂が言い出すとステイルは信じられないものでも見るかのように、ステイルは神裂を睨みつける。

「私達が初めてあの子の記憶を消すと誓った夜は、一晩中あの子の側で泣きじゃくっていました。」

そうでしょう、ステイル？」

「だ、だが、今のコイツは何をするか分からないんだ。
僕達が目を離れた隙に心中でも図られたらどうする？」

「それならさっさと十字架を触れていると思いませんか？
彼がまだ「人間」だと確信していたからこそ、貴方も偽物ではな
く本物の十字架を使って試したのでしょう？」

「しかし……」

「どの道、時が満ちるまで儀式は行えません。
ここで彼の未練を残しておけば、儀式の途中で妨害に入る危険性
が残りますよ、ステイル。」

ステイルは奥歯を噛みしめて獣のように上条の喉を食い破ろうとする
己を抑えつけて。

「一〇分間だ、良いな!？」

きびすを返してアパートを出て、神裂も何も言わずにステイルに続
いて部屋を出たがその目はとても辛そうに笑っていた。
インデックスが命を削って作った一〇分間を一体どうすればいいか

上条は全く分からなかった。

「けどさ、こんな最悪な終わり方って、ないよな。」

上条は何もできない自分がひどく悔しかった。

インデックスの脳の八五%を占める一〇万三〇〇〇冊の知識をどうにかする事も、残る十五%の「思い出」も守り抜く事だって。

「……あれ？」

そこまで絶望的な考えを巡らされていた上条はある違和感を感じ取った。

その違和感は疑問に変わると上条は部屋の隅にある黒電話に飛びつくところある電話番号にかける。

小萌先生の携帯ではなく麻生の携帯電話に。

十二時五分になった。

本人は気づいていないようだが麻生は少し残念そうな顔をしていた。上条があんな幻想に負けた事が残念だと思っているのかどうかはそれは本人でも分からない。

（何を俺は期待していたんだ。

元々、これは全くの他人が引き起こした騒動だ。

俺がわざわざ関わる必要もない。）

そう思いひと眠りでもしようとした時、麻生の携帯が部屋中に鳴り響く。

画面には知らない電話番号が表示されていたが麻生は通話ボタンを押す。

「麻生！！」

「誰かと思えばお前か。」

「麻生、インデックスの完全記憶能力の事について聞きたい事がある。」

麻生は上条がインデックスの記憶の矛盾点に気づいたのだと考える。

「どうやらお前も気づいたみたいだな。」

「お前もって、麻生はもう気づいていたのか！？」

「ああ、きっちり八五％って数字が出るのは少しおかしいと思った。あいつらは科学の力を使ってその数字を出しわけでもない筈だ、何よりもし一〇万三〇〇〇冊の魔道書が脳の85％を使われていたらインデックスは既に死んでいる。」

「何でそんな大事な事をあの時に話さなかったんだよ！！」

上条の問いかけに少しの間沈黙するが麻生は答える。

「彼女はお前が救わないといけない人間だ。」

「え・・・」

「確かにあの時に記憶の事を話せば今頃全て丸く治まっていただろ

う。

けどな、それは俺の力で解決しただけであってお前の力じゃない、お前はインデックスを守ると決めたんだろう？なら、お前が救え。」

「ああ、インデックスは俺が守る。」

「とりあえず、記憶について簡単に説明してやろう。」

人間の脳の中は色々記憶する為にいくつかの引き出しがあるんだ。言葉や知識を司る「意味記憶」、運動の慣れなどを司る「手続記憶」、思い出を司る「エピソード記憶」、といった感じに色々役割が決められている。

インデックスが覚えた一〇万三〇〇〇冊はこの「意味記憶」に記憶されているはずだ。

どんなに知識など覚えても「エピソード記憶」を圧迫する事はない、そもそも人間は一四〇年分を記憶する事が可能だ。」

「それじゃああいつらは……」

「教会側から騙されていたんだろう。」

インデックスに首輪をつける事である二人は反逆の可能性を潰していたんだ。」

上条の息が詰まるのが電話越しの麻生まで伝わるが、上条は次の瞬間には少しだけだが笑っていた。

先ほどまで絶望だった状況にようやく希望の光が見えてきたのだ。

「さて、俺の説明はここまでだ。」

インデックスは何かしらの魔術で脳を圧迫されているはずだ、その魔術の発信源をお前の右手で潰せ。」

「分かった。」

麻生、本当に助かった。」

「礼を言うならインデックスを助けてからにしてくれ。」

さて、見させてもらうか、幻想を殺す事しかできないお前の右手が一人を救くえるのかどうか。

まあ、何かあったらフォローくらいしてやるよ。」

そう言って麻生は通話をきくと服を着替えて小萌のアパートに向かう。

本人は気づいていないだろうがその口元は少しだけ笑みを浮かべていた。

なぜ、笑みを浮かべていたのかその理由は誰にも分からない。

「行け、能力者!!」

上条に向かってインデックスの「ドラゴン・プレス竜王の吐息」をスタイルの「イノケ魔女狩りの王」が上条を守るように両手を広げて真正面から盾になる。インデックスの脳を圧迫している魔術はインデックスの口の中にある。

それを上条の右手が触れるとインデックスの両目は真紅の魔方陣が浮かび、上条当麻を侵入者だと決め破壊するとインデックスは言った。

その騒ぎにスタイルと神裂がやってきてインデックスが魔術を使っている事に驚いていたが上条は騙されていた事などを説明するとスタイルと神裂はインデックスを救えるのならと協力してくれている。

ドラゴン・プレス

イノケンティウス

「竜王の吐息」をスタイルの「魔女狩りの王」が防いでいる内に一気に近づきインデックスを救う、そう考えた時だった。

「ダメです!!! 上!!!」

神裂の叫びに上条は足を止めず上を見上げるとそこには何枚もの光の羽がゆっくりと舞い降りていた。

上条は魔術の事は何も知らないがあれに触れてしまえば大変なことになることぐらい分かった。

インデックスはもうすぐ手を伸ばせば顔の前にある魔方陣に触れる、だがあの光の羽は危険だ。

上条の右手ならあの光の羽を破壊することが出来るがそれでは時間がかかりすぎる、その間にインデックスは「魔女狩りの王」の対策魔術を施したのかみるみる「魔女狩りの王」の再生速度が落ちていく。

このまま時間をかければインデックスの体制が立て直される恐れがあり、さらに「魔女狩りの王」がそれまで保たない。

だが、そんな事上条からすれば答えは決まっていた。

この右手は自分を守る為に振っているのではない、たった一人の女の子を助ける為に魔術師と戦っていたんだから。

せかい

アంత

システム

（この物語が神様の奇跡の通りに動いてるってんなら、まずはその幻想をぶち殺す!!!）

上条は右手を振り下ろしその先にある亀裂を生み出す魔方陣に触れようとした、だがその右手よりも早く上条の頭に一枚の光の羽が舞い降りた。

金槌で頭を殴られたように全身の指先一本に至るまでたった一撃で全ての力を失った。

(ちくしょう・・・おれは・・・だれもすく・・・え・・・)

そして上条は床に倒れかけ同時に「イノケンティウス魔女狩りの王」の盾が破壊され
ドラゴン・プレス「竜王の吐息」が上条に襲いかかる。

「能力者!!!」

ステイルがそう叫んだ時だった。

「いや、お前はこの子を救ったよ。」

ステイルと神裂の間から何かが上条の正確には「ドラゴン・プレス竜王の吐息」に向
かって何かが飛んでいきそれがぶつかる。
それは何の変哲もない十字架だった。

「十字架を元に集まれ四大の元素よ。
汝ならはあらゆる物から守る盾となれ。」

ステイルと神裂は聞き覚えのある声が後ろから聞こえたと思い後ろ
を振り向くと麻生恭介が立っていた。
十字架の先端には赤、青、緑、茶色の魔力の塊が集まるとそれを基
点に魔方阵が描かれ「ドラゴン・プレス竜王の吐息」を防いでいる。
そして麻生は二人の間を抜けて上条の側に行く。

「お前はこの子を救ったよ、お前が俺に電話しなければ此処には来
なかった。」

出来れば当麻の手で助けてほしかったが、後処理くらい俺がやつ
てやるよ。」

既に眠るように気絶している上条に言い聞かせる。

「『書庫』内の一〇万三〇〇〇冊により、障壁の魔術の術式を逆算・
・・失敗。

それに一番近い魔術を検索・・・成功。

障壁に対して最も有効な魔術の組み込みが完了しました。

これより、新たに現れた侵入者を破壊します。」

先ほどまで防いでいた障壁が突然亀裂が走る。

麻生は右手を障壁に向け亀裂を復元していくがそれよりも早く亀裂が走っていく。

「君はどうして此処に・・・」

「当麻がこの子を救えるかどうか興味があつたから来てみたがこんな事になっているとはな。

さて、魔術師。」

ドラゴン・プレス

「竜王の吐息」の勢いが右手まで来ているのか麻生の右手がどんどん傷ついていくがそれを気にせず二人に話しかける。

「俺は上条のフォローするつもりだったんだが具体的に何をすればいいか分からない。

インデックスを殺せばいいのか？それともこのまま放置すればいいのか？

俺はどうすればいいか分からない、だからお前達が決める。

彼女をどうして欲しいんだ？お前達の思いを言葉にしてみろ。」

麻生の問いかけにステイルと神裂は一瞬黙り込むが声を出したのは神裂だった。

「彼女・・・助けてください。」

その言葉にスタイルも続く。

「もし君が彼女を救えるのなら頼む。

もう僕では彼女を救う事が出来ない・・・だから・・・」

「お前は一つ勘違いしている。」

予想外の麻生の返事に二人は哑然とする。

「インデックスは上条と出会った時から既に救われているんだよ。」

その言葉と同時に障壁が破壊され「ドラゴン・プレス竜王の吐息」が麻生に襲いかかる。

だが、麻生は「ドラゴン・プレス竜王の吐息」の周りの空間に干渉して壁ではなく歪める事で「ドラゴン・プレス竜王の吐息」の軌道を斜め上に逸らす。

「ドラゴン・プレス竜王の吐息」ほどの魔術となると常に麻生が空間の歪みに干渉して復元し続けなければならないが麻生にはインデックスがどう対応するか分かっていた。

「警告、「セント聖ジョージの聖域」の軌道の修正・・・失敗。

これより術式を変え、新たな迎撃魔術を組み上げます。」

すると「ドラゴン・プレス竜王の吐息」は消滅する。

麻生はあのインデックスはあらゆる事に完璧に対処してくると思え、もし修正不可能だったらすぐに新しい魔術を組み上げると考えた。

もしあのまま「ドラゴン・プレス竜王の吐息」を続けられていたら麻生は常に空間の歪みの復元をしなければならなかったのでそのまま能力使用時間が

終わり麻生の敗北は確定していた。

だが、「ドラゴン・プレス竜王の吐息」を何とか退けたがこのまま時間をかけるのはまずいと麻生は思う。

（あいつの魔道書の中には星について書かれた魔道書があるかもしれない。

そう考えると俺の能力が星の力だと分かれば俺は負ける」

だから麻生は新しい術式を組み上げる前に勝負をつけると考えインデックスに近づくが一步踏み出した瞬間、麻生の足元に魔方阵が突然現れる。

（これは重力を操り俺の動きを制限させる魔術か・・・だが。）

その魔術は麻生自身に干渉してくると同じ事。

その拘束を無力化にして前に進むが既にインデックスは迎撃魔術を組み上げている。

インデックスの周りに光の球体は何個も浮かんでいた。

麻生は足を止めて赤い槍を具現化させ身体を強化させる。

槍の名前は破魔の紅薔薇。ゲイ・ジャルグ

この槍で触れた時、あらゆる魔力的効果を打ち消す槍である。

そして光の球体が次々と麻生に向かって放たれるが麻生は破魔の紅薔薇を巧みに動かしその球体を次々と打ち消していく。ゲイ・ジャルグ

そして一瞬の隙について麻生は何かをインデックスに向かって投げる。

それは宝石だった。

フラッシュ
「光れ」

それに応えるかのように宝石は輝きインデックスの視覚を一時的に

封じる。

「警告、視覚に影響、これより術式を組み換え索敵魔術と聖域の防壁を展開。」

インデックスは周囲に索敵魔術を広げ敵の居場所を確認するが確認できたのは三人だけだった。

そして防壁を破壊されると同時にインデックスに何かが刺さる。

「警、こく……」「首輪」致命的な、破壊……再生、不可……消……」

そしてインデックスの全ての声が消える。

ステイルと神裂は先ほどの光で目を奪われていたがそれが治ると麻生の手には先ほどの槍と刀身がギザギザに曲がっている短剣を持っている。足元にはインデックスが気絶していた。

麻生が持っていた短剣は破戒すべき全ての符。ルールブレイカー

あらゆる魔術による生成物を初期化する短剣である。

索敵魔術に反応したのはステイルと神裂と上条だけだった。

麻生は自分に結界を張る事で自分の存在を周囲にとけこませることで索敵結界を潜り抜け聖域は破魔の紅薔薇で破壊して最後に破戒すべき全ての符で首輪を破壊したのだ。ルブレイカー

ステイルと神裂はインデックスに駆け寄りインデックスが無事である事を確認するとホッと胸を撫で下ろし麻生はある医者に電話をして救急車を呼ぶのだった。

朝になり麻生は右手にリンゴを一つだけ持ちながら病院の中にいた。そしてある病室に向かって歩いてみると聞き覚えのある絶叫が聞こえその病室からインデックスが傍から見ても分かるくらい怒った足取りで出ていく。

インデックスと入れ替わるように麻生は病室に入るとそこにはカエル顔の医者と上条がいて、上条は一瞬驚くがすぐに表情を変え話しかける。

「よ、よう、・・・えっと。」

「無理に馴れ馴れしく話さなくてもいい。どうせ、何も覚えていないだろう。」

上条は自分が記憶消失である事をなぜこの男が知っているのか分からず驚いている。

上条はあの光の羽を頭に直撃したせいで脳細胞が破壊され記憶を失ってしまったのだ。

麻生はその先生に教えて貰ったと話す。

「そうだったのか。」

それで名前は？俺とどういった関係？」

「名前は麻生恭介、高校もクラスも一緒に学生寮も隣の部屋だ。ただそれだけの関係だ。」

麻生はリンゴの皮をナイフ（どこから出てきたのか上条には分からない）で剥きながら答える。

「それじゃあ俺と友達なのか。」

その言葉を聞いてピタッと麻生の手の動きが止まる。

「なぜそんな答えに辿りつく。」

「だってクラスも一緒に部屋も隣なんだろう？」

それでわざわざ見舞いに来てくれるって事は友達じゃあないのか？」

「これはお前が記憶を本当に失っているのか確かに来ただけでリングはそのついでだ。」

お前の為じゃない、自分の為に来ただけだ。」

麻生の答えを聞いて上条は少しだけ考えて言った。

「お前ってもしかしてツンデレなのか？」

それを言った瞬間、麻生はものすごい目つきをして上条を睨む。

そして、中途半端に皮を剥いたリングを上条の口の中に強引に押し込みそのまま病室を出ていく。

上条は思った、こいつは一生デレる事はないツンデレだと。

麻生は来るんじゃないかと後悔しながら病院出る。

すると前にはステイルと神裂が立っていたが麻生は特に声をかける事無く二人の間を通り抜けていく。

「君はいったい何者なんだい？」

ステイルが振り返って改めて麻生に聞く。

麻生は振り返り少しだけ笑みを浮かべて言った。

「何てことない通りすがりの一般人Aだ。」

第15話（後書き）

今回麻生君はいらなくね？と思いましたが出さないとすごく短くなつたので無理に出しました。結果めっちゃくちゃ長くなつたけど・・・

原作と比べて上条は弱いですが、そうしないと麻生君の活躍の場が・・・

主人公の性格と戦闘を更新しました。

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第16話

麻生恭介は今まで普通の生活をしていた。

能力はとてつもない能力で過去に凄まじい物を見せられたこと以外は至って普通の学生である、高校に入学する前は面倒事など一度も出会わなかったのだが……

「……………」

麻生の目の前に人が倒れている、正確には散歩をしていた時、相手の方からぶつかりその衝撃が原因なのかふらふらと崩れ落ちてしまった。

これが普通の人なら麻生も手を差し伸べたかもしれないが倒れている人の服装が巫女服なのだ。

性別は女性で髪は腰のあたりまで伸びていてサラサラとした黒色だ。麻生はこの女性からとてつもなく面倒な匂いを感じ取ったので一秒でも早く此処から逃げ出したかったが周りの視線がそれを許さなかった。

傍から見たら麻生がぶつかったせいで女性は倒れたと勘違いされているようだ、本当は全く逆なのだが。

とりあえず、麻生は女性に意識があるか聞いてみる。

「おい、大丈夫か？」

声をかけるとうう、と返事ではないが声は聞こえたのでとりあえず生きてはいるようだ。

すると顔を麻生の方に向けて一言発した。

「お腹減った。」

「・・・・・・・・」

麻生は逃げ出したいと心の底から思うのだった。

何でもこの女性は腹が減っていてその時運悪く麻生とぶつかりそれが駄目だしになり動けなくなったらしい。

麻生はこの女性を置いてどこかへ行きたかったがそうすることも出来ず結局近くの近くのファーストフード店に入る事にした。

麻生は無能力者なので学園都市からは最低限生活するくらいのお金しか振り込まれないが麻生の親から仕送りが贈られてくるので普通の学生よりお金は持っている。

それに麻生はそのお金はほとんど使わないのでお金が有り余っている。

「何でも。頼んでいい？」

「一応、奢られる立場だって事を考えろよ。」

麻生がそう注意したのに一番高いセットを頼む。

麻生は以前の自分なら周りの視線とか全く気にしなかったのにと自分でもよく分からない変化に少し戸惑っている。

この暑さなのか店内は客がとても多く見た限り席は空いてなさそうに見えたが一つだけ空いていたので麻生と女性が向かい合わせになるように座る。

女性はいただきます、と言ってトレイにあるバーガーを食べ麻生は窓の外を眺めている。

「貴方も食べないの？」

「そんな見るからに栄養が偏っている食べ物には食わない。」

「その栄養が偏っている食べ物を私は食べている。
食欲が無くなったから別の物頼む。」

どうやらこの女性はまだ食い足りないのか女性は右手を差し出しお金を要求してくる。

麻生は財布からお金を渡すとそのまま女性はレジに向かって歩いていく。

麻生は今の内にどこかに逃げようかと考えた時だった。

「あれ、恭介じゃねえか。」

後ろから声がしたので振り返ると上条とインデックスと青髪ピアスの三人が立っていた。

インデックスが持っているトレイの上にシェイクを三つ乗せているのを見て席が空いてないので座れないのだろうと麻生は考える。

「相席空いているみたいだし、座ってもいいか？」

上条がインデックスの顔を窺いながら聞いてきて目で座らせてくれと訴えてくる。

麻生は上条達が座ればあの女性が座れなくなると考えたがある一つの名案が浮かぶ。

「ちょうどよかった、俺はこれから此处を出ようとしてたから席を譲ってやるよ。」

それを聞くと本当に心から安堵した上条の表情を見て記憶を失ってもインデックスに振り回されるのは変わらないんだなと思ひ席を立ち去り際に上条にしか聞こえない声で言った。

「後は頼んだぞ。」

上条はへ？と聞き返したがその質問に答える前に麻生は素早く店を出て行った。

麻生の言葉の意味がよく分からずそのまま席に座ると三人が座っていた席に一人の巫女服の女性が近づいてきた。

麻生は店を出てからすぐに学生寮に戻った。

これ以上散歩をしていたらまた面倒な事に巻き込まれると直感したからだ。

麻生は今度は近場ではなくもっと遠い所を散歩しようと考えていた時、部屋のインターホンが鳴り響く。

不幸はどこにいてもやってくるのか、と半分諦めつつドアに近づき開ける。

ドアを開けると長い髪をポニーテールに括り、Tシャツに片方の裾を根元までぶった切ったジーンズ、腰のウエスタンベルトには七天七刀という格好をしているよく見覚えのある人物が立っていた。

「貴方に頼み事があって参りました。」

神裂火織は一言そう告げた。

神裂を部屋に入れる。

麻生はベットに腰掛け、神裂は床に正座して座る。

「それで前までは敵として戦っていた俺にどんな頼み事を？」

「貴方はもう敵ではありません。」

貴方は彼女、インデックスを救ってくれた恩人です。」

「救ったのは俺じゃなくて当麻だけだな。」

もちろん少年にも感謝しています、と付け加えて言う。
話が進まないので一気に本題を聞く。

「それで俺にどんな頼み事を？」

「貴方は三沢塾と言う名に聞き覚えはありませんか？」

「確かシェア一位を誇る進学予備校だったな。」

それがどうかしたのか？」

学園都市で言う「進学予備校」の定義というのはそれに一工夫加えたもので、本当は大学に受かるだけの实力があるのに、さらに上の大学へ進むためにわざと浪人して一年間受験勉強しよう、という人間の為に作られた予備校だったりする、さらにこの三沢塾は普通の高校生も通う「現役予備校」の二つの顔を持つらしい。

神裂は封筒を取り出し中身を見せてくる。

その中に写真と三沢塾について書かれた資料が入っていた。

その写真に写っていたのはあの巫女服を着た女性だった。

「その三沢塾に写真の女性が監禁されています。」

貴方への頼み事はその女性を助け出す事をお願いに参りました。」

資料を見ると三沢塾の見取り図や電気料金表や出入りする人間のチェックリストなど様々だった。

しかしどれもおかしい点が多々あり何かあると言わんばかりの資料だった。

「三沢塾は科学崇拜を軸にした新興宗教と化しています。教えについては何も分かりませんがそもそも三沢塾は潰れていきます。」

必要なのはそこではありません。

端的に言うくと三沢塾は本物の魔術師に・・・正確に言うくとチュールリツヒ派の錬金術師に乗っ取られているという事です。」

「どうして錬金術師は三沢塾に乗っ取ったんだ？」

「錬金術師のそもそもの目的は「三沢塾」に捕えられていた吸血殺ディーブブラッドしです。」

麻生は神裂の口から吸血殺しと言う言葉を聞いて眉をひそめる。
ディーブブラッド

吸血殺しはその名の通りある生物を殺す能力である。

麻生はその能力とその生物について星から知識を供給する。

ディーブブラッド
「吸血殺し、吸血鬼を殺すための能力。」

神裂は麻生の言葉に少し驚いているようだがそのまま話を続ける。

「元々その錬金術師は吸血殺しを狙っていたようなのですが、一歩先に「三沢塾」が吸血殺しを捕えたようです。
ディーブブラッド

錬金術師も騒ぎを起こさないようにしたかったようなのですが「三沢塾」が先に捕えていたのでそうもいかない事になりました。」

そして神裂はその言葉を最後に口を閉ざす。

麻生はいきなり説明が終わったのでどうしたのか聞いてみる。

「貴方は吸血鬼を信じますか？」

どうやら吸血鬼について考えていたようだ。
麻生は率直な意見を言う。

「吸血殺^{ディープブラッド}して能力がある以上、存在はしているだろうな。
俺も見た事はないが。」

この星には吸血鬼が確かに存在している、吸血殺^{ディープブラッド}しと言う能力も理由にあるが何より星がいると麻生に教えたからだ。

「そんな事はまあどうでもいい。
それで火織、お前は俺にこの女性を助け出せばいいのか？」

「はい、吸血殺^{ディープブラッド}しを利用して吸血鬼を捕まえればそれをどんな事に使われるか分かりません。
彼女を保護する必要があります。」

「それにしてもどうして俺なんだ？
お前が行って片をつければいい話だろ。」

神裂は聖人と言って世界に二十人といわないと言われる、生まれた時から神の子に似た身体的特徴・魔術的記号を持つ人間だ。

『神の力の一端』をその身に宿することができる。

具体的には、聖人の証『^{ステイグマ}聖痕』を開放した場合に限り、一時的に人間を超えた力を使うことができその戦闘能力は精鋭集団である『騎士団』の一部隊すら単機で容易に壊滅させることが可能。

そんな力を持っているのなら神裂一人で行けばすぐに終わると麻生は考えていたのだが。

「私は任務ですぐに日本を離れないといけません。」

ですので私ではなくステイルとそして上条当麻がこの救出に手伝う予定です。」

あいつまで巻き込まれているのかとつくづく不幸だなと思ったがある疑問が浮かんだ。

「どうして俺や当麻を選んだ？

俺や当麻は魔術師でも何でもないぞ。」

「教会は麻生恭介と上条当麻をインデックスの裏切りを防ぐ足枷を命じました。」

それを聞いた麻生は神裂を睨みつける。

それでも神裂は表情変えず続ける。

「『首輪』が外れた禁止目録インデックスの裏切りを防ぐためです。

もしどちらかが教会の意に従わなかったら即刻インデックスを回収する事になりました。」

ちっ、と麻生は舌打ちをする。

普通に頼まれたのなら断るつもりだったがインデックスと上条が関わっているのなら話は違ってくる。

此処で麻生が断ればインデックスは確実に回収されるだろう、そして上条はそれに全力で抗うはずだ。

記憶が消えてもあいつは上条当麻だ。

彼女を守る為に拳を振うだろう。

以前の麻生ならこんな状況でも断っていたが今の麻生は断るに断れなかった。

（ほんとどうなったんだろうな、俺。）

そう思いながら麻生は答えた。

「分かった、手伝おう。」

「ありがとうございます。」

神裂はあくまで魔術師の顔で答える。

「捕らわれている女性の名前は姫神秋沙、写真はもう見ましたね。それではよろしくお願いします。」

そう言って神裂は立ち上がり部屋を出ていこうとするがピタッと突然動きを止める。

そして深呼吸をしているのか肩が上下に動いている。そしてバツと麻生の方に振り向いた。

「申し訳ありません!!」

下げた頭が地面にぶつかりそうなくらい腰を曲げて謝る。麻生はいきなり謝られたので呆然とする。

「前の戦いの時、私は貴方に一瞬とはいえ本気で斬りかかってしまいました。」

最悪の場合、貴方を殺していたかもしれないのに。」

頭を下げながら謝る。

「お前、もしかして俺に謝る為にわざわざ此処に来たのか?」

それを指摘されると突然顔をあげてうろたえる。
照れているのか顔がとても赤くなっていた。

「わ、私は、別に・・・その・・・」

「いいよ、俺は気にしていない。」

「え・・・」

「確かにあの一撃はまともにくらえば死んでいたが俺は生きている。
これで充分だろ、だから火織がそう悩む必要はない。」

彼らしからぬ優しい言葉をかけると神裂はさっきより顔を赤くして
失礼します!!と叫んで勢いよく部屋を出て行った。

「からかったらなかなか面白いな、あいつ。」

「星^{テラ}、ですか。」

窓もドアも階段もなくエレベーターも通路もない、建物として全く
機能する筈もないビルは大能力者（レベル4）の空間移動^{テレポート}がなければ
出入する事も出来ない最高の要塞の中で魔術師ステイルⅡマグヌ
スは目の前の人間の言葉を聞いて眉をひそめる。

目の前に直径四メートル、全長一〇メートルを超す強化ガラスで
できた円筒の器に赤い液体で満たされた中で逆さまになって浮かんで

いる、男にも女にも見えて大人にも子供にも見えて、聖人にも囚人にも見える人間、学園都市の最大権力者であり、学園都市総括理事長、アレイスター・クロウリーはステイルに言った。

「そうだ、麻生恭介が所有している能力の名前だ。
これほど彼の能力にあった名前はない。」

ステイルはあの麻生の能力について考える。

確かに自分の「イノケンティウス魔女狩りの王」の弱点を一瞬で見極め、さらに封じ込めるという事までしでかした。

あの時、インデックスが自動書記モードになった時も麻生一人で解決した。

「君は星に意思があると思うか？」

突然のアレイスターの問いかけにステイルは答える。

「ないと私は思います。」

この星、地球はただ回り土地としての機能など有しているだけだ
意思などないと考えます。」

「それは間違いだ。」

私達人間に感情などがあるように星に限らず植物と言った物、全てに意思はある。」

ステイルはその話はどちらかと言えば魔術側こじつらの話になるのにこの人間は淡々と語る。

「彼はその星と繋がっている。」

単に繋がっているのではなく星の力を操る事が出来るのだよ。」

「ッ!?!・・・それでは彼は・・・」

「そう、彼がその気になればあらゆる秩序や法則など改変することができ、この世界を創り直す事も可能だ。」

そんなことは人間の領域を超えている。

それはもう神の位と同じだとステイルは考える。

もしあの時、麻生がその気だったらステイルなど簡単に殺せたのでは?と思ったがアレイスターの説明はまだ続いていた。

「だが、それは本来の力を操る事が出来たらの話だ。」

「どういう事です?」

「簡単な話だ、彼はまだ自分の能力を完全に制御できていない。

せいぜい、二〇〜三〇%辺りの力しか使えていない。」

なぜそんな事をこの人間は知っているのか聞きたかったが聞けば自分の命はないとステイルは思う。

「だが、それでも彼の力は強大である事に変わりない。

ディーブラッド
吸血殺しの件は君一人ではなく星と幻想殺しを使えばいい。」

「魔術師を倒すのに能力者を使うのはまずいのでは?」

「問題ない、あの二人は無能力者(レベル0)だ。

価値のある情報は何も持っていない。

魔術師と行動を共にしたところで魔術側そちらに科学側こちらの情報が洩れる恐れはない。」

ステイルは無能力者（レベル0）の意味がいまいち分からないが言葉の意味を考えればあの二人は力が無いという結果が出ているだろう。

しかし、ステイルの心情をアレイスターは答える。

「イマジンブレイカー幻想殺しのように正体不明の能力者はいくらでもいるぞ、テラ星のよ
うに「強大な力を持ち主ゆえに、誰も本気を出している姿を見た事
のない能力者」などという種類も存在する。」

ステイルはあれで本気ではないのか、と麻生の底知れぬ力について考える。

そして「人間」は言った。

男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見えるその者は等しく「笑み」を思わせる表情を作り言った。

「さて、ディーブブラッド吸血殺しが吸血鬼の存在を証明したと言うのなら、あの
イマジンブレイカーテラ幻想殺しや星は一体何を証明してくれるのだが、ね。」

第16話（後書き）

主人公の能力・戦闘を更新しました。

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第17話

上条とステイルは「三沢塾」の前に来ていた。

事情はステイルに教えて貰いファーストフード店で相席に座ってきた巫女服の女性、姫神秋沙が今回の事件の中心人物だったと知った時は上条は驚きを隠せなかった。

此処へ来る前にインデックスは猫を拾い飼うと言い出すわ何やらあったがもうすぐ敵の本拠地なので頭を切り替える。

「三沢塾」を占拠してまで吸血殺しという能力を持つ姫神を捕えている首謀者の名前はアウレオルス・イズードという名前だ。

知名度で言えば錬金術師の中では一、二を争う錬金術師らしいのだがステイル曰く、力は衰えているらしい。

そもそも魔術の世界で錬金術師などいう職業は存在しない。

占星、錬金、召喚など一通り勉強してその中で自分に一番合った専門を見つけるのが基本だ、そもそも錬金術師も完成された職業ではない。

錬金術師は何かを創るというイメージが大きい但实际上はそうでない、錬金術師は「公式」や「定理」を調べてその先を目指している。

それは「世界の全てを頭の中でシュミレートする事」、膨大な法則を頭の中で少しでも間違っていればそれだけで頭の中の世界は歪んでしまうが、それが歪む事無く法則を完璧にすれば頭の中に思い描いたモノを現実の世界に引っ張り出す事が出来る。

上条はそれを聞いて絶対に勝てないぞ、とステイルに言ったがステイルは心配はない、と言った。

理由は世界の全てを星の一つから砂の一粒まで語ろうとすればどれだけの時間がかかるか分からない。

錬金術の学問が完成されていない理由はここにあるのだ。

これを完成させるには人間の寿命では全く足りないのだ、呪文を短くしたり、親が子に少しずつ詠唱させるといった方法もあるがそれで

は呪文が歪んでしまう。

だからこそ、寿命を持たない吸血鬼は魔術師にとって立派な脅威であり、アウレオルスはその為に吸血鬼を捕まえようとしているのかもしれないと上条は考える。

なぜ、ステイルがここまで自身のある説明をしているのかということアウレオルスとは宗派が違うが顔見知りらしい。そしてステイルと上条は三沢塾を見上げる。

「三沢塾」は一二階建てのビルは四棟もあり、そのビルが十字路を中心に据えられ、漢字の「田」の字を作るように配置されていた。

「とりあえず最初の目的は南東の五階にある食堂の脇だね、そこに隠し部屋があるらしい。」

「隠し部屋？」

「おそらく鏡視や鏡覚トリックアートでも使って中の人間には気づかせない作りになっていると思うけどね。」

あのビル、子供が積み木を並べたみたいに隙間だらけなのさ。」

ステイルはビルを眺めながらのんびりとした口調で話す。

上条はふうん、と何となく呟くと隣のステイルが忌々しそうに呟いた。

「怪しくは見えないね。」

「あん？」

「専門家の僕が見ても怪しい所は見当たらない。

怪しい所なんて何も見当たらないのさ、専門家の僕がキッチンと見ているのにね。」

上条はステイルは怪しい所はないと言っているが危険な所はないとは言っていない、そんな危険な所に足を踏み入れて大丈夫なのか？と心配する。

「大丈夫なはずがない。」

そんな上条の心情を分かっているかのようにステイルはあっさりと答えた。

「けれど、入るしかないだろう？僕達の目的は救助であって殺しじゃない。

いやビルごと炎に包んで良いって言うなら僕だって大助かりだけどね。」

間違いなく、ステイルは半分以上本気でステイルは言っていた。

「入るしかないってちょっと待て。

まさか正面からお邪魔すんのか？もうちょっと策とはねーのか、気づかれないように侵入する方法とか安全に敵を倒す方法とか！！」

「何だ、それなら君は何か得策に持ち合わせがあるのかい？」

「テメエは本当にこのまま突っ込む気か！？」

ようはテロリストが立てこもっているビルに正面から突撃するよ
うなもんだろ！！」

「ふむ、まあ身体にナイフで「神隠し」でも刻んでやれば気配を断つ事ぐらいはできるけどね。」

「じゃあやれよ!! 痛いのはヤダけど!!」

「最後まで聞くんだ。」

たとえば気配を断とうが透明人間になるが「ステイル」マグヌスが魔術を使った」魔力だけはごまかしようはない。」

それを聞いて上条はは?、と訳が分かっていないようだ。

それを見たステイルはため息を吐いてめんどくさそうに説明する。

「あのビルの中にはアウレオールの魔力が充満している。

赤い絵の具一色で塗られた絵画と例えよう。

その赤一色の絵画に青い色が塗られれば誰だって気づくだろう?」

「良く分からんが、つまりお前は歩く発信器デスカ?」

「そんなもんだが、君よりマシだと思うけどね。」

何でだよ、上条は問いかけようとしたがステイルが先に答える。

イマジンプレイカー

「君の幻想殺しは赤絵の具をこっそり拭き取っていく魔法の消しゴムだよ?」

自分の絵画がどんどん虫食いされていけば誰だって異常に気付く
だろ?

僕の方は魔術さえ使わなければ異常は感知されないけど、君の場合
は異常が常時ダダ洩れじゃないか。」

「じゃあ何か? 俺達は二人して腰から発信器ぶら下げている状態で、
何の策も持たずにテロリスト満載のビルの中に正面からドアベル鳴
らしてお邪魔するってのか?」

「そのために君がいる。

できればあの麻生恭介と一緒に同行してほしかったがまあ居ない人間の事を言っても仕方がない。

君は死にたくなければ死ぬ気で右手を盾にしろ。」

死にたくなければ死ぬ気で右手を盾にしろ、と何とも矛盾した発言をする。

麻生も一緒に姫神を救出する事になっているが先ほどから携帯に連絡しても全く反応がない。

麻生も上条と同じインデックスの足枷となっているので参加せざるを得ない状況なので来るとは思う、とステイルは言っていた。

正直、上条は麻生がどれだけ強いかは分からない。

記憶を失っているので麻生恭介という人間性もよく分からないのだがこのステイルがあてにするくらいの男なら相当強いのでは？、と上条は思う。

ステイルは行くよ、と言って二人は自動ドアをくぐり「三沢塾」の中に入っていた。

上条達が「三沢塾」に入った同時刻、麻生はまだ部屋の中にいた。正確にはあの神裂が出て行ったあとそのままベットに転がり寝てしまったのだ。

携帯を確認すると何件か上条の電話が来ている事に気づくがどうせ一緒に行こうという誘いだろうと判断してかけ直さなかった。どうしようか、と麻生は考える。

正直、あの二人が居れば事件は解決するだろうと考えているのだが

少しでもこの一件に関わる振りでもしておかないと指示に従わなかったとしてインデックスを回収されるかもしれない。

麻生はゆっくりと立ち上がり服を着替えて部屋を出て「三沢塾」に向かう。

出来れば着いた頃には全てが解決していると願いながら歩いていると。

「麻生恭介!!」

麻生の耳に聞きなれた声が聞こえ振り返る。

そこには麻生の恩人でもある、吹寄制理がなぜだか知らないが怒りながらこちらに向かって歩いてくる。

彼女は愛穂や桔梗と同じ麻生の命の恩人で幼い頃、学園都市に来た麻生がたまたま会った制理に問いかけた時、偽りない答えを答えそれが決め手のなり今の麻生がいる、文字通り恩人なのだ。

それから高校になって再開したのだが制理はあの時の麻生の事は覚えていなかった。

だが、それでも麻生は恩人に変わりはないと思っている。

「お前は夏休みなのに制服なのか。」

「さっき学校に行っていたのだから仕方がないでしょ。」

それよりも大覇星祭の出場する種目、まだ貴様だけ決まっていなのよ。」

「大覇星祭はまだまだ先の事だろ。」

まだ決めなくても大丈夫だと思うのだが。」

「いいえ、既に運営委員会は種目のエントリー用紙を配っている。大きな行事だから早めに決めて色々打ち合わせがあるのよ。」

だから早く決めろ!!」

「お前、やる気満々だな。」

「貴様がやる気がなさすぎるのよ!!!」

麻生はこういった行事には一応参加するが制理のように進んでやるような男ではない。

早く「三沢塾」に行って用事を片付けたいのだが目の前の制理がそれを許してくれなさそうだ。

制理から種目標を受け取り比較的に楽な行事を選び、極力競技に入る回数を少なくする。

制理は麻生が決めた種目を見てもう少し参加しない、とぶつぶつ文句を言う。

「それじゃあ、俺は用事があるから。」

今度こそ「三沢塾」に向かおうとするが何かを思い出し振り返り制理に言う。

「この夏休みは色々健康器具が出てくるけどあんまり買いすぎるなよ。」

それを聞いた制理は一瞬赤い顔になるがすぐに怒鳴りかけてくる。

「大きなお世話だ!!!」

すぐにでも捕まえて頭突きをしてきそうなのでその場を退散する。そして、「三沢塾」に辿りつき麻生は「三沢塾」を観察する。

（一見、何にも怪しい所はないが・・・）

世界には力や意思がある、これは麻生自身が証明している。地脈や龍脈といった人間でいう血管のような管が世界中に張り巡らされていて、人間の魔力と同様それ単体ではあまり力はない。

その世界の力は空気と同じく通常の間人、魔術師も感知することが出来ない、それが出来るのは巫薙や風水師、そして麻生だ。

だが、このビルはそういった力がないのだ。

ステイルはルーンという魔術を主に使っているのでこの異常に気が付かなかったのだが麻生は星の力を扱うのでその異常にすぐに気付いたのだ。

麻生は躊躇することなく「三沢塾」に入る。

中は学生で一杯になっていてこれから勉強する者や家に帰る者など様々だ。

するとスーツを着て眼鏡をかけたいかにもインテリな雰囲気を出している男が麻生に近づく。

「この三沢塾に入学にきたのかい？」

イマジンプレイカー

ステイルは魔術師、上条は幻想殺しという能力を持っていたのでアウレオルスはこの二人を異常者と認識して表、つまり普通の学生には見えない様にした。

しかし、麻生は能力を使わなければ身体能力が高い学生だ、だからこそアウレオルスは麻生を入学希望者だと思ったのだろう。だからこそ麻生はこういった。

「いいや、此処の錬金術師に会いに来たんだ。」

麻生がそう言うともわりの空気が一転した。

先ほどまで話していた男は突然振り返り自分の仕事場に戻る。

先ほどの雰囲気とは違い死が溢れる無人の戦場跡に切り替わったのだ。

麻生はその雰囲気を感じせず進みエレベーターの横の壁にもたれ掛けている鎧の纏った人がいる事に気づく。

その足元には大量の血だまりが出来ていて銀色の鎧は潰れている。それは死体だった。

麻生は自分達以外にアウレオルスを討伐しにでも来たんだろうと考える、麻生は死体を見るのは初めてだが冷静に判断する。

麻生はこんな死体が可愛く見えるくらいの地獄を見たので慣れているのだ。

エレベーターのボタンを触ってみるがものすごく硬く全く反応しない。

この建物は表の世界なので今は裏の世界にいる麻生はドア一つ開ける事は出来ない、さらに自力で出る事も不可能だ。

麻生の能力を使えば出る事は出来るがそれをするなら先にアウレオルスを倒した方が早いと考え麻生は早速、疲れた顔をしながら非常階段を上がっていく。

とりあえず最上階にいるだろうと適当に考え階段を上がっていく。そして階段が上がっていくとふと目の前の廊下に黄金の水溜りが出来ていた。

麻生はそれに近づき右手を伸ばし指先がその水溜りに触れる。

（これは魔術で作られた黄金か・・・そうだと・・・）

アウレオルスについて考えようとしたが後ろからヒュンと音がした直後、麻生の後ろでガン！！とぶつかる音がしてその思考を停止する。

振り返るとイタリア製の革靴を履いてそこから伸びる二メートルに届く細身の身体には高価な純白のスーツに包まれていて髪は緑でオールバックのような髪型をしていた。

その名はアウレオルス。

麻生は何か風を切る音がしたので即座に自分のまわりに空間の壁を作って防御したのだ。

アウレオルスの右手の袖口から黄金の鏃が出ていた。

「悄然。我が「瞬間錬金」（リメン＝マグナ）を弾くとは……ただの少年だと思ったが、貴様何者。」

「俺か？俺は……」

麻生は聞かれた事を答えようとしたが止める。

「いや、答える意味がないな。」

「なに……」

「お前は偽物だ。」

そんな奴にいちいち話をして意味がない。」

麻生は興味をなくしたのかそのまま振り返り階段を目指す。

その瞬間また何かがぶつかる音がした、言うまでもなく鏃と空間の壁がぶつかった音だ。

「厳然。貴様は生きて此処から出さん。

此処で黄金となるがいい。」

殺意を込めた目でにらむが麻生は大きなため息を吐いてアウレオルスと向かい合う。

「素直に引けば自分が本物だという幻想を持てたのにな。」

まあお前は人形だし人を殺した事にはならないだろ。」

「厳然。図に乗るな!!」

アウレオルスの両腕の袖口から十本もの鏃が一斉に麻生に向かって飛んでくる。

麻生は欠伸をしながら飛んでくる鏃を見ている、そしてアウレオルスの視界から麻生が消えた。

「なっ!?!」

アウレオルスは周りを見る前に自分の右側面から強い衝撃が襲い壁に打ち付けられる。

眼を右方向に向けると麻生がアウレオルスの首を押えつけていた。

麻生は能力を使いアウレオルスの隣に空間移動したのだ。

「さて、お前に時間をかけている暇はない。

悪いが一撃で終わらせる。」

そしてアウレオルスの首を絞めていない方の左手に拳を作る。

アウレオルスは抗おうとするが動くどころか声を出す事も考える事すらできなくなる。

麻生はアウレオルスに触れているので人体に干渉して一切の行動を封じている。

そしてアウレオルスの脇腹に麻生の拳がめり込みさらに裏の世界に居るので壁と板挟みになりその間に居るアウレオルスに凄まじい衝撃が身体に走る。

声をあげる事無くアウレオルスは絶命する。

麻生は運動の向きを変換して一時的に拳の衝撃を強くしたのだ。

足元でアウレオルスの死体が転がるが麻生は気にも留めず階段を目

指す。
だが、階段を上がる直前麻生の上から紅蓮の槍が降り注いだ。

第17話（後書き）

何か今回の話、読んでてパツとしない話でした。
次から頑張ります。

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第18話

上条当麻は急いで「三沢塾」に向かって走っていた。

ビルでステイルに囚として使われたりと色々とおの神父をぶん殴らないと気が済まない所だが今はそれどころではない、あのビルで女神と会う事は出来たが偽物のアウレオルスと遭遇して何とか倒す事は出来たがその後、本物のアウレオルスが現れた。

そしてアウレオルスが上条に全て忘れろ、と告げられ今の今まで忘れていたのだ。

さらに全て忘れる前にアウレオルスは禁書目録を手に入れた、らしき言葉も聞いた。

急いで「三沢塾」に戻ろうとした上条だったが異常に気づく。

夜の学園都市と言っても繁華街に誰も居ないという異常に。

（なんだ？）

この感じはステイルが夕方見せた「人払い」の結界と同じ感覚だ。だが、誰も居ないという訳ではない。

「三沢塾」を取り囲むように何人もの人間が立っていて、頭のとっぺんから爪先まで、余さず銀の鎧で身を包んでいる。

上条は教会の関係者なのだろうと考え、話しかける。

「お前達、「教会」とかって連中の仲間なのか？」

鎧の一体が「教会」という言葉にピクリと反応した。

「私はローマ正教一三騎士団の一人「ランスロット」のビットリオ
||カゼラである。

戦場から帰還した民間人か、全く貴様は運が良い。

死にたくなければ即刻退避せよ、これよりグレゴオリ聖歌隊の聖呪爆撃を行う。」

上条は思い出す。

あの「三沢塾」の中で大勢の生徒達が使われたアレのオリジナルはローマ正教のものだったはずで。

生徒が使ったグレゴオリ聖歌隊は偽典で火傷くらいの怪我がするくらいなのだったがそれはただの学生が使ってこの威力。^{レフリカ}

それが正式な魔術師、それも三三三三人の修道士が一斉に聖呪を集めれば一体どれほど威力になるのか想像がつかない。

上条は何とかしてそれを止めようとした。

中にはインデックス、ステイル、姫神、それに関係のない一般人がまだ残っている。

「ちょっと待て!!! まだ中には!!!」

「貴様の言葉は聞かない! 攻撃を開始する!!!」

ヨハネ黙示録第八章第七節より抜粋、第一の御使、その手に持つ滅びの管楽器の音をここに再現せよ!!!」

鎧の騎士は腰に下げた大剣を一度天上へと掲げ呪文を唱える。

その瞬間、あらゆる音が消えた。

夜空に切れ切れに漂っていた雲が根こそぎ吹き飛ばされ夜空には何百何千の赤い火矢が束ねられ融合し一つの巨大な槍と化して一瞬でビルの屋上から地下まで貫き通す。

その直撃を受けたのは一棟だけだが隣のビルとは渡り廊下で繋がっており隣もビルも渡り廊下に引きずられるように崩壊していく。

上条は奥歯を噛みしめて爆撃現場へと突撃する。

しかし突然変化は起きた。

上条の視界を奪っていた粉塵が引いていき、「三沢塾」の跡地へと

一斉に流れていく、そして粉塵だけではなかった。

周辺に飛び散った破片が宙に浮かび、崩れた壁が起き上がると断面同士がくっつき傷口も粘土をへうで整えるように塞がっていく、その光景はビデオを巻き戻すような光景だった。

バラバラに落ちた人々が亀裂の中へ吸い込まれていきビルの傷口も塞がっていく、気づけば「三沢塾」の四棟のビルが何事もなくそこに建っていた。

（巻き戻される・・・まさか！）

上条が夜空を見上げた瞬間、「三沢塾」の屋上から天を穿つように、紅蓮の神槍が解き放たれた。

言うまでもなく術者の元へ巻き戻ったのだ。

上条の横から呆然とした声が聞こえ、見ると鎧を着た人が膝から力が抜けて座り込んでいる。

上条はこれがアウレオルスライザードの真の実力なのだを知る。

どうやって戦えば良いか、と上条は呆然と立ち尽くしてしまうが、それを振り払うように元に戻った「三沢塾」へと走った。

北棟の最上階でアウレオルスライザードは佇んでいた。

最上階は「校長室」と名付けられ一フロアを丸々使った巨大な空間だ。

アウレオルスは窓の外の夜景に見ている訳ではない、窓に映る己の顔を見ていた。

（存外、遠くまで歩んできたものだ。）

言葉一つ、本当に「元に戻れ」の一言で、生き物のように起き上がったビルを見て眉一つ動かさない己の顔を眺めながら、アウレオルスはそんな事を考える。

アウレオルスの背後には黒檀の大きな机があり、そこには一人の少女が寝かされている。

Index—Librorum—Prohibitorum、禁書目録。

アウレオルスはこの少女を助けたいだけだった。

アウレオルスと彼女があつたのは三年前。

彼は教会に所属しながら魔道書を書き写すという特例中の特例でその書き写した魔道書で多くの人間を救える、守れると信じていた。だが、ローマ正教は彼が書き写した魔道書を自分達の切り札にして自分達の宗教に所属していない人達を救わなかった。

アウレオルスはそれが許せなかった、自ら編み出した「切り札」は全ての人々を救えると信じていた。

彼は「本」を外部に持ち出す事にした、そしてその外部がイギリス清教で内部に接触することが出来た。

そこで決して救われない少女じしゅがいた。

一目で分かってしまった、世界の全てを救いたいと願った錬金術師は目の前の少女だけは決して救う事ができないと。

その通りにアウレオルスは少女を救う事が出来なかった。

一〇万三〇〇〇冊もの魔道書を抱えていた少女はその知識もうちきに侵されていた。

その少女を助ける為にアウレオルスは魔道書を書き続けた、だがどれだけ書き続けても失敗に終わりアウレオルスは気づいた。

この方法では誰も救えない、と。

アウレオルスは世界中の人間を敵に回しても少女を救えなかった、人体を調べ尽くしても救えなかった。

ならばこそ、アウレオルスはカインの末裔の力に頼る事にした。

その力を手に入れる為なら何でも裏切り、何でも利用する、吸血殺デッドしさえも手に入れる。

そう新たに決意した時だった、後ろの扉からゆっくりとこちらに近づく足音が聞こえた。

アウレオルスはすぐに音の方に振り返る。

あの魔術師が来たのか？、否、それはありえない、なぜならあの魔術師はさきほど入ってきた別の侵入者と合流してこちらに向かっているのをすでに確認している、此処に辿りつくのはもう少し時間がかかる。

なら、生徒なのか？、否、これも違う。

生徒には暗示をかけているので此処には絶対に来ない、無論、教師も同様だ。

この「三沢塾」の中を自分の意志で行動できるのはアウレオルス、姫神だけだ。

そして姫神はアウレオルスの目の前に立っている、インデックスは黒檀の机で眠っている。

なら誰なのか？、アウレオルスは考えある一人の侵入者を思い出す。禁書目録の後に入ってきた最後の侵入者。

だが、これもありえない。

なぜならその侵入者がいた棟はグレゴオリ聖歌隊の聖呪爆撃が直撃した棟の真横にある棟に居たのを確認している。

「元に戻れ」と言ったがそれは侵入者が入ってくるまでの所まで「元に戻る」という意味を込めた。

この棟はグレゴオリ聖歌隊の聖呪爆撃を受けていないのである魔術師が生きているのは分かる、だが侵入者がいた棟は確実に崩壊したのであの侵入者が死んでも生き返る事はない。

もし、仮に生きていたとしてもその動向を感知できない訳がない、

「三沢塾」は彼の領域テリトリーなのだから。

なら、一体誰だ、とアウレオルスが考え足音の主がアウレオルスの視界に現れる。

「貴方は……」

姫神は現れた人を見て驚いている。

そこには麻生恭介がゆっくりと歩きながら部屋に入ってきた。

「なぜ、貴様が此処にいる。

必然、この「三沢塾」は私の領域、テリトリー侵入者の動向は常に頭に入っている。

貴様は隣の棟にいてグレゴオリ聖歌隊の聖呪爆撃を受けた筈だ。」

アウレオルスは答えの分からない問題の答えを聞くかように麻生に問いかける。

「その通り、俺は確かにお前のいうグレゴオリ聖歌隊の聖呪爆撃を受けた。

さすがにあれクラスの魔術は空間の壁では防げない、だが一瞬くらいは持ちこたえてくれた。

俺はその瞬間に自身の周りに「歩く教会」クラスの結界を張ってグレゴオリ聖歌隊の聖呪爆撃をやり過ぎた。

後はお前に動きを探られないように俺の持ち物か何かにルーンの刻印を刻んで存在を隠してただけだ。」

淡々とアウレオルスに答えを教える。

ルーンを使えばそれを使用した魔力の痕跡などは残ってしまう。

この男はそれすらも隠したのか、と内心驚くがすぐに余裕を取り戻す。

「なるほど貴様のような魔術師がいるとはな。」

「魔術師じゃない。」

通りすがりの一般人Aだ。」

「どちらでも私は構わない。」

それで何しに来た、少年。」

そう聞くと麻生は姫神を指さす。

「俺はその女を此処から助け出してくれ、と依頼されたから来た、それだけだ。」

その言葉を聞いて姫神を再び驚いた顔をする。

「それは無理な相談だ。」

必然、彼女は私の目的の為にどうしても必要だからだ。」

アウレオルスは後ろに黒檀の机に眠っている少女、インデックスに視線を移す。

麻生はその視線を追いインデックスがそこにいる事に初めて気付き呆れた表情をする。

「あの修道女、此処に来ていたのか。」

その呟きにアウレオルスはピクンと反応する。

そして麻生の後ろの扉からステイル、上条が走って入ってきてそれを見た姫神はまた驚いた表情をする。

それもその筈、今日の昼間に会った二人がこんな所に来たのだから。

「麻生恭介か、神裂からの伝言をちゃんと聞いたようだね。」

「出来れば来たくなかったがそうもいかないしな。」

一瞬だけ上条の方を向くがすぐに前を見る。

アウレオルスはこの二人が来た事にはさほど驚いていないようだ。

「ルーンの魔術師、なぜ貴様は私を止めようとする？」

貴様がルーンを刻む目的、それこそが禁書目録を守り助け救う為だけだろうに。」

上条は机の上に眠っているインデックスを見て走り出そうとするがステイルの長い手に阻まれる。

「簡単だよ、その方法であの子は救われない。」

「それで吸血殺しディーアップブラッドを使って吸血鬼を呼び寄せ利用しインデックスを助ける訳か。」

麻生がアウレオルスの使用としている事を答える。

それを聞いたアウレオルスは少しだけ笑みを浮かべステイルは舌打ちをする。

「なるほど、噛ませるって訳か。」

これは歴代のパートナーに共通して言える事だけどね、誰かを救いたければ、まずは自分を殺して人の気持ちを
知る事こそが重要な
のさ。

ま、これは僕も最近覚えた事だけだね。」

早速残酷な切り札を使おうか、とステイルは言う。と麻生と上条の背中を叩いて少しだけ前に押し出して言った。

「ほら、言ってやれよ今代のパートナー達。

目の前の残骸が抱えている、致命的な欠陥ってヤツを。」

「なに？」

アウレオルスは麻生と上条を睨みつける。

上条は今の台詞に判断がつかず、麻生は大きくため息を吐く。

「お前、一体いつの話をしてんだよ？」

「一つだけ訂正だ。」

俺はあんな修道女のパートナーになった覚えはない、それにアイツを救ったのは当麻だ。」

な、に、とさっきまでとは比べ物にならないくらいに二人を凝視する。

「そういう事さ、インデックスはとくに救われているんだ、君ではなく今代のパートナー達によって。

君にできなかった事をそいつ等は成し遂げてしまったんだよ。

ああ、信じられない気持ちには分かるよ、何せ僕はそれを直接見たのに未だに信じられない、いや信じたくない、かな。

永遠にあの子はこっちに振り向かない。

その事実を突き付けられたようなものなんだから。」

「待て、それでは……」

「簡単には殺さん、じっくり楽しませろ！」

私は禁書目録に手をかけるつもりはないが、貴様等で発散せねば自我を繋げる事も叶わんからな！」

だから俺は救っていない、と言いたい麻生だがそう言っても相手は聞く耳を持たなさそうなので言うのを止める。

麻生はこの拘束を解こうとしたがそれよりも先に姫神秋沙がアウレオルスと麻生達の間立ちふさがる。

既にアウレオルスは姫神秋沙に興味はない、否、吸血殺しという能力デッドブラッドもはや不要になった。

「邪魔だ、女。」

アウレオルスは本気だ、本気で姫神を殺すつもりだと麻生達は知る。上条は何とか自分の右手を強引に引き寄せ顔の前に手繰り寄せるがそれよりも先に麻生が立ち上がる。

だが、麻生よりアウレオルスの言葉が早かった。

「死ね。」

傷もなく、出血もなく、病気ですらもありえない。

まるで電池を抜かれたかのように、人間で言うなら魂が抜けたかのように後ろに向かって、仰向けに倒れてゆく。

だが、地面に倒れる前に麻生がその身体を抱き留め、左手を姫神のでこに当てて目を瞑る。

すると小さくだが呼吸をし始め、姫神はゆっくりと眼を開ける。

「危なかったな、さすがに死んでしまったら俺も救う事が出来なかった。」

「ど・・・して・・・」

「さっきも言ったが俺はお前を助け出してくれと頼まれてきたんだ。それなのにお前が死んだらその頼みが達成できないだろ。」

そう言って麻生は右手で姫神の眼の上に重ねる。

「寝てろ、起こさないから。」

聞こえた姫神は小さく笑うとそのまま静かに眠り始める。

イマジンブレイカー
幻想殺しの力で重量の拘束から逃れた上条は麻生と姫神に近づく。

「当麻、彼女を頼んだ。」

俺はあの男を倒す、あの男を何とかしないと此処から帰れなさそうだしな。」

姫神を上条に預けると上条は一瞬驚いたが姫神を壁際まで運ぶとそれを守るかのように姫神の前に立つ。

「我が金色の練成で確かに姫外秋沙の死は確定した。
何だ、貴様は。」

「さっきも言っただろう、通りすがりの一般人Aだ。」

距離は約一〇メートル、麻生の身体能力ならすぐに埋められる距離だが麻生よりも早くアウレオールの言葉が早い。

「窒息せよ。」

アウレオルスはそう言葉を告げるが麻生には何も変化がない。

「どうやら今度は俺自身に干渉してきたようだが残念だったな。」

俺は自身に干渉する能力などは俺が了承しない限り通る事はない。

」

先ほどの重力の拘束は間に重力が入っていたから麻生を拘束するこ
とが出来た。

アウレオルスは麻生にそう言った言葉が通じないと分かるとすぐに
言葉を変えてくる。

「感電死。」

瞬間、麻生の周りに青白い電撃が麻生を取り囲み襲いかかる。

だが、電撃を受けても麻生には平然と立っていた。

空間の壁で電撃を防いだのだ。

「絞殺。」

床から何本の縄が麻生の首をがんじがらめに縛りつけるが麻生に巻
きついた瞬間その縄が一斉に燃え尽きる。

アウレオルスは眉をひそめながら首筋に針を突き刺しその針を投げ
捨てる。

「圧殺。」

麻生の頭上に錆びた車が出現し降ってくるがいつの間にか持ってい
たサバイバルナイフで真っ二つに切り裂く。

「ふむ。」

様々な言葉を告げるがどれも不発に終わるがアウレオルスは余裕の表情をしていた。

対する麻生も距離を詰める事はせずアウレオルスを観察しているようだ。

「それは黄金練成（アルスⅡマグナ）だな。」

「気づいたか。」

さして驚いている訳ではなさそうだな。」

二人は何も驚いていないがステイルは驚愕の表情を浮かべている。

「馬鹿な、黄金練成（アルスⅡマグナ）は理論は完成しても呪文が長すぎて完成させられるはずもない。」

ステイルの問いにアウレオルスではなく麻生が答えた。

「だからお前はこの『三沢塾』の生徒を利用した、違うか？」

「ほう、存外頭も良いようだな。」

「どういう事だ？」

ステイルはまだ分かっていないのか再び問いかける、上条もその事に分かっていないようだ。

「一〇〇や二〇〇の年月では儀式は完成できない、だが一人で行えばな。」

だから此処にいる二〇〇〇人も人間を操り「グレゴオリの聖歌

隊」のように呪文を唱えさせ呪文と呪文ぶつける事で相乗効果を狙った。」

「ここは異能者達の集まりの筈だ、「グレゴオリの聖歌隊」など使えば回路の違うヤツらは身体が爆砕して果てる筈だ!!」

「なぜ、気づかない。」

壊れたのなら直せば良い話だろう。

あの壊れたビルを直した時のように、伝えてなかったな、あの生徒達は何も死んだのが今日が初めてではない。」

「てめえ!!」

アウレオルスの言葉を聞いて上条はそのまま襲いかかろうとするが麻生が前に立ちそれを阻む。

上条はそのまま麻生を乗り越えてでも行こうとするが先ほどとは違う麻生の雰囲気を感じ取る。

「正直。」

麻生は言う。

「姫神を此処から連れ出すだけだからお前の相手は適当にしていたが気が変わった。」

お前はここで俺が倒す。」

ふっ、と麻生の言葉をアウレオルスは鼻で笑うと再び首筋に針を突き刺す。

「私も貴様の力は興味があったがこれで終わりだ。」

銃をこの手に、刀身をもって外敵の排除の用意。」

するとアウレオルスの手に鏢は大昔の海賊が使っていたようなフリントロック銃の先に剣が埋め込まれていた。

「人間の動体視力を超える速度にて刀身を旋回射出せよ。」

アウレオルスが右手を振った瞬間、恐るべき速度で扇風機の羽のように回転して襲ってくる。

普通の人間ではまず避けられない、例え麻生が避けても後ろにいる上条に当たってしまう。

だからこそ麻生はその剣の弾丸を人差し指と中指の間で受け止めた。

「なん・・・だと・・・」

アウレオルスは信じられないような表情をしている。

それもその筈、自身が人間の動体視力を超える速度と設定したので避けるおろか受け止める事など不可能なはず。

例え受け止めたとしてもあの弾丸の速度を指で受け止めれば確実に指が吹き飛んでしまう。

なのに目の前の男は受け止めたのだ。

「どうした、こんなものか？」

指で挟んでいる剣が砕け散ると同時にアウレオルスに言い放つ。

「くっ!?! 先の手順を量産、一〇の暗器銃、同時一斉射出せよ!?!」

今度は一〇の弾丸が麻生に向かって襲いかかるが麻生にぶつかる前

にその弾丸は碎け散る。

「な・・・馬鹿な・・・」

麻生はゆっくりと近づく。

それがアウレオルスの余裕を確実に奪っていく。

「お・・・おのれ・・・断頭の刃を無数に配置、速やかにその身体を切断せよ!!」

天上から巨大なギロチンが出現する、だが出現した瞬間そのギロチンは一斉に碎け散る。

黄金練成（アスルⅡマグナ）は自身の思った事を世界に引っ張り出す魔術。

それは星を歪めると同じ事だ。

麻生は星と繋がっているので黄金練成（アスルⅡマグナ）で生まれた物いち早く察知して干渉し破壊したのだ。

しかし、アウレオルスは麻生の能力が分からないのでさらに不安がつる。

（ば、馬鹿な!! ありえん、ありえん!!）

なぜだ、私の黄金練成は完璧な・・・）

そう考え不安の取り除こうとするが麻生の言葉で不安が一気に押し寄せる。

「お前の言葉で世界を歪められると思っているのか？」

「な、ん・・・」

「なら、まずはその幻想を破壊してやろう。

そして知るが良い、お前が思っている以上に星は甘くない事を。」

麻生が近づくとアウレオルスも下がっていく。

考えないようにしてもその考えに、思考の深みにはまっていく。

それが分かっているのに思考が止められない。

いつの間にか麻生はアウレオルスの目の前に立っていた。

「見せてやろう、これが原初の一だ。」

そして左手をアウレオルスに向かって突き出す。

麻生からとてつもない光が現れアウレオルスの視界を埋め尽くした。

ステイルと上条、そして麻生は公園に集まっていた。

ステイルは「三沢塾」その後についてなどを報告しに来たようだ。

麻生は別にどうでも良さそうだが上条が無理やり連れてきたのだ。

「そうそうアウレオルスについてだけど、君は一体何をしたんだい？」

ステイルは麻生に問いかける。

あの時、ステイル達から見た二人は麻生が左手をアウレオルスに突き出しその直後にアウレオルスは叫びだし意識を失った。

「なに、少しだけ星の恐ろしさを見せてやっただけだ。」

「それを見たせいなのかアウレオルスは記憶を失っていた。
一応僕が殺しておいたけどね。」

それを聞いて上条は息が詰まるような声をあげる。
それを見たステイルはため息を吐いて煙草を携帯灰皿に捨てる。

「君は勘違いしているようだね。
殺すと言っても命を奪うだけとは限らないよ。」

「は？」

「アウレオルスは記憶を全て失った。
その状態で顔を作り変えてしまったら中身も外見も全てがアウレ
オルスⅡイザードでなくなる。」

これはアウレオルスという人間を殺す事と何の違いもないだろ？」

「お前、良い人！！」

そう言って上条はステイルの頭を背伸びしてでも撫でようとしそれを
ステイルが全力で避けてゆく。
それを見ていた麻生はため息を吐いて二人から離れていく。
二人の周りにはそんな光景を見て怪しがる人々で一杯だったからだ。

第18話（後書き）

中二病M a xでしたね（笑）

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第19話

「暑い。」

麻生恭介は炎天下の中一人で散歩をしながら呟く。

今は八月、一年の中で一番温度が上がる月でありさらに麻生の服装は黒を主体にしているので熱の吸収量が半端なく多いのだ。

それが分かっているのに服装は変えず、なおかつ散歩も止めない。どうせ部屋に居ても寝る以外する事がないので暑くても散歩に出かけているという訳だ。

麻生の能力を使えば気温などを制御する事が出来るがそんな事に能力を使うのも何だかもったいない気がするのでやめておく。

そして、裏路地に入っていく。

表通りだと日光に当たり暑く感じるが裏路地なら影も多く少しだけ涼しく感じる。

裏路地に入ると不良達に絡まれる可能性が高くなるが暑さに比べればどうという事はない、そのまま裏路地を歩いていると何人かとすれ違う。

普段、こんな裏路地にこれだけの人とすれ違う事なんて滅多にない事なのだがそれにしても今回は異常すれ違う人が多い。

麻生は知らぬ内に面倒事に巻き込まれたのか？と妙な不安を抱いていると目の前に見知った顔がこちらに歩いて来ていた。

「あら、麻生さんではないですか。」

「こんな裏路地で会うとはな。」

白井黒子とその後ろに御坂美琴がこちらに歩いて来ていたが白井の足元に空き缶が転がっていて白井はそれに気づかず空き缶を踏んで

後ろに転んでしまう。

「ちょ、ちょっと大丈夫!？」

ゴチン!! といった音が鳴ったので美琴は白井に声をかけ麻生は呆れた顔をしている。

すると白井は何かを見つけたのか室外機と地面の隙間から封筒を拾う。

拾い上げると中からカードが落ちる。

麻生はそれを拾う。

「なにそれ？」

「マネーカードみたいだな。」

「どうしてこんな裏路地にマネーカードがありますの？」

「俺に聞くな、こう言った事は風紀委員が一番知っているんじゃないのか？」
おまえたち

なぜ裏路地にマネーカードがあるかそれを調べる為に風紀委員の支部^{ジャツジメント}に向かう。

麻生も興味があるのか一緒についてく、部屋の中には初春も居て白井がマネーカードについて話すと初春はパソコンの電源を入れてそれについて報告する。

「ここ数日、第七学区のあちこちでマネーカードを拾ったという報告がきてるんです。」

「そんな話、わたくし聞いていませんわよ?」

「貨幣を故意に遺棄・破損する事は禁止されていますがマネーカードは対象外なので特に通達していません。

カードの金額は下は千円くらいから上は五万円を超えるものまで決まって人通りの少ない道に置かれています、宝探し感覚で裏道をうろつく人も多いみたいです。

ですが今度はカードを奪い合ったり武装無能力^{スキルアウト}集団のなわばりに入り込んだ学生が絡まれたりしています。」

「放っておく訳にもいなくなってきた・・・と。

お姉様、残念ですがデートはまた今度・・・」

「ううん、私一人で行ってくるから気にしないでいいわよ。」

白井は寂しそうな顔をしていたが美琴は気にせずそのまま部屋を出ていく。

麻生も話を聞いて興味をなくしたのか何も言わず部屋から出て行き、散歩しながら持っているマネーカードを見つめる。

（何の為にこんな事を・・・）

そう考えている自分に気づきすぐにその考えを振り払う。

麻生は最近人助けをするようになってきている。

それは自発的な物ではなく他人に頼まれたという事もあるがそれにしても最近は特に多くなった。

今でも自分とは全く関係なくさらに誰にでも頼まれたのでもない、自分から首を突っ込もうとしたのだ。

（これじゃあまるで・・・）

あの時の自分に戻ってるみたいじゃないか、と誰に言う訳でもなく自分に言う訳でもない麻生はただ夕暮れの空を見上げて呟く。

けど絶対にあの時の自分に戻る事は絶対にできない。知ってしまったから世界の姿を、その上に住む人の闇と言う物を。それを知っていてもそれでもあの時の自分に確実に近づいている、原因は一つしかなかった。

「上条当麻。」

彼に出会ってしまった時が全ての始まりだったのかもしれない。

上条は昔の麻生とよく似ていた、だからこそ上条を見ていて無性に腹が立つのだ。

腹が立つのにそれでも何故か上条を助けてしまう。

麻生は無駄な事を考えているな、と思考を中断して寮に帰っていく。そして五日間麻生はずっとベットの上で寝転がっていた。

体調が悪くなったとかそう言った事ではなくただ気分が悪いのだ。この五日間で何回か誰かがドアを叩く音がしたが麻生は全部無視した、おそらく上条なのだろうと適当に考えていた。

（どうなっているんだよ。）

自分に問いかけても答えが返ってくるわけでもなくようやくベットから身を起こすと麻生は散歩に出かける。

いつもの通り生活していれば元の調子に戻ると思っていたからだ、だが夜になっても調子は戻らなかった、むしろ悪くなったかもしれない。

麻生は苛立ちながら舌打ちをした時だった、大きな爆発音が聞こえた。

麻生は音のする方を見る、どうやら場所はすぐ近くの様だ。何かが起こっている、いつもならすぐに振り返り寮に戻るのだがな

ぜかその足は自然と音の方に向かっていた。

爆発した所から離れた所で目を千里眼に変えて何が起きているか確認する。

麻生は見た、麻生と同じ白髪の方が御坂美琴の足を引きちぎる所を。美琴はその男に足を引きちぎられてもひるむことなく電撃の槍を男に打ちこむ、その威力は確実に人の意識を刈り取るほどの威力を秘めていた、だが電撃の槍が男に当たると同時に美琴の元に反射される。

麻生はこの一部始終しか見ていないが分かった。

あの男相手に美琴は勝てないと。

今ならまだ間に合う、麻生の力を使えばあの現場に割って入って美琴を助ける事は出来るだろう、それが分かっているのに麻生は動けない、動かないのだ。」

美琴は麻生に助けを求めたのか？

誰かが美琴を助けてやってくれと麻生に助けを求めたのか？

麻生は動かない、誰かが助けを求めない限りは。

足を引きちぎられ電撃の槍を浴びた美琴は何かを探すかのように地面をはえずりまわっている。

その光景を見た男は飽きたのか近くにある電車に近づきそれを軽く叩く。

何キロあるか分からない電車が軽々と浮かぶとそれは美琴の頭上に落ちていく、美琴は何かを見つけたのかギュッと何かを抱きしめるとその瞬間、電車に押しつぶされた。

誰が見ても分かる、美琴は死んだと。

「・・・・・・・・」

麻生は先ほどよりいらついていた。

誰かの頼みなければ動けない自分にいらついているのかそれとも別の理由なのかは分からなかった。

その直後だった。

「あああああああああ！！！！！！！！」

そんな叫び声と共に先ほど電車で潰された御坂美琴が男に向かって走り出していた。

麻生は何がどうなっているのか全く分からなかった、だが二人の戦いが再び始まる。

美琴は電磁力を使い周りの砂鉄を利用して男を砂鉄で包み込む。

その攻撃に一切の躊躇いがなかったが突然砂鉄の檻が突如崩れていった。

（あいつの能力は一体・・・）

美琴は先ほど引きちぎられた足を見つけ再び叫ぶと同時に周りにあった線路のレールを電磁力で操る。

その数はおよそ五〇を超えていた。

そしてレールの雨がその男に降り注ぐが男に触れた途端そのレールが美琴に襲いかかる。

何とか横に移動してかわすことが出来たがその表情は驚きと困惑が混ざっていた。

男は何かが分かったのか悪魔のような笑みを浮かべ美琴に近づこうとする。

だが、美琴の構えを見てその足を止める。

右手を突きだし親指にはコインが乗っていた。
レールガン
超電磁砲。

美琴の異名であり切り札でもある。

美琴と男が何か話をしているが麻生の位置からでは何を話しているか分からなかった。

だが、最後の言葉だけは聞こえた。

「そんなモノの為にあの子を殺したのか!!!!!!」

叫びと共に一切の躊躇いのない全力の超電磁砲レベルガンが放たれる。

しかし男に触れた途端その超電磁砲ですらはね返され美琴の顔の真横を通り過ぎていく。

そして今度はこちらの番だと言わんばかりに両手を広げるが麻生は気づいた、そして男も美琴も気づく。

美琴の後ろに何人もの美琴達が立っている事に。

美琴と同じ制服を着て、髪の高さも色も全く一緒だった。

ただ一つ違う所があるとすれば暗視ゴーグルをつけている所だけだった。

美琴達と男が何かを話すと男は美琴に近づき何かを話してそのまま立ち去って行った。

「絶対能力進化（レベル6シフト）か……」

麻生はあの後、美琴達に話しかける事無く寮に戻った。

そして少し躊躇ったが星に裏で何が起こっているかを教えて貰った。麻生は星に聞くのは好きではない。

ある事柄について聞いたらその答えがちゃんと返ってくるのだがそれに伴い知りたくもない情報まで送られてくるのだ。

実際に絶対能力進化（レベル6シフト）について情報が教えられた時、あ的美琴のクローン達を実験動物のように扱われたりと知りたくない情報まで知ってしまったのだ。

吸血鬼殺しの時も同様だった。

そもそも麻生は星が嫌いだ。

こんな能力を与え、見たくもないモノを見せた星が嫌いなのだ。

「こうやって星の知識を頼るのはこれで最後だ。」

そう心に決めた。

そしてもう一つ心に決める。

これ以上人に関わらない。

絶対能力進化（レベル6シフト）については大体の事は分かった。

それを知っても助けようと思わなかった。

麻生恭介は上条当麻ではない。

上条ならこれを知ったら真っ先に美琴の元へ行き事情を聞くだろう。麻生恭介は違う、本来の麻生は頼まれなかったら絶対にしないし頼まれてもほとんど断ってしまう。

ここ数か月で何回か人助けはしたのはあの上条という存在が頭の隅にあったからだ。

あの男なら必ず助ける、と。

それに気づいた麻生は思ったのだ。

（こんなの麻生恭介じゃない。

俺はあいつのようにはなれない。）

麻生はベッドから立ち上がりいつもの様に散歩に出かける。

例えば美琴が麻生に助けを求めても麻生は断るだろう。

それが麻生恭介なのだ。

いつもの街並み、いつもの人混み、その中で麻生は歩いていた。目的もなくなつたふらふらと。

しかし、異変は突然起こつた。

突然音が消え、人がいなくなったのだ。

（どうなっている。）

麻生は周りを見渡すが誰も居ない、ルーンによる人払いだったからそれが発動した瞬間は麻生なら感じ取ることが出来る。なのに感じるどころか違和感すら感じなかったのだ。

「その生き方でいいのか？」

声は突然後ろから聞こえた。

麻生は後ろを振り返るが人影は見当たらなかった。しかし、人ではなく猫がすぐ前に座っていた。

「もう一度聞く、その生き方でいいのか？」

声の主はこの猫で間違いないようだ。

麻生は警戒しながら猫に質問を返す。

この猫が普通の猫なら麻生も気には留めなかったのだがこの猫からはとてつもない存在感を感じるのだ。

「お前はどこかの魔術師の使い魔かなにかか？」

麻生が質問を質問で返したのが悪かったのか少しだけ不機嫌そうなる。（猫なのでそこら辺は分からないが）顔をするが麻生の質問に答える。

「使い魔という概念はあっている。

しかし、魔術師の使い魔ではない。」

「つまり、お前は誰かの使い魔って事か。」

「それが人とは限らないがな。

そんな事よりこちらの質問に答えてもらう。

お前はその生き方でいいのか？」

「どういう事だ。」

「そのままの意味だ。

お前はさっきまで自分の生き方について迷っていただろう？」

その言葉を聞いて麻生は左手に剣を具現化させその剣先を猫に向ける。

麻生はさっきまで考えていた事は誰にも話していない、なのにこの猫は知っていたのだ。

猫は剣先を向けられていても全く動じなかった。

「そう警戒するな。

俺は話をしに来ただけだ。

その生き方でいいのか、とな。」

「当たり前だ、これは他ならぬ俺が決めた事だからだ。」

「なら、どうしてお前はまだ迷っているだ？」

麻生は言葉が出なかった。

自分でも気づかなかった事にこの猫は気付いているのだから。

「お前はあの幻想殺しの生き方に惹かれている。

あの男のように生きてみたいと思っているのにそれが出来ないと分かっている。

その矛盾がお前を迷わせている。

お前は本当は気づいていた筈だ、本当は自分がまだ迷っている事を。

だが、気づかない振りをして諦めた、違うか？」

「黙れッ！！！！」

麻生は剣を地面に叩きつけ衝撃波を生み出しそれが猫に向かっていく。

だが、猫に当たる直前衝撃波が二つに割れてしまう。

「ふむ、凶星の様だな。」

それだけ言うと猫は振り返りどこかへ行く。

そして去り際に言った。

「それでもその道を選ぶと言うならそれはそれで構わない。

だが、どちらを選ぶにしろ選んでしまったらもう変える事は出来ないぞ。」

忠告のような言葉を残して猫は歩いていく。

すると音が突然復活する。

人も現れ、その人混みの中に猫は消えていった。

麻生は猫が言った言葉が頭の中で響き渡る。

（その生き方でいいのか？）

「何だよそれ、それじゃあまるで俺がこの生き方に納得していないみたいじゃないか。」

麻生は空を見上げて一人呟いた。

第19話（後書き）

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第20話

麻生は歩き続けていた。

この三日間は寮に帰る事なく学園都市を歩き続けていた。

麻生は頭の中で三日前に会った猫の言葉が頭から離れないのだ。

（その生き方でいいのか、か。）

ふと、近くにあった看板に目をやる。

そこには第二三学区、宇宙開発エリアと書いてあった。

（かなり遠くまで歩いていたんだな。

幻想殺しに惹かれているか・・・）

言われてみて気づいた。

麻生が無くしてしまったモノを上条は持っていた。

だから、惹かれているのだが麻生は二度となくした物を取り戻すことが出来ない。

（結局、俺はこの生き方しか・・・）

そう麻生は諦めた時、対向道路に御坂美琴が歩いていた。

その表情は暗く何か思いつめた表情していた。

そしてふらふらとどこかに行ってしまう。

その姿を見て麻生は美琴を追跡する事にする、それをしたところで麻生の迷いは晴れる事はない文字通り全く意味がない。

それなのに麻生は気まぐれか、それともあの猫に言われたのが原因なのか、どちらが原因かは分からないのだが息を潜めて美琴の後をつけていく。

美琴はもう打つ手がなかった。

あの実験、絶対能力進化（レベル6シフト）を止める為に何個もある研究所を破壊してきた。

本当なら実験の核である学園都市第一位の一方通行^{アクセラレータ}を倒す事が出来ればそれで実験は中止になる。

だが、美琴では一方通行^{アクセラレータ}に勝てない。

もしかしたらこの地球上で一方通行^{アクセラレータ}に真正面から戦って勝てる人間などいないかもしれない。

一方通行という名前ではない、誰も本人の名前は知らないので能力の通称で呼ばれている。^{アクセラレータ}

彼の能力は一方通行。

運動量・熱量・光・電気量などといったあらゆるベクトル（向き）を観測し、触れただけで変換する能力。

美琴がいくら強力な電撃を一方通行^{アクセラレータ}に打ちこんだ所で全て反射されてしまい自分に返ってくるのだ。

だから、研究所を破壊するという回りくどい方法を取らざるを得なかった。

自身の全能力をフルに使い研究所を片っ端から破壊していった。

一時期は実験は止められたと思っていた。

だが、あの時まだ実験は終わっていないと分かってしまった。

最後の研究所に潜入した美琴は電気機器などが一切稼働していなかった。

罾かと思ひ潜するが人もおらずデータベースのデータも全て消去されていた。

データベースをハッキングするとどうやらこの研究所は破棄されたのだと知りようやく自分のクローンである通称「妹達」シスターズが犠牲になる事はない。

いつもの自動販売機で上条当麻が立っていた。

美琴は少しだけ笑うと上条を自動販売機から押し退ける。

「ちよろっとー、自動販売機の前でポケットと突っ立てんじゃないわよ。

ジュース買わないならどくどく、こちとら一刻でも早く水分補給しないとやってらんないんだから。」

上条の腕を持ち横に押し退けるが対する上条は美琴の顔を見て言った。

「何だ、コイツ？」

その言葉を聞いてカチンと来たのかバチバチと美琴の前髪で電気音になる。

「わったしっにはー、御坂美琴って名前があんのよ！いい加減に覚えろド馬鹿！！！」

そして美琴の額から青白い電撃の槍が伸びていくが上条は右手でそれを打ち消す。

毎回同じように軽く電撃をあしらわれているのが少しむかつくが今

は自動販売機の方が優先だった。

「その自動販売機な金を吞むっばいぞ。」

「知っているわよ、だから・・・」

そういつてリズムよくステップを刻む。

上条は嫌な予感すると思った時、その予感が当たった。

美琴はちえいさーとふざけた叫びと共に自動販売機の側面を蹴りを叩き込んだのだ。

その時、スカートの下が体操服の短パンだったので何だか夢を壊された気分になったのは上条だけの秘密だ。

「ボロツちいからジュースを固定しているバネが緩んでいるのよね、何のジュースが出るか分からないけど。」

そう言いながら出てきたジュースのプルタブを開ける。

どうやらまだ当たり方だったようだ。

すると上条の様子が変だったので美琴は何かあったのかを尋ねると上条はこの自動販売機がお金を吞む事を知らなかったらしく世にも珍しい二千円札が吞まれてしまったらしい。

それを聞いた美琴は腹を抱えて笑ったが自動販売機の前に再び立つ。

「ではその二千円札が出てくる事を祈って・・・千円札が二枚とが出てきたら承知しないわよこのポンコツ。」

右手の掌を硬貨の投入口に突きつける。

上条は再び嫌な予感がしたが一応何をするか聞いてみる。

「どうやって自動販売機から金を取り戻すんだ？」

「どうやってって、こうやって。」

瞬間、美琴の掌から電撃が飛び出て自動販売機に直撃する。

そして自動販売機の隙間から黒い煙が噴き出していく。

当然、上条麻は全力でその場を離れた。

美琴は自動販売機から出てきたジュースを持ちながら上条を追いかける。

十分くらい走ってようやく上条も足を止めると美琴は上条に何本か空き缶を渡す。

上条はこれを受け取ったら共犯になるのでは？と考えたがジュースの名前を見て言葉をなくす。

黒豆サイダーやきなこ練乳など名前からして確実においしくない商品ばかりだ。

美琴は誤作動を狙ってやっているので種類までは選べないわよ、と自動販売機を壊した件については全く反省していないようだ。

「とりあえずお飲み。」

美琴センサー直々のプレゼントだなんてウチの後輩だったら卒倒してるのよん。」

「卒倒だあ？こんな食品衛生法ギリギリの缶ジュースもらって喜ぶ奴がいるかよ。」

大体少女マンガじゃねーんだから女子高でレンアイなんざありえねーだろ。」

上条はそう言ったが美琴の表情は満更でもなかった。

「いや、少女マンガ程度なら可愛らしいんだけどね。」

色々あるんですよー、いろいろ、むしろどろどろ？

私が常盤台途中で何て呼ばれているか教えてあげようか？ 引いちやうわよーん。」

自虐的に美琴が話している時だった。

「お姉様？」

不意にその言葉が響き渡った。

美琴は背中に氷を突っ込まれたような顔をして上条はあまりの衝撃的呼び名に驚いている。

ちよっと離れた所に美琴と同じ制服をきた女性、白井黒子がやってきて上条と美琴が仲良く？ ベンチで座っているのを確認すると大きなため息を吐いて言った。

「まさか本当にお姉様が殿方と逢瀬を！！！」

「ちよっと待てえ！！！」

美琴の間髪入れずに突っ込みを入れたが白井はそれを無視してすさまじい速度で上条の両手を握る。

「初めまして、殿方さん。

わたくしお姉様の「露払い」であり唯一無二のパートナー、もう一度言いますわよ、唯一無二のパートナー白井黒子と申しますの。すっごく不本意なのですがお姉様の知り合いの様ですので社交辞令として仕方なくご挨拶さしあげてます。」

そう説明されてもどう反応していいのか分からず困っている上条。それを見た白井は。

「この程度でドギマギしているようでは浮気性の危機がありましたよ？」

ですが、てっきり麻生さんかと思いきやまさかこんな殿方まで・
・黒子は喜んでいいのやら分かりませんわ。」

「え？ 麻生？」

白井の言葉を聞いて顔が真っ赤になる美琴。

「このヘンテコが私の彼氏に見えんのかあ！！！！」

電撃と共にさりげなく上条の心を傷つける。

白井は空間移動電撃をかわし近くテレポートの街灯の上まで移動する。

「ですわよねえ、おかしいとは思いましたの。」

そうなると麻生さんに方が本命」

そう言葉を続けようとするがまた電撃が飛んで来たので隣の街灯に移動する。

白井は最近美琴が元気がなかったのが気になっていたが今の美琴を見ると元気を取り戻したようなので少し安心する。

「それではくれぐれも過ちを犯しませんようお姉様。」

そんな言葉を残して白井はどこかへと空間移動した。テレポート

美琴は後でどうやって白井を締めようか考えていた時だった。

「お姉さま？」

上条はまたお姉さまかよ！？と驚いていたが美琴はその声を聞いて

固まってしまう。

それは一番聞きたくない声だった。

振り返ると御坂のクローンである「妹達」^{シスターズ}が立っていた。

美琴は「妹達」^{シスターズ}の一人を見て固まっているのをよそに話が続く。

「え？お？同じ顔？」

「遺伝子レベルが同質ですからとミサカは答えます。」

「ああ、双子なのね。」

一卵性双生児は初めて見るけど、ここまで似るモンなんだな。

その双子ちゃんが何の用事？姉ちゃんと帰んの？」

「馴れ馴れしい人だなこの軽薄野郎、と本音の飲み込んでミサカは質問に応じます。」

ミサカを中心とする半径六〇〇メートル以内の領域にて、ミサカと同等のチカラを確認したため気になって様子を見に来たのですが・・・現場に壊れた自販機、大量のジュースを持つあなた達、まさかお姉さまが窃盗の片棒を担ぐとは・・・」

美琴妹はため息を吐きながら言う。

「おいっ！！主犯はオマエのねーちゃん！！」

俺は傍観者だぞ！！」

「電子で自販機表面を計測した結果、もっとも新しい指紋あなたのものです。」

「ウソっ！！そんな事まで分かんのか？」

「ウソです。」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

上条はもうどうしたらいいのか分からず美琴に助けを求める。
すると美琴は御坂妹を睨みながら近づき爆撃みたいな怒鳴り声をあげる。

「アンタ一体どうしてこんな所でブラブラしてんのよ!？」

上条は耳を押え御坂妹は美琴が怒鳴り声をあげても表情を変えない。
そして美琴の質問に答える。

「・・・・・・・・研修中です。」

「研・・・・・・・・」

美琴は一瞬で思い出す。

あの時電車に押しつぶされたあの子を。

美琴は御坂妹の片腕を掴み強引に引っ張っていく。

「研修ジャッジメントって風紀委員にでも入ったのか？」

上条の問いかけに美琴は適当に答えた。

「風紀委員ジャッジメント? あーそうね、それよそれ。」

「ミサカにもスケジュールが「いいから、きなさい。」・・・・・・・・」

美琴が御坂妹を連れて行き上条は一人になる。
複雑な家庭なのか？と適当に考えていた。

公園から少し離れた所に移動した美琴は御坂妹に問い掛けるように言った。

「実験は・・・あの計画は中止されたんじゃないの！？
何で・・・」

美琴の言葉に御坂妹は答える。

「計画というのが「絶対能力進化」（レベル6シフト）計画を指す
のなら予定通りに進行中ですよミサカは答えます。」

御坂妹の答えを聞いて美琴は驚愕の表情に染まる。

「ウソ・・・今も？」

「はい、先程第一〇〇二〇次実験が行われたばかりです。」

さっきまで実験を止められたと思っていたのにやり遂げたと思っていたのにそれが一気に崩されていく。

今もこの時もあの時のように「妹達」^{シスターズ}が殺されている、そう考えると吐き気が出てきた。

違う、と美琴は思った。

（私が殺したんだ。）

そして目の前にいる御坂妹も殺される、そう思うとさっきよりも吐き気が出てきた。

「お姉さま？ どうかされましたか？」

御坂妹にお姉さまと呼ばれその声その姿が美琴を追い詰めていく。

「やめてよ、その声で、その姿で、もう・・・私の前に現れないで・・・」

自分は何を言っているか分からなかった。

気付いた時には御坂妹はどこかへ立ち去っていた。

そして自分が何を言ったのかようやく気付き近くにあった街灯を殴る。

「最っ低だ。」

美琴は近くの公衆電話から実験の事について調べていた。

すると研究は中止されておらずまだ続いていることが分かった、そしてその引き継ぎ先の研究施設の数は一八三施設だった。

美琴は何がどうなっているか分からなかった。

そして気づいた、自分が相手にしているのがどれほど巨大な物なのかを。

この学園都市の中は衛星とカメラで常に監視されている。

あの非人道的な実験が野外で行われているのに学園都市の上層部は気づいている筈だ、なのに実験は続いている。

この意味は学園都市そのものが敵である事を示していた。

そして美琴は考えた、こんなくだらない実験を確実に止める方法を。そして次の日の夕方、ある事を決心する。

「おっすー、そっちも補習か？ビリビリ中学生。」

「ああ、アンタか。」

今は疲れているし残った体力も温存しときたいからビリビリは勘弁しといてやるわ。」

上条を追い払うようにしっしっとして手で追い払う。

上条は美琴の周りを見渡して言った。

「今日は妹は一緒じゃないのか？

昨日ジュース運んでもらったから礼とかしときたいんだけど。」

「アンタ、またあの子と会ったの！？」

「へ？いけなかった？」

美琴と上条の会話を遮るかのように空から声が聞こえた。

空には飛行船が飛んでおり「ツリーダイアグラム樹形図の設計者」の予言が発表される。その予言を聞いて美琴は言った。

「私、あの飛行船って嫌いなよね。」

「何でだよ？」

「機械が決めた政策に人間が従ってるからよ。」

上条と別れた美琴はバスに乗り第二三学区の宇宙開発エリアに向かっていた。

そしてある計画を実行する。

この宇宙開発エリアはツリーダイアグラム樹形図の設計者の情報を送受信している施設

がある。

研究施設が一八三もあれば一つ一つ破壊していつでも同じ様に引き継ぎされるだろう。

だが、美琴が調べた情報によればそもそもこの実験は樹形図ツリーダイアグラムの設計者を使って計画された物だった。

なら樹形図ツリーダイアグラムの設計者がその実験が続行不可能という結果を出せばどうなるだろう？

美琴の狙いはそこだった。

この学園都市の学者は樹形図ツリーダイアグラムの設計者の演算に絶対の信頼を寄せている。

それを逆手に取り樹形図ツリーダイアグラムの設計者に嘘の予言を言わせ実験を中止させるつもりなのだ。

美琴は警戒システムを電撃で誤作動を起こさせ中に侵入するがそこである異変に気付いた。

人の気配が全くないのだ

この施設は学園都市の頭脳と通信できる最重要機密施設だ。

それなのに心臓部の交信室までもものけのからだった。

デスクには埃がかなり溜まっており放棄されたのは昨日今日の話ではないと分かる。

とりあえず美琴はデータベースにハッキングするとそこである報告書を見て全ての希望が失われた。

「樹形図ツリーダイアグラムの設計者は正体不明の高熱源体の直撃を受け大破したものと判明。」

美琴は施設を出ていきふらふらと歩いていた。

樹形図ツリーダイアグラムの設計者が壊されたことで最後の一手が失われそして樹形図ツリーダイアグラムの設計者が無くなろうとも実験は計画通り続けられているという事だ。

ふと、美琴の横に地図の看板があった。

前に引き継ぎ先の施設の一つがこの辺りである事を思い出す。

「ハハ。」

迷う事はなかった。

美琴は施設を襲撃した。

自身の電撃をフルに使い施設を破壊していく。

（そうよ、まだ終わった訳じゃない。

全部潰してしまえばいい、いまあるものこれから引き継ぐものぜんぶ！！）

全てを破壊する覚悟を決めた時だった。

「お前、こんな所で何しているんだ。」

え？と美琴は聞き慣れた声が後ろから聞こえ振り返る。

そこに麻生恭介が立っていた。

第20話（後書き）

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第21話

美琴は思わぬ人物がこの研究所にいる事に驚きを隠せない。
麻生はそんな美琴を気にせず会話を続ける。

「お前の趣味はこんな施設を破壊する事なのか？」

いつもの美琴ならすぐにツツコミを返しているのだが今はそんな事をする余裕がない。

「あ、あんた、どうして此处に・・・」

「この近くを散歩してお前を見かけたから後をつけただけだ。」

適当に嘘をつきながら答える。

美琴は視界の端でモニターがある戦闘を映していた。

いや、映っているのは戦闘ではなく一方的な虐殺だった。

それは一方通行と「妹達」^{シスターズ}の一人が映っていた。

右肩を押えながら必死に逃げてゆく「妹達」^{シスターズ}の一人、反撃かそれと

も目眩ましなのか「妹達」^{シスターズ}の一人は電撃の槍を一方通行に向けて放つがそれも反射され放った電撃は自分の胸を貫いた。

一方通行は「妹達」^{シスターズ}の一人の血を流している右肩に指を入れる。

美琴はその光景を見てゆっくりとモニターに近づいて左手をモニターに伸ばす。

「やだ・・・や・・・やめ・・・」

次の瞬間、「妹達」^{シスターズ}の一人の身体中から血液が噴き出した。

おそらく血液のベクトルを逆向きにしたのだろうと麻生は考える。

「驚いたでしょ？あの子ね、私のクローンなの。」

美琴は独り言のように呟く。

まるで自分の過去の過ちを懺悔するかのように。

「私が幼い頃自分のDNAマップを提供したの。」

その時は筋ジストロフィーの病気とか治す為に必要とか言われてね、私はこの力が誰かを救えると思ったけど本当はそうじゃなかったの。

本当の目的は超電磁砲レールガンという超能力者（レベル5）を大量生産するつもりだったの。

でも、生まれた私のクローン・通称「妹達」シスターズは私の実力の1%も満たない、だから計画は永久凍結したはずなの。

でも……」

「絶対能力進化（レベル6シフト）という計画ができそれであるの「妹達」シスターズが利用された。」

麻生の口から実験の名称が出てきたことに美琴は言葉を失う。

「なんで知ってんのよ。」

「実は俺もその実験が行われている所を見てな、気になって調べてみたんだ。」

それを聞いて美琴は驚いていたがすぐに笑みを浮かべる。

「はは、知ってたんだ。」

それなら分かるでしょ？私がどれだけ酷い事をしたのか。」

あの「妹達」^{シスターズ}は誰一人として美琴を攻めなかった。
自分がDNAマップを提供しなければ生まれる事もなく殺される予定で生み出される事もなかった。
美琴と一人ではどうする事も出来ない。

「ふうん、それで？」

「え……」

「それでお前は俺に何を求めているんだ？
俺に責められてほしいのか？それとも助けてやる、とでも言えばいいのか？」

お前は俺を正義の味方か何かと間違っていないか？」

そう言って麻生は振り返り歩いていく。

美琴は心のどこかで麻生なら助けてくれると思っていた。

なんだかんだ言いつつも虚空爆破事件、幻想御手の事件の時は助けてくれた。
^{アクセラレータ}

だから一方通行に勝てなくても一緒に実験を止めるのを手伝ってくれると思っていた。

だが、麻生の答えは美琴が思っていたのと全くの別だった。

「まって……」

美琴は麻生を引き留める。

だが、麻生の足は止まらない。

「待ってよ……お願いだから、私を……あの子達を助けてあげて……」

美琴の願いに麻生は答えない。
美琴はそのまま膝が崩れ落ちてしまい麻生は一度も振り返る事なく施設から出て行った。

麻生がどこかへ行ってから美琴は鉄橋の上に立っていた。

「どうしてこんな事になっちゃったのかな。」

美琴はあの研究者の言葉を信じていた。

自分のDNAマップがあれば様々な病気を抱えている病人を助ける事が出来ると。

だがその願いが結果として二万人もの「妹達」シスターズもの人間を殺す事になった。

「私にできる、これ以上一人も犠牲者を出さない手段。

でも、それでも止まらなかつたらもう・・・」

あの時、レベルアップ幻想御手の事件の犯人である木山は別れ際に言った言葉を出す。

「君も私と同じ限りなく絶望に近い運命を背負っているという事だ。」

その言葉の意味がようやく分かった。
美琴はうつむきながら呟いた。

「たすけてよ……」

誰にも届かない叫びが美琴の口からこぼれていく
その時、ミャーという鳴き声を聞いて足元に優しいぬくもりを感じ
させる黒い毛皮の子猫が座っていた。
一体どこから来たネコなのだろう？と思った時だった。
カツという足音が聞こえた、美琴は顔を上げる

「何やってんだよ、おまえ。」

美琴の叫びを聞いて駆け付けた主人公ヒーローのように上条当麻がやってきた。

麻生は宇宙開発エリアから自分の寮に戻ってきていた。
そしてベットに寝転がり睡眠をとろうとした。
だが……

（私を……あの子達を助けてあげて……）

その言葉が麻生の頭から離れなかった。
美琴は助けてと麻生に言った、だが麻生はその救いに手を差し伸べ

なかった。

これが本当の自分なのだから、と自分に言い聞かせた。
なのに麻生は自分でも驚くほどにいらついていた。

（その生き方でいいのか？）

今度はあの猫の声が麻生の頭に響く。

（俺はあいつの様になりたかった。）

目を閉じて思い出す。

過去の自分と上条当麻を。

（俺はあいつになれない。

当たり前だ、俺は俺だ。

上条当麻のようになれる訳がない。）

麻生は立ち上がり携帯電話を電話帳を開けて電話をする。
数コールの後その人物が電話に出る。

「麻生さん、こんばんわ。」

その相手は初春飾利だ。

「麻生さんから電話を掛けてくるなんて珍しいですね。」

「夜分にすまないな。」

実は調べてほしい事があるんだ。」

絶対能力進化（レベル6シフト）のコードを初春に教えそのデータ

を送ってもらおう。

「わざわざすまないな。」

「いえ……」

「どうした？」

突然初春が黙ったので麻生は気になった。

「その麻生さん、少し変わったな」と思いまして。」

麻生はそれを聞いて哑然とする。

「前はこう、孤独感と言うかなんかそんな感じの声だったんですけど今の麻生さんなんかすっきりしているって言うかなんていうか……」

「俺は俺だ、どこも変わってないよ。」

麻生はそう言って電話を切った。

初春から送られてきたデータを確認する。

次の実験の開始時刻は八時三〇分、場所はとある列車の操車場だ。

今の時刻はちょうど八時三〇分、場所をGPSで確認すると麻生はいつもの服でその場所に向かう。

（もし死んでも俺は知らないからな。）

そう思いつつも麻生の足は歩きではなく走っていた。

上条は実験を止める為に一方通行と戦っていた。アクセラレータ

この実験は一方通行は最強である事を想定して計画された。アクセラレータ

だがもし一方通行がものすごく弱かったら？学園都市で最弱と呼ばれている無能力者（レベル0）に負けてしまったら計画は中止になるだろう。

そして今、上条は一方通行相手に押していた。アクセラレータ

最初は一方通行のベクトル操作に苦戦していた。

上条は気づいたのだ。

一方通行は本当に弱いことを。アクセラレータ

一方通行は全ての相手に負けた事がなかった、それもどんな攻撃も反射して全ての敵を一撃で倒してきた一方通行はケンカの方法なぞ知っている訳がなかった。アクセラレータ

普通の相手なら一方通行の敵ではない。アクセラレータ

だが、上条の右手、幻想殺しは超能力・魔術問わず、あらゆる異能の力を打ち消す。イマジンプレイカー

一方通行のベクトル操作も例外ではない。アクセラレータ

「面白エ、何なンだよその右手は！」

小刻みな右の拳を何度も顔面に浴びた一方通行は、がむしやりに手を伸ばしながら叫ぶ。アクセラレータ

それもとやすくかわされ上条は右の拳を作り一方通行の顔面へと突き刺さる。アクセラレータ

今まであらゆる攻撃を反射してきた一方通行には目の前の攻撃が「危ない」と分かっているにもそれを「避けよう」という動きに結びつかない。アクセラレータ

ただがむしやらに両手を振って追いかけるその姿は、大人に軽くあしらわれている小さな子供にしか見えない。

アクセラレータ その事実是一方通行が一番分かってるからこそ耐えられない。学園都市最強のプライドがギシギシと音をたて崩れていく。

「クソ、クソオ！クソオオオオオオ！！！」

アクセラレータ 一方通行は足元の運動エネルギーを最適化させ一気に接近する。だが……

「何だ、ちくしょう。」

何だってオマエにはただの一発も当たンねエンだよ、ちくしょう！！！」

速度を得た所で狙いが先読みできれば簡単に避ける事が出来る。勝負は決していた。

上条が小刻みに与えたダメージは今まさに蓄積していたうたれ弱い学園都市最強の能力者の足を殺しつつある。

アクセラレータ かくん、と一方通行のヒザから力が抜けた瞬間、ゴッ！！それまでにない上条の「本気」の拳が顔面に突き刺さる。

シスターズ 「妹達だつてさ、精一杯生きてきたんだぞ。」

全力を振り絞って必死に生きて、精一杯努力してきた人間が……何だって、テメエみてえな人間の食い物にされなくっちゃなんねえんだよ！！！」

上条の言葉を聞いてアクセラレータ 一方通行は思う。

（生きてる？何言ってんだ？）

この時、無風状態だったこの列車の操車場に風が吹いた。

（アイツらは人形だろ、そう言ってたじゃねエか。
力がある・・・コイツを黙らせる力。）

一方通行はその風を感じ取るとかのように左手を上げる。

アクセラレータ

（いや、理もルールも全てを支配する・・・絶対的な力がッ！！）

その瞬間、轟！！と音を立てて巨大な大気の渦が一方通行の中心に直径数十メートルに及ぶ巨大な破壊の渦が歓喜の産声を上げた。

アクセラレータ

「くかきけこかきくけききこかきくこくけけけきくかくきくこくくけくかきくこくけくきくきこきかッ！！！！！！！！」

その暴風に上条は糸も簡単に飛ばされ折れた風力発電のプロペラの支柱に勢いよくゴン！！！！と音を立てぶつかりそのまま地面にうつ伏せに倒れ動かない。

その様子を見ていた、美琴は信じられないような表情をしていた。

「空気、風、大気、あんじゃないか目の前のクソをブチ殺すタマがここに。」

この手で大気に流れる風の「向き」を掴み取れば、世界中に流れる風の動き全てを手中に収める事ができれば世界を滅ぼす事だって可能。

学園都市最強？絶対能力（レベル6）？そんなモンはもオいらね

エ！

アクセラレータ

一方通行を止められるものなンぞこの世のどこにも存在しねエ！

」

自分の開いている左手を月を掴むかのように力強く握りしめる。

「世界はこの手の中にある!!」

ゆっくりと立ち上がると良い事を思いついたのか悪魔のような笑みを浮かべる。

「空気の圧縮、圧縮ねエ、イイゼ愉快的事を思いついた。

なんだよそのザマはア!! 立てよ、最弱ッ!!

オマエにやまだまだ付き合ってもらわなきゃ割に合わねんだっつの!!」

学園都市の風が^{アクセラレータ}一方通行の頭上に集まる。

その時だった。

^{アクセラレータ}「一方通行!!!!」

その後ろで美琴が^{レールガン}超電磁砲の構えをとっていた。

「やめろ・・・御坂・・・」

声が聞こえた。

死んでしまったと思った上条の声だった。

美琴はそれを聞いて一安心する。

上条はあの鉄橋で言った。

「何一つ失う事なくみんなで笑って帰るってのが「俺」の夢だ。」

結局、自分のせいで上条の夢は叶いそうにない。

誰もが笑って誰もが望む、最高に幸福な終わり方はないのか、誰一人欠ける事もなく、何一つ失うものもなく、みんなで笑ってみんなで帰るような、そんな結末はないのか、そうぼんやりと美琴は考えた。

その考えを振り払うように超電磁砲レールガンを構え直そうとした時だった。
アクセラレータ

一方通行の頭上にある事が起きていた。

高電離気体が出来ていた。

周囲の空気中の「原子」を「陽イオン」と「電子」へ強引に分解し、
高電離気体へと変貌させてしまう。

美琴が電撃を用いて高電離気体を元に戻したところで一方通行はす
ぐに新しい高電離気体を作るだろう。

高電離気体を防ぐには風を操る必要がある。

美琴は電撃を操る事ができても風は操れない。

どうすればいい？と美琴は考えそして思いついた。

だが、これは美琴が実行する事ができない。

なぜならこの戦いに超能力者（レベル5）である美琴が関われば実験を中止させる事が出来ないかもしれないからだ。

御坂美琴が関わってならないのならこれは御坂妹にしかできない仕事だ。

美琴は振り返る。

そこにはうつ伏せに倒れている御坂妹がいた。

美琴は駆けより御坂妹に言った。

「お願い、起きて。」

無理を言っているのは分かっている、自分がどれだけひどい事を言っているのかも分かっている。

だけど、一度でいいから起きて!!

アンタにやって欲しい事があるの、ううん、アンタにしかできない事があるの!」

誰一人欠ける事なく、何も失うものなく、みんな笑って、みんなで帰るためには。

「たった一つでいい、私の願いを聞いて！

私にはきつと、みんなを守れない。

どれだけがいてもどれだけあがいても、絶対に守れない！

だから、お願いだから！！

アンタの力でアイツの夢を守ってあげて！」

御坂妹は断続的に途切れる意識の中で確かにお姉様オリジナルの叫びを聞いた。御坂妹は嫌だな、と思ってしまった。

こんなちっぽけな命が失われたくらいで哀しむ人が出てくる事を知ってしまったらもう死ぬ事などできなかった。

守るべきものを見つけ、そして守る為に御坂妹は四肢に力を込める。

「その言葉の意味は分かりかねますが、何故だか、その言葉はとても響きました、とミサカは率直な感想を述べます。」

御坂妹は美琴の右手を握りしめる。

そして握りしめた手にもう一つ手が重ねられる。

「俺もその言葉、結構響いたぞ。」

もう一人の主人公ヒーロー、麻生恭介がその言葉に応えるかのように駆け付けた。

第21話（後書き）

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第22話

麻生が此処にいる事に美琴は驚き言葉が出ない。

御坂妹は初めて麻生を見たので誰だか分からないので麻生に問い掛ける。

「貴方は誰ですか、とミサカはこの誰だが知らない一般人に問い掛けます。」

「通りすがりの一般人Aだ。」

「ではこんな所になぜ一般人Aがいるのですか、とミサカは再三貴方に問い掛けます。」

「借りを返しに来た。」

麻生がそう言うのと美琴はえ？と言葉が洩れる。

「お前のおかげで答えを、生き方を見つけられたからな。
その借りを返しに来たんだ。」

麻生は美琴と御坂妹の手に重ねていた手を離し、アクセラレータ一方通行の所まで歩いていく。

美琴は麻生が一方通行に戦いを挑もうとしている事に気づき止めに入る。

「待ちなさいよ！！いくらあんたでもあの一方通行には勝てない！！」
アクセラレータ

「そんなのやってみなくちゃ分からない。

まあお前達にも何か考えがあるようだけど此処は俺に譲ってくれ。」

一方通行は後ろで自分に聞き覚えのない声を聞いて視線だけを後ろに向ける。

その瞬間、一方通行の演算式で作り上げていた高電離気体が一気にその形が崩れ消滅する。

「な、に……」

一方通行は驚きというより原因が分からなかった。

後ろに視線を向けたが演算式に狂いはなかった。

それなのに高電離気体は形が崩れ消滅してしまった。

今度は視線ではなく身体全体で後ろに振り向くとそこに麻生恭介が少しだけ笑みを浮かべていた。

「テメエの仕業か。」

一方通行がその言葉を言うと同時に麻生の姿が視界から消える。

一瞬驚いたが一方通行の後ろで砂利を踏む音が聞こえたので振り向くと麻生は上条の側に立っていた。

（空間移動の能力者か？）

一方通行はそう考えるがそうだとするとあの高電離気体が消滅した原因にならない。

だが、麻生は確かに一方通行の視界から消えたのだ。こいつが原因じゃないのか？と麻生を睨みながら考える。

「おい、なに寝ている。
さっさと起きろ。」

麻生は乱暴に上条の腹を蹴るとごほごほ！！と上条が咳き込む。
そして麻生が近くににいる事が分かる。

「よ、よう、来てたのか。」

「ついさっき来たばかりだけどな。」

麻生は上条の胸ぐらを掴むとまた一方通行の視界から消える。
アクセラレータ

一方通行は驚く事無くゆっくりと後ろを見ると美琴達のいる所に立
っていた。

そしてその側に上条を降ろすと言わず一方通行アクセラレータに向かい合う。

「さっきの三下を連れて空間移動したって事は大能力者（レベル4）
って所か。」

両手を広げ再び風を操り高電離気体プラズマを作り出す。

一度演算式の組み上げた成果なのかさっきよりも早く高電離気体プラズマ
作り上げる。

一方通行はどこか計算が間違っていたのだと考え次は完璧にしてみ
せると思った時だった。

「そんな危険な物を黙って作らせると思ったか？」

麻生の言葉と同時に一方通行の頭上にあつた高電離気体プラズマが消滅した。
アクセラレータ
一方通行はさっきよりも強く麻生を睨みつける。

「デメエ、一体何の能力だア。」

「それを教えると思ったか？」

麻生の返答に一方通行は悪魔のような笑みを浮かべる。

「ふーん、いいねその態度。」

お前をぶち殺したくなってきたじゃねエか！！」

一方通行は上条を吹き飛ばしたのと同じくらいの風を操り麻生にぶつける。

すると麻生の周りで一方通行が操っている暴風と同じ暴風が吹き荒れる。

暴風と暴風がぶつかりコンテナなどを吹き飛ばしていく。

「さて、九〇〇〇もの「妹達」^{シスターズ}を助けるのは面倒だからな。
ここでお前を倒して実験を中止させる。」

そして一方通行の視界から麻生が消える。

麻生は一方通行の真後ろに移動していた。

一方通行は麻生の能力を空間移動と考えたがそれは違う。

空間移動で麻生が空間移動できてもさっきの上条と一緒に空間移動する事が出来ない。

なぜなら、上条の右手がその能力を打ち消すからだ。

だから麻生は足に風の魔術の術式を作り上げ移動力を格段に上げたのだ。

これは麻生全体に付加されているのではなく足の部分だけに付加されているので上条の右手が直接足に触らない限りは打ち消す事は無い、だから上条を掴みながら移動する事が出来たのだ。

麻生の右手にはナイフを持っていてそれを一方通行に向けて振りかざす。

だが、一方通行は麻生が視界から消えてもうろたえる事はない。

なぜなら彼はデフォルトで全身に反射の膜が張ってあるからだ。

ナイフが一方通行に触れた瞬間、ナイフが尽く砕け散る。

麻生はそれを確認すると後ろに下がる。

「どんなに空間移動してもそんなちんけな武器じゃあこのオレには勝てねエぞ。」

一方通行は魔術の事は知らないので麻生は空間移動で移動しているのだと思っている。

だが、空間移動だろうと風の術式による高速移動だろうと一方通行には関係ない。

突然、一方通行の地面が爆発する。

麻生は地面の成分を変換させ一方通行の周りの地面を爆発させたのだ。

それをくらっても一方通行は傷一つなく立っている。

「もう終わりか？」

ンなら今度はこっちの番だな。」

一方通行が地面を優しく蹴るとそのベクトルを変換させ巨大な衝撃波に変える。

麻生は横に飛ぶことでそれをかわすが飛んだ方に何本のレールが飛んで来たのだ。

「オラオラ！！」

オレの楽しみを奪ったんだからよオ、ちつとは楽しませてくれやア！！！！」

麻生は飛んでくるレールを避ける動きをしない、むしろ正面から立

ちふさがる。

自分に飛んでくるレールを正面から受け止める。

その衝撃で麻生の両足の地面が軽く吹き飛ぶ。

麻生はそのレールを片手で振り回し飛んでくるレールを全て吹き飛ばす。

「お前、面白れェ能力だな。」

その光景を見ていた一方通行は余裕の表情をしている。
アクセラレータ

一方通行の反射の壁を打ち破るのは上条の右手だけだ、その上条は今
は動く事が出来ない。
アクセラレータ

一方通行に恐れるモノは何もないのだ。
アクセラレータ

麻生は高速移動はせずに走って一方通行に向かって行く。
アクセラレータ

左手を握りしめ一方通行の顔面目がけて拳を振う。
アクセラレータ

それを見た一方通行はさらに笑みを浮かべる。

（最後の手段がこれかよ。

少子抜けだな、さてどうやってコイツを）

その先を考えようとしたが出来なかった。

なぜなら麻生の拳が一方通行の反射の壁を越えてきたからだ。
アクセラレータ

麻生に殴られ身体が吹き飛び地面に転がる。
アクセラレータ

訳が分からない、一方通行はそう思いながら立ち上がる。

（どうなってやがる！？ あいつもさっきの奴と同じ能力を持ってや
がンのかぁ！？）

先程の余裕の表情から一転、驚愕の表情に変わる。

「なぜ反射の壁を越えてきたか、それが分からないのだろうか？

なら、教えてやる。

俺の能力を使って拳の周りだけ一時的に物理的法則を捻じ曲げただけだ。」

「なんだと……」

アクセラレータ

一方通行は麻生の言っている事が理解できなかった。

この星が誕生してから物理的法則などは全て決まっている、それを捻じ曲げる事など不可能だ。

だが麻生の能力に常識などと言った物は全く通用しない。

「俺の能力を言っていないかったな。

俺の能力は「星」^{デラ}」。

この星の万物全てに干渉し、この星にある法則などを自由自在に変換できる。

だが、この能力はまだ完璧に操れていない。

せいぜい二割から三割くらいだから物理的法則も一時的、正確には三秒くらいしか歪められないが三秒あればお前の身体に十回は殴る事が出来る。」

アクセラレータ

そんな能力など一方通行は聞いた事がない。

もしそんな能力があればレベル6どころのレベルではない。

「それに……」

アクセラレータ

麻生はめんどくさそうに一方通行に説明する。

「お前の反射の壁は絶対じゃない。

お前は無意識の内にあらゆるベクトルに有害と無害のフィルタに分けている。

全てを反射していたらお前は酸素を吸う事も出来ないからな。
だからこうやって……」

瞬間、一方通行アクセラレータの身体が後ろに数十メートルくらい吹き飛ぶ。

「反射の壁を越えてお前を倒す事も出来る。」

麻生はたった二回の攻撃で一方通行アクセラレータの反射の法則を見切りその対策をその場で作り上げたのだ。

一方通行は自分が完全に遊ばれている事に気づき苛立つ。

「なめてンじゃねエぞ！！！！雑魚がああああ！！！！」

勢いよく立ち上がりそのまま足元の運動エネルギーを変換させ一気に距離を詰める。

そして両手を前に突きだして麻生の身体に触れようとする、いくら反射の原理を掴んでもそれを実行させる前に殺せば問題はない。

一方通行の手に麻生の身体の一部でも触れた瞬間、血管に流れている血液の向きを逆流させられる。

麻生は右手で一方通行アクセラレータの左手を受け止める。

一方通行は笑みを浮かべるが突如自分が構築していた演算式が消える。

突然何が起こったのか分からない一方通行アクセラレータだが再び麻生の拳が一方通行アクセラレータの顔面に突き刺さる。

「俺の血液の向きを変えるつもりだったのだろうがそれは俺の身体に直接干渉するという事だ。」

俺は五感や俺の身体に直接干渉してくる能力は俺の了承がなければ無力化されるようになっていた。
「

地面に仰向けに倒れている一方通行に言い聞かせる。
アクセラレータ

一方通行はふらふらと立ち上がる。

「さあ立てよ、今度はお前のその能力、小細工なしで正面から突破してやるよ。」

左手で拳を作り突き出しながら麻生は言う。

その言葉が一方通行を限界までいらつかせた。

「俺の能力を正面から突破するだア？」

調子に乗るんじゃないエぞ！！！！！」

最大まで足元の運動エネルギーを変換させ一瞬で距離を詰め両手を麻生の顔面目にかけて突き出すが麻生は簡単にかわすと左の拳を一方通行の顔面に繰り出す。
ラレータ

麻生と一方通行の間で凄まじい衝撃が生まれる。
アクセラレータ

一方通行の反射は相手が強い攻撃すればするほど強く反射される。

二人の周りの地面が少しずつ抉れていく、それほどまでに麻生の拳の衝撃がうかがえる。

なのに麻生の身体は吹き飛ぶことなくそのまま拳を前に突きだしている。

（反射は適用されている、それならどうしてあいつの身体は吹き飛ばねェンだよ！？）

すると一方通行の耳に骨が軋む音や折れる音が聞こえた。
アクセラレータ

他の誰でもない麻生の身体中の骨が悲鳴をあげているのだ。

地面が抉れるほどの衝撃を受ければ指は折れ、腕も折れ、身体の骨は軋み、やがてひびが入るだろう。

それにその衝撃は骨を通り越して臓器まで伝わる。

それほどのダメージを受けているのに麻生の身体は吹き飛ばず前に進もうとしている。

麻生は身体が後ろに吹き飛ばベクトルをただ前に変換しているだけで、骨などは能力の治癒で治療させ続けている。

それでも痛みが無くなる訳ではない、想像絶する痛みの中、麻生は拳を前に突きだしている。

そして少しずつ、だが確実に前に進んでいた。

一方通行は自分の反射の壁を補強するかのように全演算式を反射の壁の補強に回す。

だが、それでも麻生の拳は止まらない。

「俺はあいつのように綺麗事は言わない。」

一方通行ではなく自分に言い聞かせるように呟く。

「だが、俺は決めたんだ。」

俺に助けを求める人がいるのなら俺は全力でその人を助けるってな。

そして美琴は俺に助けを求めていた、だからお前を倒して計画を破綻にしてあいつを救うんだ！！」

麻生の拳は一方通行の反射の壁を突き破り顔面に突き刺さりそのまま後ろのコンテナまで吹き飛んで行った。

次の日の朝、麻生はリンゴを片手に持ちながら病院の中にいた。
入院している上条にお見舞い（といってもリンゴの皮を剥くだけだ
が）をしにきたのだ。

上条の病室の中から美琴が出ていた。

「あんたもお見舞い？」

「そんなところだ。」

「なら、あいつは麻酔で寝てるからあまり意味ないわよ。」

それを聞いた麻生はリンゴをじっと見つめると美琴に放物線を描く
ように投げる。

「それならお前が食べてくれ。」

リンゴを美琴に渡すとそのまま寮に帰ろうとする。

だが、美琴が麻生を呼び止める。

「ま、待ちなさいよ！！」

わ、わた、私は・・・まだ・・・あんたにお礼を・・・いつてな・
い。」

後半からは声が小さくなりよく聞こえなかったがとりあえずお礼が
言いたいのだろうと麻生は適当に考え頭をかきながら言った。

「そこまで気にする事じゃない。」

俺は俺に助けを求める人は絶対に助けると決めてそれを実行した
に過ぎない。

俺は自分の為に戦ったのだからな。」

麻生はそう言って病院を後にした。
その数日後、上条が退院して自分の部屋に戻った。
すると、麻生が珍しく上条の部屋を訪ねてきた。
そして開口一番に言った。

「ご飯を作ってやるよ。」

は？と上条は呆けてしまったがそれに構わず部屋に入り台所借りるぞ、と適当に言って調理を始める。
ようやく正気に戻った上条はいきなりの展開についていけないようだ。

「一体どうしたんだ、何があったんだ!？」

「うるさいな、今日は作りたい気分だったからついでに作ってやろうと思っただけだ。」

ぶつぶつ言いながら買ってきた食材をだし調理にかかる。
インデックスは麻生の料理を楽しんでいるのかすでに机に陣取りフォークとナイフを持ってスタンバイしていた。

「もしかして一生来ないと思っていたデレ期なのか？」

ピタッと麻生の手が止まる。

そして何も言わず部屋を出ていこうする。

「申し訳ございません、恭介様!!!」

何とぞ、踏みと止まってください!!! 私達においしい食事を作

ってください!!!!」

目にも止まらぬ速さで麻生の前で土下座する。

麻生は大きくため息を吐くと台所に引き返していく。

調理を開始していると何だかおいしいそうな匂いがするぞ!!!!とど

こかの聞き覚えのある声が廊下から聞こえた。

おそらく舞夏だろうと考えた麻生はもう一人分も作る準備を開始した。

第22話（後書き）

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第23話（前書き）

自分の書いている小説を見直して思いました。

これ超電磁砲の話少なくネエ？基本が禁書になっている事に今気づいた。

てなわけで今回は御使堕し編が始まるまでの間の数日を使ってオリジナル話を作っていきますw

基本超電磁砲の話にできたらなあ〜と思っています。

第23話

学園都市はある噂で持ちきりだった。

それは学園都市第一位である一方通行アクセラレータが二人の無能力（レベル0）に負けたという噂だ。

学生達の間ではその噂が流行り今ではどこかの無能力者（レベル0）が一方通行アクセラレータに勝ったのは自分だと、と言い始める学生が出始めている。

そんな噂など気にせずにも通り街中を散歩している、麻生恭介。正直、彼は噂の事などどうでもよかった、麻生は自分の力で助けられる人を助けていくと決めたから一方通行アクセラレータと戦っただけだ。

炎天下の日差しの中歩いていて少し休憩をしようと考えていた時だった。

「麻生さ〜〜〜〜ん！！」

自分の名前を呼ばれたので声のした方に視線を向ける。

そこには喫茶店の野外テーブルに座っている佐天がこちらに手を振っていた。

麻生は呼ばれたので佐天に近づく。

「こんにちわ、麻生さん。」

何かしていたのですか？」

「ただの散歩だ。」

「こんな炎天下の中でよく散歩なんて出来ますね。」

「これ以外にすることがなくて暇なんだよ。」

佐天と会話しているとテーブルの上にプリントや教科書が並べられているのに気が付く。

その一枚のプリントを拾う、数学の問題が書かれていた。

「それは夏休みの宿題です。

でも、なかなか進まなくて気分転換を兼ねて外でやっているんですけど……」

あはは、と苦笑いを浮かべながら答える。

他のプリントを見た限りあまり進んではない事が確認できた。

ちなみに麻生は夏休みの宿題が配布されてからその日に全て終わらせた。

「そうだ、麻生さんは高校生ですよね？

だったらこの宿題を手伝ってくれませんか？」

神社にお参りするかのように手を合わせてお願いしてくる。

麻生は小さくため息を吐いて佐天の相席に座り、店員に水を注文する。

「答えは教えないが解き方くらいは教えてやるよ。」

その言葉を聞いて満面の笑みを浮かべる、佐天。

こうして麻生先生の勉強会が始まった。

「つまり、この教科書に載っている公式。

これをこの数式に当てはめる、すると答えが出てくる。」

麻生の説明にふむふむと頷きながら問題と睨めっこしている。

「だが、この数式を解く公式はもう一つあってそれを間違えて入れると答えがまた違ってくる。」

これはよくテストとかに引っ掛けとして使われるから覚えておいた方がいい。

とにかくだ、まずはこの二つの公式を覚えてその違いを把握してどの数式に当てはめるのかを見極めないと解けない。」

「むむむ、結構難しいですね。」

「耳で聞いていると難しそうに聞こえるが実際にやってみると案外簡単だ。」

まずはこの二つの違いから教えてるぞ。」

佐天に分かるように丁寧にかつ分かりやすいように説明をする。

佐天も違いに分かったのか中盤辺りから一人で問題を解き始めている。

ふと、佐天の手が止まる。

「その……ありがとうございます。」

「うん？ 礼なら結構だ。」

「この宿題を手伝ってくれているのもありますけど私が幻想御手レベルアップで昏睡した時、私や他の人を目覚めさせてくれたのは麻生さんなんですよね、初春から聞きました。」

お礼を言おうとしても麻生さんになかなか会えなかったので少し

遅れちゃいましたけど。」

「それこそ気にするな。」

俺は俺の為に戦っただけだ。」

「それでも私は助けてもらいましたから。」

そして二人の間に沈黙が流れる。

佐天のシャーペンで答えを書く音だけが聞こえる。

「佐天さんに麻生さんじゃないですか。」

二人の耳に聞き覚えのある声が聞こえ顔を上げる。

そこに初春と白井がこちらに歩いて来ていた。

「何しているのですの？」

「見て通り佐天に数学を教えているんだよ。」

「佐天さんが夏休みの宿題を自分からするなんて珍しい事もあるんですね。」

もしかして熱でもありますか？」

本気で心配しているのか佐天の額と自分の額に手を当てて熱を測る。

「あのね、初春。」

いくら私でも夏休みの宿題くらいちゃんとするわよ。

それに明日は補習もあるから予習しとかないとまずいのよ！」

そう言って両手で初春のスカートを捲り上げる。

コーヒーを飲んでいた学生はスカートの中のパンツを見てコーヒーを吹き出し、通りがかった学生は顔を赤くしながらもしっかりとパンツを見る。

初春はすぐさま両手でスカートを押えつける。

「佐天さん!!!」

初春はチラッと麻生の方を見るが特に気にする様子もなく水を飲んでいる。

その全く興味も抱いてくれない所を見てちよっぴりテンションが下がる、初春。

白井は何をしようもないことを、と言って呆れている（自分が美琴にしている事とに比べると佐天のスカート捲りが可愛く見えるのだが）。

すると白井の表情が風紀委員^{ジャッジメント}の表情に変わる。

「ちょうどいいですわ。」

お二人の耳にお入れしたい事がありますの。」

白井の雰囲気を感じ取ったのか初春も表情を引き締め、パソコンを鞆の中から取り出し起動させる。

「最近、能力者による無能力者狩りがこの学園都市で頻繁に起こっています。」

初春の言葉を聞いて佐天の驚いている。

「この第七学区以外でもよく行われているようです。」

何人かの能力者達が集まり無能力者をゲーム感覚で襲っているのですの。」

「能力をそんな事に使うなんて・・・」

佐天はこの学園都市の能力に憧れてこの学園都市に入ってきた。
能力に人一倍憧れを持っている佐天にとってショックな事なのだろう。

「ジャッジメント風紀委員は何か対策をしているのか？」

「とりあえず時間が許す限りは裏路地などカメラの死角となっている所を見まわるようにしています。」

ですが、被害報告は減るところか増える一方で・・・」

「ですので佐天さんなどの無能力者にこうやって注意を呼び掛けているのですの。」

「確かにレベル0の私が襲われたら大変だしね。」

以前の佐天なら白井の言葉に苛立ちを覚えていたのだろうが幻想御手レベルアップの一件で吹っ切れたらしく自分が無能力者であることを受け入れている。

「くれぐれも裏路地などには入らない様にする事ともし能力者が襲ってきたらすぐに連絡を入れてください。」

「なあ、一つ聞きたい事がある。」

「なんですか？」

「能力者達はどうかやって無能力者と能力者を判断しているんだ。」

「どういふことですか？」

佐天や初春は麻生が言っている事が分からないようだ。

麻生は説明を続ける。

「仮にあの御坂美琴が制服を着ているのではなく私服を着ていると
考えてくれ。

制服なら常盤台ということが分かるから無能力者でないことがす
ぐに分かる。

だが、今は夏休み。

制服を着ている人など少なく私服の学生が多くなるはずだ。

さっき言ったように美琴が私服で歩いていて能力者が美琴を無能
力者だと勘違いして襲いだす。

すると、どうなると思う？」

「あっ！」

初春は麻生が言いたい事が分かったようで白井もそこに気付いたよ
うだ。

佐天だけは分かっていないので麻生は分かりやすく説明する。

「もし無能力者だと思って襲いだしてもその対象者が自分より能力
が上だったら返り討ちに会う筈だ。

だが、さっきの二人の説明を聞いた時そう言った失敗をした報告
は入っていないようだった。

つまり敵は何らかの方法で能力者と無能力者を判断している筈だ。

」

麻生の推測に白井と初春は頷きながら納得している。

「そこまで考えが及びませんでしたの。」

犯人がどうやって能力者と無能力者を判断しているか、それについても調べないと駄目ですわね。」

「凄いです、麻生さん!!」

さっきの説明を聞いただけでこれだけの名推理をするなんて!!」

「さすがにどうやって判断しているまでは分からないがな。」

「いえ、麻生さんのおかげで少しだけ活路が見えてきました。

判断方法を知る事が出来れば捜査の効率が上がりますわ。
貴重な意見をありがとうございます。」

それでは、と言って白井は立ち去っていき初春も急いでパソコンを鞆に入れありがとうございます、と元気よく挨拶して白井の後を追う。

そして麻生と佐天の二人になる。

「あの・・・麻生さん。」

「どうした?」

「突然ですけど携帯のアドレスと電話番号を教えてくださいませんか?」

「理由を聞かせてくれ。」

麻生がそう言うと佐天は不安そうな顔を浮かべる。

「さっきの話を聞いてちょっと怖くなってしまった。」

初春は麻生さんとはとても強いって言ってたから何かあったら助けてもらおうかと思って・・・駄目ですか？」

断られるのが怖いのかさつきよりも不安そうな顔をする。

麻生は携帯を取り出す。

「分かった。

だが、あまり期待するなよ。

俺だって困ったらすぐに駆け付けるスーパーマンではないからな。」

「それでもいいです！！

ありがとうございます！！」

本当に嬉しそうな顔をしてアドレスと番号を交換する。
なぜか佐天はそのまま携帯をギュッと大事に握りしめている。

「さて、いい休憩にもなったし続きを始めるか。」

「はい！！！」

元気のいい返事で勉強を再開する。

そしてそれらがほとんど終わる頃には日が傾いていた。

「日も落ちてきたな。

そろそろ帰った方がいい、初春達が言っていた事もあるしな。」

「そうですね。

早く帰った方が安全ですね。」

佐天はテーブルの上に散らばっているプリントと教科書をまとめ鞆の中に入れる。

そして立ち上がり麻生に向かって頭を下げる。

「今日は本当にありがとうございました。」

「俺はただやり方を教えたただけだ。」

最後の方は一人で問題も解けていたし大丈夫だろ。」

「麻生さんはこれから何か？」

「ああ、ちよつと野暮用だ。」

悪いが此処でお別れだ。」

「分かりました。」

それじゃあまた今度会いましょう。」

振り返って歩き少し進んでから振り返って麻生に向かって手を振る。麻生も片手で軽く振り返してそれに満足したのか走って帰っていく。さて、と麻生が呟き近くの裏路地に入る。

少しだけ歩いていると少し拓けた所に出ると麻生が通ってきた道と前の道から前後二人ずつの男が現れる。

裏路地の不良とは違い服装もきちんと整えてあり髪もセットしてある所を見ると不良ではない事がすぐにわかる。

「ごめんね、俺達無能力者狩りをしているだ。」

どれだけ無能力者を病院送りにさせたかで点数をつけて競っているんだけど最近風紀委員ジャッジメントのせいで無能力者を狩れてないから俺達は他のメンバーに比べて点数が低いんだよ。

だから、お前にはちよつくらカモになってもらうぜ。」

麻生の目の前にいる黒髪の男が楽しそうに話し始める。
どうやらカモという言葉が面白かったのか他の三人も笑っている。
麻生は大きいため息を吐く。

「くだらないな。」

「はあ？」

「くだらない、と言ったんだ。」

最近のガキはこんな屑が多いのか、こりゃあ教師達の頭痛の種だな。」

「調子に乗るんじゃないぞ、無能力者が！！！」

バチバチと青白い黒髪男の周りに火花を散らしている。

そして電撃の槍が麻生に向かって放たれてそれが麻生に直撃し埃が舞う。

「おい、お前一人で倒したら点数はお前だけはあるじゃないか。」

「悪い、能力一つ開発できない屑に偉そうに言われて腹が立ちました。」

「でも、こいつも馬鹿だよな。」

こりゃあ入院確定だな。」

四人の男達は心底楽しそうに笑う。

「何がそんなに楽しんだ？」

だが、埃のカーテンの中から声が聞こえ一斉に笑い声がなくなる。
カーテンが晴れると傷一つなく麻生が立っていた。

「な、何でだ!？」

俺の最高電力が当たった筈だぞ!!」

「あれで最高か、となるとレベル3ってところか。

こっちは超電磁砲レベルガンの電撃の槍を何度も受けているんだ。

この程度空間の壁も使うまでもない。」

麻生はすぐさま後ろに振り返り啞然としている男の顔面に加減なく拳が突き刺さる。

武術の達人が見たら足の踏み込み、身体の向きや拳の握り方までが全く無駄がなくその一撃はとてつもない威力である事が分かる。

殴られた男は後ろの壁までノーバウンドでぶつかる。

そして啞然としていた他の三人がようやく動き出すがすぐ隣にいた男のみぞに掌底を突き刺し沈める。

電撃使いの隣にいる男の能力は発火能力らしくサッカーボールの大きさまで火の玉が大きくなりそれを麻生に向けて放つが麻生は横に飛んでかわしすぐ横にある壁を右足で蹴り一気に距離を詰める。

男はもう一度火の玉を作ろうとするがそれよりも早く麻生の左足が男の脇腹を蹴りつけ地面に勢いよく転がり壁にぶつかってようやく止まる。

黒髪の男が啞然としている間に他の三人がやられてしまいようやく自分の状況に気づく。

「く、くるな・・・お願いだ、見逃してくれ・・・」

自分では麻生に勝てないと分かったのか涙を溜めながら麻生に命乞

いをしてくる。」

「お前は自分が襲った無能力者が同じ事を言った時どうした？」

男は何も言えない。

自分は助けてと言われても容赦なく殴る、蹴るの暴行を楽しく行っていたからだ。

「それが答えだ。」

麻生は左手で男の顎を打ち上げると一回転して遠心力が掛かった左足で男の腹を貫くかのように蹴りが突き刺さる。

男の身体がくの字に折れボキボキと骨が折れる音がしてそのまま壁まで吹き飛ぶ。

呻き声を上げる男達を無視して路地から出ていく。

（これは俺が思っている以上に深刻な事態かもしれない。）

第23話（後書き）

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

第24話（前書き）

今回短いです。

第24話

「ふふふん♪」

「どうしたの、ルイコ？
ものすごく機嫌がいいね。」

佐天とその同級生は学校の補習が終わり帰りにどこかに寄るか話をしている時だった。

同級生は隣で上機嫌で鼻歌を歌っている佐天に気が付いた。

「そういえば補習の時も先生、驚いてたね。」

先生が出題した問題を全部ルイコが解いちゃうだもん、私達も驚いたよね。」

「もしかして珍しく勉強でもしたの？」

「ふふん、まあそんな所♪」

先日、麻生に勉強を教えて貰ったおかげで今日の補習の問題を難なく解く事が出来た。

佐天はまた麻生にお礼を言わなければ、と思った時だ。

「ルイコ、もしかして彼氏とかできた？」

「ぶうう!!!!!!」

な、ななな、なに言ってるのよ!!」

突然の質問に思わず動揺してしまう。

その反応を見た同級生達はまさか本当に出来たのか？と真剣に話し合う。

「そんなんじゃないよ。」

佐天の答えに一同はえ？と聞き返す。

佐天は麻生の姿を思い浮かべながら答える。

「その人とはあまり話をした回数も少くないし、そんなに親しくもないよ。」

私はあの人に憧れてると思う。」

「憧れ？」

「うん、その人は私と3、4歳しか歳が離れていないのに凄く大人で、頭も良くて、最初初めて会った時は正直とても冷たい印象を持っていたの。」

でも、昨日久しぶりに会った時その冷たい雰囲気が無くなって前よりも何だか暖かくて、私と同じ無能力者なのにとっても強くて・・・」

麻生の事を思い浮かべ気づいたらそんな事を話していると同級生達は佐天の顔をじーと見ていた。
その視線に気づいた佐天は首を傾げる。

「どうしたの？」

「ルイコ、そりゃあ恋だ。」

「へ？」

「うんうん、ついにルイコに春が来たのか。」

「おめでとう！私、応援しているからね！！」

何だか話が脱線している事によりやく気付いた佐天だがもう修復は不可能なくらい脱線していた。

佐天は分かっていた、これは恋ではなく純粋な憧れである事を。

同級生達が佐天を置いて話を進めている事に気づきその拡大を防ぎつつどこに行くか話し合う。

楽しく話している佐天達の後をつけるかのように一人の男が笑みを浮かべながら佐天達を見ていた。

「なるほど、麻生さんも無能力者狩りに出くわしたんですね。」

麻生は風紀委員^{ジャツジメント}の支部にいた。

何故かと言うと昨日、麻生も無能力者狩りに出くわしそれをどうにかして止める為に風紀委員^{ジャツジメント}の支部に訪れて情報を交換し合いに来たのだ。

例の如く、支部には初春と白井がいた。

「他の風紀委員^{ジャツジメント}が現場に向かった時にはその能力者達は既にどこかに逃走したようでした。」

「おそらく無能力者に倒された時の事を考えて実行班と回収班の二

つのグループに分けて行動しているのだろう。

捕まれば読心能力サイコメトリーなどの能力者に記憶を覗かれてしまったらそこでゲームオーバーだからな。」

「相手はわたくし達が思っている以上に大きな組織のようですわね。それにしても珍しいですわね、麻生さんが自分からこの支部に訪ねてくるなんて。」

以前の麻生がどういった人物なのか少し知っている白井からすれば麻生の行動はらしくない行動なのだ。

白井の問いかけに麻生は少しだけため息を吐いて答える。

「俺だってこんな面倒な事に関わりたくなかったが無能力者狩りが続いている限り散歩の邪魔をされてしまう可能性があるからな。」

お前達の為でなく自分の為に動いているんだよ。」

麻生の答えに白井はしばし麻生の顔を見つめている。

「なんだ、俺の顔に何かついてるのか？」

「い、いえ、何も・・・」

そう言って白井は初春の首根っこを掴み麻生と距離をとり初春にか聞こえない声で話し合う。

「あのお方に何かあったのですか？」

以前とはまるっきり別人の様ですわよ。」

「私も同じ事を思いました。」

でも、前の麻生さんより私はこっちの麻生さんの方が良いです。」

「それに関してはわたくしも同意しますが、急な変化に驚いて「何が驚いているんだ？」・・・ひゃあ!！」

いつの間にか白井と初春の後ろに麻生が立っていて声をかけられたので驚く白井。

「な、なにも驚いていませんわよ。

さ、さて、作戦会議でもしますわよ。」

急に話を変えられたので麻生は怪しいと思ったがどうでもいい事だな、と考え近くにある机に腰を預ける。

「まず、わたくし達が調査する事は二つ。

一つ目はどうやって無能力者と能力者と見分けているのか。

二つ目は組織の規模、その目的。」

「見分ける方法について何かわかったか？」

「いえ、候補が何個か上がったのですが詳しく調べてたらてんでの外れでした。」

「見分け方が分かればそれを辿って組織などの詳細が分かるのですが。」

麻生は捜査がそれほど進んでいない事に二人に気づかれないようにため息を吐く。

しかし、幻想御手の件は木山の単独の犯行だったので操作があまり進まなかったが今回は明らかに組織的な犯行。

なのに捜査が進まないという事は相手はかなりの頭がきれるという

事だ。

「地道の捜査しかありませんね。」

「そうですね。」

ですが、わたくし達が路地に入ってわざわざ巡回しているのに無能力者狩りの犯行は一度も出会っていませんの。

逆にわたくし達が巡回していない所で犯行が行われていますの。まるで、わたくし達の行動を先読みしているかのようですわね。」

「・・・・・・・・」

初春は白井の推測に笑いながら否定しているが麻生はある推測が浮かぶ。

麻生は初春にある疑問を尋ねる。

「初春、ジャツジメント風紀委員達が巡回する路地や時間などは全員で打ち合わせしているのか？」

「はい、全員で決めた後その資料を配るといった形ですね。」

「あともう一つ・・・・・・・・」

「確かに可能ですけど・・・・・・・・」

「そうか、分かった。」

麻生はそう言って立ち上がり支部から出て行こうとする。

「何か分かったのですの？」

「まだ仮説の段階だ。」

少し調べに行ってくる。」

そう言って麻生は支部を出て行った。

佐天達は喫茶店でくつろぎながらおしゃべりをするなどして楽しんでいた。

すると同級生の一人がある事件について話題を出した。

「最近、無能力者狩りって言うのが流行っているらしいよ。」

「何それ？」

「何か能力者達が無能力者を倒してその倒した数とかを点数にしてその順位を決めるらしいよ。」

一位になった能力者は賞金としてお金がもらえるらしいよ。」

「何かそれ最低だね。」

能力をそんな事に使うなんて。」

佐天も同じ感想を抱いている。

外を見ると日も暮れ始めているのでそろそろ帰ろうと言う話になった。

さっきの無能力者狩りみたいな事件が起こっているので暗くなると何かと危ないのだ。

皆で帰っていると突然、男が佐天達の前に立ちはだかった。

「やあ、こんばんは。」

優しく笑いながら佐天達に話しかけてくる。

同級生達は見た目はなかなかカッコいいので話しかけられて少し浮き足立っているが佐天はその男の笑顔がなぜか怪しく感じた。

「君達、これから時間空いている？」

「えーと、少しだけなら。」

「ならこれから僕達と一緒に遊ばないか？」

男がそう言うとなんか男がいつの間にか佐天の周りを取り囲んでいた。

佐天達はとても嫌な予感がした。

そしてその予感が見事に的中する。

「遊ぶ内容は無能力者狩りっていう遊びなんだ。」

「ッ！？皆、逃げるよ！！」

男の言葉を聞いて佐天は素早く行動する。

佐天の言葉を聞いてみんな佐天の後についていく。

周りは囲まれているが路地に入る道だけ開いていたのでそこに駆け込む。

男達は佐天達が路地に逃げられたのにも関わらず笑みを浮かべてい

た。

佐天に話しかけた男がポケットから携帯を取り出して誰かと通話する。

「ああ、予定通り路地に追い込んだ。

後はそちらで誘導を頼むぞ。」

そう言って電話を切ると何人かは佐天達を追いかけて行き、他の男達は路地とは別の道を通っていた。

第24話（後書き）

オリジナル宝具、それ以外の戦闘手段、意見や質問、改善点など募集しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2730w/>

とある星の力を使いし者

2011年10月8日21時01分発行